

ダークソウル あれ？

BANG (いつか帰るところ)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ダークソウルの不死人と蜘蛛姫のなんやかんや

原作重視の方は避けた方がよろしいかと思えます。というか原作あまり関係ないかと。

短編で会話メインです。どこから読んでもあまり問題はありませんが、順番読みを推奨です。

救いのない蜘蛛姫ですが、この世界だけでも楽しいことがあってもいいんじゃないかな？との思いで投稿しています。

お目汚しです。

目次

ダークソウル	邂逅編	1
ダークソウル	即死編	6
ダークソウル	哀戦士編	15
ダークソウル	美名編	22
ダークソウル	使命編	28
ダークソウル	我儘編	37
ダークソウル	回顧編	47
ダークソウル	名刀編	54
ダークソウル	選択編	60
ダークソウル	屑夫編	68
ダークソウル	悲哀編	78

ダークソウル	略奪編	90
ダークソウル	八方塞編	97
ダークソウル	夢見少女編	109
ダークソウル	混沌刃編	117
ダークソウル	謝罪編	142
ダークソウル	恋愛指南編	148
ダークソウル	師弟編	154
ダークソウル	絆編	165
ダークソウル	服飾編	172
ダークソウル	悪霊編	178
ダークソウル	一番星編	187
ダークソウル	解明編	192
ダークソウル	擬態編	206

ダークソウル 邂逅編

ダークソウル

麗しき白い蜘蛛姫

邂逅編

不死人「ぜはっぜはっ、ぜはっぜはーっ……」

不死人「なんだよ……あのクラークとか言う魔女……」

不死人「上半身はエロいお姉ちゃんのかせに、全然仲良くなるルートがねえじゃんかよ……」

不死人「何回、プレゼント差し出しても問答無用で殺しに来るしさー」

不死人「お陰様で、おっぱいプルンプルン見ながら、何回も殺られちゃったよ……」
不死人「はあ……」ガツクリ

回想 クラークとの激闘

不死人「待って！待って！ウエイトウエイト!!」

クラーク「なんじゃ、うぬは！何度も何度も何度も何度も何度も！何がしたいんじゃ!!」

不死人「だーかーらー、お姉さんと戦う気はねーっての!」

クラーク「では立ち去れいっ!」

不死人「いやいや、だから、ここに入ると何か白いモヤが出入口を塞いで出入り出来なくなってるのよ」

クラーク「うむ、そういう仕様じゃ」

不死人「それ、棲みかとしてどうなの？オートロックの入りのみ有効、鍵無しだよね」
クラーク「それ故、家賃はかなり安いぞ」

不死人「賃貸なんだ・・・」

クラーク「WiFiあるし」

不死人「マジで?!」

クラーク「・・・はあ、興が削がれるわい・・・貴様、何が目的で来訪するのじゃ」

不死人「え？まあ、ここ通らないと次のステージ行けないっばいから来てただけだよ・・・」

クラーク「人ん家、通り道にするなよ」

不死人「まあ、そうなんですけどね・・・けど、お姉さんと出会って、そんなのどうでも良くなつたみたいな・・・」

クラーク「・・・へ？」ドキン

不死人「うん、お姉さんに会いに来るのが目的になつてたな」

クラーク「は、はあ?!わ、私、上は人間じゃがつ!下は蜘蛛ではないかつ!」ドキドキ

不死人「は?そんなの関係ないね」

クラーク「・・・ほ、本当、かの?!」ドキドキドキドキ

不死人「だいたい、下半身なんざ飾りですよ飾り!ジオンのメカニックも言つてたでしよ?ジークジオン!!いやまあ、スラリとしてムツチリとした美脚も捨てがたいですよ?否定はしませんよ?パンストなんかで攻撃力アップですよ?でもね・・・でもね、僕は声を大にして叫びたい!おっぱいが全てであると!敢えて言いますよ、おっぱい以外はカスである!!お姉さんの下半身が蜘蛛?だからどうしたつ!!上半身は立派な美人さんではないか!!つまり、おっぱいは存在するつ!!そこになんの不備がある?いや、無い!ナツシング!しかもお姉さんのおっぱいは肌は白く、優にFカップを越えるパイパイちゃん!しかもツンと上向きの吊り鐘型!ブラボー!ブラボー!ブラボー!ブラッラーッ

「ボオーツツ!!（ここで脳内観衆が歓喜のスタンディングオーバーション&舞い散る紙吹雪と大歓声）更にプルンプルン弾むおっぱいの先つちよにあるツンツン乳首ちやんはまごう事なきまつピンク! ピーピンクツ!! 何度も何度もお姉さんに吹っ飛ばされながら、僕はお姉さんのおっぱいーぬに釘付けでした、プルンプルン弾むおっぱいーぬに瞳を奪われていました・・・それで途中から気がついたんです、ああ、お姉さんも僕におっぱいを見せたくて、あんな大きく振りかぶるような攻撃してくるんだなーって、恥ずかしいけど僕におっぱい見せたくてたまらないんだろうなーって、それに気が付いてからはウエディングケーキにナイフを入れるがごとき、僕とお姉さんの二人の愛の共同作業でしたよね!」

クラーク「・・・」

不死人「ね?」

クラーク「悪即斬つつつつ!!!!」

不死人「僕は悪かよ! このやろーっ!!」

回想終る

不死人「くそつ、何回も何回も往き来してる間にレベル上がってたんだな」

不死人「お姉さん、間違つて倒しちゃった・・・」

不死人「くそ、くそ、うろう・・・パイパイちゃん・・・ぐす」

不死人「くそそう・・・取り敢えず、先に進んで見るか・・・」

不死人「ん？ここ、隠し通路・・・か？」

不死人「行つてみるか・・・」

不死人「はあ」

この不死人がトボトボと歩くはクラークが妹、【麗しき白い蜘蛛姫】に通じる秘密の抜け道、次回不死人と蜘蛛姫との邂逅か!!

ダークソウル 即死編

ダークソウル 即死編

見解の相違から魔女クラークを激闘の末、撃破した不死人、クラークが妹の蜘蛛姫へと通じる隠し通路を進む・・・

不死人「てな訳で、篝火（かがりび）発見、人間性使って取り敢えず灯そう」

篝火 ボツ！

不死人「うん、これで殺られてもここに戻って来るわけね・・・」

不死人「で、さつきから、壁際に蜘蛛の足とか胴体とかグチャグチャになったオブジェの上にチヨコーンと裸の白い娘の上半身が乗ってるのが、目の隅に入ってたよな・・・」

不死人「下半身蜘蛛、上半身裸のネーちゃんって、さつきの魔女の関係者だよな」

不死人「襲ってくる感じじゃねーし、ウーン」

蜘蛛姫「・・・」

不死人「取り敢えず、話してみるか、上は裸のネーちゃんだしね」

不死人「あー、えつと、こんにちわ?」

蜘蛛姫「・・・」

不死人「お話し良いですか?」

蜘蛛姫「・・・~~×~~~~×~~○—「×\$◎☆~~×~~*?」

不死人「ん?」

蜘蛛姫「・・・~~×~~\$「—☆◎\$?」

不死人「あー、これ駄目なパターンだ・・・」

蜘蛛姫「◎→↑△○」

不死人「うーん」

蜘蛛姫「→→←←↑↑↓↓BAS」

不死人「隠しコマンド?!」

蜘蛛姫「?」

不死人「今、往年の隠しコマンド言ったよね?!グラディウスのやつ!」

蜘蛛姫「？」

不死人「あれー？」

蜘蛛姫「☆○△☆〔 〇 〕

不死人「偶然？・・・か？」

蜘蛛姫「・・・←→K ？」

不死人「サマーソルトキックだよねっ?!」

蜘蛛姫「？」

不死人「いやいやいや、言った言った、明らかにコマンドだったって!!」

蜘蛛姫「・・・\$×|×△☆!!」

不死人「1回ならともかく、2回連続で偶然は無いつて!!」

蜘蛛姫「!→〔・◇●●▽⊆?!!〕!」

不死人「いや、もう分かってるって!話せるよね?!」

蜘蛛姫「.....

ちっ

不死人「舌打ちされた?!」

蜘蛛姫「・・・死んで下さい」

不死人「結構流暢に死を願われた!!」

蜘蛛姫「もうっ！魔物なんだから言葉が通じない方がミステリアスなのっ！」

不死人「いや、そんな自分設定叫ばれても」

蜘蛛姫「それをさっさと立ち去れば良いのに、あーだこーだ構ってきて！もうっ！」

不死人「いや、まあ、悪かったよ、ちよつと話してみたかっただけだからさ」

蜘蛛姫「・・・ふっ、あーなるほどなるほど、な・る・ほ・ど」

不死人「お、鼻で笑って偉そうに腕組んだ・・・」

蜘蛛姫「・・・まあ、分かるよキミイ・・・」

不死人「ん？」

蜘蛛姫「魔物とは言え、儂げで可愛い私とお近づきになりたかったんだよね？」

不死人「？」

蜘蛛姫「まあ、まあまあ、その気持ちは分からなくもないよ？」

不死人「いや、全然、これっぽっちも、ほら、君、美人さんだけど、凄く儂げで綺麗

だけど、おっぱい、ちっぱいし」モミモミモミモミモミモミモミモミモミモミ

モミモミモミモミモミモミモミモミモミモミモミモミモミモミモミモミ

モミモミモミモミモミモミモミモミモミモミモミモミモミモミモミモミ

蜘蛛姫「」

不死人「ね、触っても、揉むと言うよりは摘まむと言った方が良くらいだし、何か

蜘蛛姫「いきなり、人のお、おっ、胸を触るって何考えてんのよっ！変態変態!!」

不死人「いや、目の前におっぱいがあれば、たとえちっぱいでも触るのが男のたしなみだよ」

蜘蛛姫「ちっぱいって言うなーっっっ!!!」

ザクツ

不死人「ぶべら」

篝火 死んで篝火に戻る

不死人「うわっ！てめえ何すんだよっ!!」

蜘蛛姫「人のことを、ち、ちっ、ちっぱい・・・なんて言うからよ」

不死人「違うのか？」

蜘蛛姫「え？」

不死人「お前はポインポインなのか？肩が凝るのか？ブラ選びが大変なのか？え？愛と勇気と知恵が詰まっているのか？どうなんだ？」

蜘蛛姫「ち、違うけど・・・でもっ！でもっ！」

不死人「ふん、カスが!!」ペッ

蜘蛛姫「」

ザクツ

不死人「あうん」

篝火 死んで篝火に戻る

ザクツ

不死人「ふぐう」

篝火 死んで篝火に戻る

ザクツ

不死人「ま、までえつ」

篝火 死んで篝火に戻る

ザクツ

!!!!!!

篝火 死んで篝火に戻る

ザクツ!!!!

不死人「ひぐつ」

篝火 死んで篝火に戻る

ザクツ!!!!

不死人「」

篝火 死んで篝火に戻る

篝火 死んで篝火に戻る

篝火 死んで

篝火

篝火

ダークソウル 哀戦士編

ダークソウル 哀戦士編

不死人「皆様どう思いますか、はめ殺し？」

不死人「死んで復活する篝火近くで構えて、こちらの意識も定まらぬ間にグチャリと一撃必殺、ええ、必ず殺すの必殺です」

不死人「そしてまた、復活したところをグチャリと・・・」

不死人「楽しいのか？と、それで満足なのか？と、僕は声を大にしていきたい！」

蜘蛛姫「あースツとした」

不死人「お前なあ・・・」

蜘蛛姫「何よ、止めてあげたんだから感謝してよね」

不死人「馬鹿野郎っ！死ぬ気でローリングして逃げたんだっ！！ギリギリで蜘蛛の足が地面を抉ってたっの！」

蜘蛛姫「泣き叫びながらローリングって初めて見た」

不死人「でしようよ!!」

蜘蛛姫「けど、あなたも私に失礼なこと言つて、む、胸まで揉んだんだからね！」

不死人「」

蜘蛛姫「何よ」

不死人「」

蜘蛛姫「何か言いなさいよ」

不死人「・・・ごめんなさい」

蜘蛛姫「意外に素直?！」

不死人「いや、よく考えたらあれは無いよね、ひどいよね」

蜘蛛姫「う・・・まあ、そうよ、ひどいのよ」

不死人「うん、あれは悪かった、はめ殺しされても文句は言えないね」

蜘蛛姫「うう、う、わ、私もやり過ぎたかも・・・」

不死人「じゃあお互い様ということで、握手？」

蜘蛛姫「うー、握手・・・」

ニギニギ

不死人「あ、さつき、君そつくりの下半身蜘蛛の女の人倒しちゃった、知り合い？だつ

たらごめんね」

蜘蛛姫「なんでそんなことするのーっ！」ギリギリギリギリギリギリ

不死人「痛いっ！痛い痛い痛いっ！て、手っ！手がっ!!」

蜘蛛姫「お姉ちゃんじゃーんっ!!」ギリギリギリギリギリギリ

不死人「痛い痛い痛いっ!!手が潰れるっ!!」

蜘蛛姫「うわーんっ!!!」ギリギリギリギリギリギリギリギリギリギリギリギリギリギリギリギリ

不死人「減ってるからっ！僕のライフゲージが握手でギョングン減ってるからっ!!!
握手で死ぬって、いくらダークソウルでも有り得ないから!!」

篝火 死んで篝火に戻る

蜘蛛姫「うう・・・ぐすっ」

不死人「いや、悪かったよ、でもさ・・・」

蜘蛛姫「・・・分かってる」

不死人「？」

蜘蛛姫「お姉ちゃん、聞く耳持たないで、襲ってきたんでしょ？」

不死人「多少は聞いてくれたんだけどね・・・ごめん」

蜘蛛姫「・・・いつか、こんな事になるのは分かってたのよ、でも・・・」

不死人「うん」

蜘蛛姫「お姉ちゃん・・・」

不死人「良いおっぱいだったなあ・・・」

蜘蛛姫「死んで下さい」

ザクツ
!!!!

不死人「はむん」

篝火 死んで篝火に戻る

不死人「蜘蛛の足で頭を貫くのを止めろっ!!」

蜘蛛姫「人のお姉ちゃんやつつけといて、何よ!」

不死人「う・・・まあ、そうだけど・・・」

蜘蛛姫「はあ・・・お姉ちゃんもまさかこんなゴミみたいな輩にやられるとは・・・」

不死人「ゴミ呼ばわり・・・でもさ」

蜘蛛姫「何よ」

不死人「勝手な理屈かもだけど僕もお姉ちゃんもお互いに殺るか殺られるかの覚悟で戦ったんだよ」

蜘蛛姫「……」

不死人「僕は不死人だけど、いつかは死の輪廻に墜ちて、亡者になる定めだけど、生者の残骸だけでも、お姉ちゃんとは残り少ない命を懸けて戦ったんだよ」

蜘蛛姫「……」

不死人「だから、泣いている君にはごめんなさいだけど、お姉ちゃんに謝るのはおかししい、だから謝らない」

蜘蛛姫「何よそれ……」

不死人「まあ、いつかどこかでまた会えるなら、今度は仲良くやるさ」

蜘蛛姫「訳分かんない……」

不死人「言っている僕も分からない……」

蜘蛛姫「はあ、もう、いい」

不死人「ん？」

蜘蛛姫「お姉ちゃん、多分、誰かに殺られたくて、この世界から逃れたくてね、誰彼構わず戦いを仕掛けてたしね……最後があなただったってだけ……多分」

不死人「だと良いけど」

蜘蛛姫「じゃあ、はい」

不死人「ん？」

蜘蛛姫「握手」

不死人「あー、うん」

ニギニギ

不死人「・・・ん？」

蜘蛛姫「何よ」

不死人「・・・お前、結構可愛い？」

蜘蛛姫「へ？」

不死人「あれ、マジで好みだ、ドストライクだ」

蜘蛛姫「え？へ？は？」

不死人「なのになんで、ちっばいなんだよおおっ!!!」ギリギリギリギリギリギリ

ギリギリギリ

蜘蛛姫「痛い痛いっ!!手が痛いっ!!」

不死人「なんでえなんでっ!!」ギリギリギリギリギリギリギリギリギリギリギリ

リギリギリギリギリ

蜘蛛姫「痛いっ!!とても理不尽な理由で!!痛い痛い痛いっ!!」

ダークソウル 美名編

ダークソウル 美名編

不死人「ところでさ」

蜘蛛姫「うん」

不死人「お前って篝火の・・・」

蜘蛛姫「ちよつとお待ちなさい」

不死人「ん？」

蜘蛛姫「お前」呼ばわりは、ちよつとイラツてするかも、なんか見下されている感があるかも」

不死人「えー」

蜘蛛姫「止めてほしいかなー」

不死人「それじゃあ、なんて呼んで欲しいの？」

蜘蛛姫「んー、特に希望はないけど・・・」

不死人「めんどくせえ・・・じゃあ、エスサイズ」

蜘蛛姫「うりや！」

不死人「危ねえっ!!」

ガキンツ!!!

蜘蛛姫「お、生意気に剣で受け止めたね」

不死人「突っ込みが即死攻撃っの辞めて!!」

蜘蛛姫「ふん、失礼なことを言うからよ」

不死人「いやいや、いやいやっ、お姉ちゃんに比べて小さくて可愛いからリトルだよ?!」
「なんか別の意味に捉えてない?」

蜘蛛姫「え?え?そうなの?」

不死人「全く・・・そのなだからかーなオツパイを可愛く、婉曲に表現してやったのに」
蜘蛛姫「誠心誠意、意味は捉えてたわっっ!!」

不死人「どわっ!!!」

ガキンツ!!!ガキンツ!!!

蜘蛛姫「へえ、上下同時攻撃を受け止めたわね・・・」

不死人「待て待て、止めろっ！もうスタミナがカラッポだっ！動けなくなってるから！」

蜘蛛姫「チャーンズ」

不死人「真面目に考えるからっ！ねっ！ほら、僕ってこんな可愛くて可憐で、夢げで素敵な女の子とお話しできる事なんてないから、舞い上がってましたっ！浮かれていましたっ！だから、その尖った蜘蛛の足で僕の心臓付近に狙いをつけるのは止めてくださいっ！！！」

蜘蛛姫「うっ・・・ま、まあ、分かれば良いのよ」

不死人「(チヨロインか・・・)」

蜘蛛姫「今、なんか嫌な気分になった」

不死人「大丈夫です、気のせいです」

蜘蛛姫「・・・ふん、まあいいわ、で？」

不死人「へ？」

蜘蛛姫「私の呼び名はどうするの？」

不死人「あー・・・んー・・・呼び方ねえ・・・ちなみに他の人からはなんて呼ばれてんの？」

蜘蛛姫「黙秘します」

不死人「え？」

蜘蛛姫「黙秘します」

不死人「えつとね」

蜘蛛姫「黙秘します、当番弁護士を呼んでください」

不死人「弁護士って言わず、当番弁護士って言うてる時点で、経験のある輩だよね」

蜘蛛姫「黙秘します、当番弁護士を呼んでください、弁護士協会に申請書をファック

スしてください」

不死人「どんな経験してきたの?!」

蜘蛛姫「資産はありません、50万円以下です、国費でお願いします」

不死人「詳しくすぎるよっ!」

蜘蛛姫「以上です、当番弁護士と接見するまで、弁録にも調書にも署名指印しません」

不死人「……」

蜘蛛姫「……」

不死人「……まあいいよ、自分でググるよ……」

蜘蛛姫「……」

不死人「えつと……どれどれ」

蜘蛛姫

卵姫

混沌の娘

ちっばい姫

残念無双姫

お姉ちゃんに養分取られた姫

なだらか姫

白い洗濯板

・
・
・

不死人「うん、自分で考えて決めてよ！」

蜘蛛姫「分かって貰えて嬉しいわ！」

不死人「けど、呼び方を変えらると、蜘蛛姫の表記も変えなきゃだね」

蜘蛛姫「?ひょうき？」

不死人「そう、台詞の前に名前が出てるじゃん」

蜘蛛姫「↑これの事？」

不死人「そうそう、あまり長くなると見栄えが悪いじゃん」

蜘蛛姫「そなの？」

不死人「うーん、例えば僕の名前でやるとき・・・」

蜘蛛姫「あー、不死人ってなってるどころね」

ラインハルト・フォン・ローエングラム「こんな感じになっちゃう」

蜘蛛姫「銀英伝?!」

ダークソウル 使命編

ダークソウル 使命編

不死人「いやー、閲覧数が結構伸びてんなあ」

蜘蛛姫「ふふん」

不死人「いやいや、ダークソウルのネームバリューのお陰だからね？」

蜘蛛姫「私でしょ？私の人気に便乗してるでしょ？」フンス

不死人「うわ、小娘のドヤ顔うぜえ」

蜘蛛姫「夢げで無垢な少女の悲哀のストーリーに長兄様方も御満悦よ」

不死人「だったら、こんな内容のエスエスだったら、1話以降誰も見なくなるよな、あの意味真逆だし」

蜘蛛姫「そうだった」

不死人「閲覧数も回を追う毎に減っていくな、多分」

蜘蛛姫「かもしれない、まずい、ドヤ顔してる場合じゃなかった」

不死人「今更だけどね」

蜘蛛姫「アへ顔？」

不死人「僕ならそつとバックキーを押すよ・・・」

蜘蛛姫「ダブルピース？」

不死人「どんだん泥沼にはまっていつてゐるって気が付こうよ！」

蜘蛛姫「まあ、私んち、最下層の毒の沼地エリアだし」

不死人「いや、だからって自身が人生の泥沼にはまる必要はないけどね・・・そういや、ここに来るまで大変だったなー」

蜘蛛姫「そなの？」

不死人「結構トライアンドエラーでさ、直ぐに転落死するし、敵の攻撃でガンガン体力削られるしさ」

蜘蛛姫「へー、でもさ、ここまでたどり着けたってことは火守女に魂使ったんでしょ？色々強化してるでしょ？」

不死人「ひ、ひもりめ？」

蜘蛛姫「あ、こいつ世界観分かってない奴だ」

不死人「あれ？なんか間違ってる？ミステイク？」

蜘蛛姫「イエス」

不死人「マジで?!」

蜘蛛姫「あのさ、アンタが持つてるエスト瓶つてあるじゃん？」

不死人「あるよ、体力が多少回復するやつ」

蜘蛛姫「火守女に火守女の魂を使うとエスト瓶が強化されるよ？」

不死人「マジで!？」

蜘蛛姫「更に、その強化は重ねてドンドンパワーアップしてくよ？」

不死人「リ、リアリー？」

蜘蛛姫「イエス、シユアー」

不死人「マジかよ・・・そんなの誰も教えてくれなかった・・・」

蜘蛛姫「ポツチの悲劇」

不死人「うるせー、くそ、あれ、火守女つて最初にいた牢屋に入ってた女の人かな？」

あそこに行きやいいんだな」

蜘蛛姫「火守女の魂持つてるの？」

不死人「うん、なんか教会みたいなの所に落ちてた、この白い綿毛みたいなのでしょ？」

蜘蛛姫「そうそう、それ」

不死人「うわ、マジか、最初の所まで戻んのかつて結構大変だな・・・けど、行かない

ときついしな」

蜘蛛姫「ふふん」

不死人「なんでドヤ顔？火守女の事知ってたから？そんなの常識なんですよ？物知らずな僕に教えたからって偉くないよ？ある意味義務だよ？」

蜘蛛姫「うわ、こいつ最悪だ」

不死人「ふん、まあ良い、まあ良い、ちよつとエスト瓶強化に行つてくるわ、まあ気が向いたらまた顔を出してやるからよ」

蜘蛛姫「・・・火守女つてさ、篝火を守つてるんだよね」

不死人「なんだよ、急に話始めて、寂しいの？なんだ可愛いところもあるんだ、もつと居て欲しいの？土下座で頼んでみる？」

蜘蛛姫「そこでチロチロ燃えているもの、なーんだ？」

不死人「え・・・篝火だけ・・・」

蜘蛛姫「私、篝火、守つてんだよね」

不死人「・・・うん」

蜘蛛姫「篝火を守る人のことを何て言うのかな？」

不死人「ひ、火守女・・・」

蜘蛛姫「だよね」

不死人「どうか！エスト瓶を強化して下さいっっ!!!」土下座!!

蜘蛛姫「迷いのない土下座だ！」

不死人「火守女様とは露知らず！今までのご無礼は平につ！平らにご容赦のほどをつ
!!!」ゴリゴリゴリ

蜘蛛姫「いやいや、額を地面に押し付けすぎだつて、血が出てるよ・・・」

不死人「お願いしますっ！お願いしますっ！ねっ！ねっ！お願い！ねーねーねー」ガ
バツ、スリスリスリスリスリスリスリスリスリス

蜘蛛姫「やつ、ちよ、抱きつくくなーっ!!すがるなーっ!!」

不死人「ねっねっねっ、お願いお願いっ、頼むよっ、男にしてくれよー、ここで暮ら
すからさー」サワサワサワサワサワサワサワサワサワ

蜘蛛姫「お願いが違う趣旨になつてるよーっ!!」

不死人「お願いお願いお願いしますっ！」モミモミモミモミモミモミモミモミモミ
ミモミモミモミモミ

蜘蛛姫「ぶぎやーっ!!わ、分かったからっ！離れろーっ!!!」

不死人「やったね」

蜘蛛姫「こ、こいつ・・・」

不死人「で、で、この火守女の魂を使うの？」

蜘蛛姫「全くっ！変態！・・・もうっ！そうよっ、その魂を私に捧げ・・・」

不死人「おりゃあ！」

不死人 火守女の魂を使う

蜘蛛姫 「へ？」

不死人 「うおーっ！所持ソウルが増えてる！すげえ」

蜘蛛姫 「あ・・・」

不死人 「これでレベルアップできるぜ！このソウル量だと、数回レベルが上がるよ」

蜘蛛姫 「あ、あ、あ・・・」

不死人 「これでエスト瓶も強化されてるんだよねっ？」

蜘蛛姫 「あ、あ・・・」

不死人 「あ？」

蜘蛛姫 「あほかーっっっ」

不死人 「へ？」

!!!!!!!

蜘蛛姫 「なに魂を使っちゃってんのっ!!それは火守女の私に捧げなきや駄目なんだっ

てっ!!」

不死人 「え？」

蜘蛛姫 「捧げずに単に使うだけだとソウルが増えるだけなのっ!!」

不死人「・・・マジ？」

蜘蛛姫「あーあ」

不死人「え、でも、火守女に使ったよ・・・？」

蜘蛛姫「私の前で、自分に使っただけじゃん・・・私に捧げてないじゃん」

不死人「ちゃんと説明しろーっっ!!」

蜘蛛姫「馬鹿が説明する前に勝手に判断して動くなーっ!!」

不死人「馬鹿だけど馬鹿って言うなー! うわーん」

蜘蛛姫「あ、自覚はしてたんだ」

不死人「うわーん! えーん!」

蜘蛛姫「うわー、ガン泣きしてる」

不死人「いつもだよっ! 僕の人生こんなのばっかだーっ!! ぴぎやーっ!」

蜘蛛姫「まあ、馬鹿なんだから、先ずは人の話を聞いて、分からないことは尋ねる所

から始めてみよう、ね」

不死人「また馬鹿って言ったー! しかも優しく注意されたー!!」

蜘蛛姫「あー、ごめんごめん」

不死人「うー・・・ま、仕方ないか」

蜘蛛姫「うわ、立ち直り早っ」

不死人「まーね、これってやり直し出来ないんでしょ？」

蜘蛛姫「うん、出来ない」

不死人「じゃあ仕方ないや、諦める」

蜘蛛姫「まあ、また火守女の魂があるかもだから、次はちゃんと捧げてよ？」

不死人「次も使うとウケるよね」

蜘蛛姫「それで満足なら、別にいいけどき……」

不死人「嘘、嘘、次はちゃんと捧げるよ……ん？……火守女の魂？」

蜘蛛姫「？」

不死人「あなた火守女？」

蜘蛛姫「うん、火守女」

不死人「え、殺つちやうと魂ゲツト？」

蜘蛛姫「……をい」

不死人「……」

蜘蛛姫「……この野郎お」

不死人「馬鹿、嘘だよ、冗談冗談」

蜘蛛姫「はー？本当に？」

不死人「あのなー、僕が女の子殺して得したいタマかよ」

蜘蛛姫「・・・ふーん」

不死人「女あてがわれるよりも気分悪いよ、そんなの、馬鹿なりに矜持もあるの」

蜘蛛姫「格好つけてる・・・」

不死人「まあ女の子の前だし」

蜘蛛姫「・・・ふふ」

不死人「・・・ねえ」

蜘蛛姫「うん？」

不死人「慰めにオツパイ触って良い？さつき触ったら意外に趣があつた、もうちよつと確かめてみたいかも」

蜘蛛姫「台無しだよっ！」

ダークソウル 我儘編

ダークソウル 我儘編

蜘蛛姫「そこな従者」

不死人「・・・」

蜘蛛姫「うぬである、近こう寄れ」

不死人「御意」

蜘蛛姫「あ・・・乗ってくれるんだ」

不死人「うん、面白そうな事には乗っかることにしてる」

蜘蛛姫「うむ、大義である」

不死人「つて、藪から棒にどうした？」

蜘蛛姫「ほら、私って姫じゃん？」

不死人「え？そうなの？」

蜘蛛姫「へ？私、通称蜘蛛姫だし、姫って付いてるし」

不死人「ふんふん」

蜘蛛姫 「だから、お姫様らしくした方が良いのかなーって」

不死人 「ああ、キャラづけのことね」

蜘蛛姫 「あれ？私の思うところと違う意味に取られてるぞ」

不死人 「自分探し？」

蜘蛛姫 「あれー、なんか格好悪くなってる」

不死人 「自称姫でしょ？」

蜘蛛姫 「痛い人になった！」

不死人 「ごっこ遊び？」

蜘蛛姫 「うー・・・それでいい」

不死人 「いいんだ・・・」

蜘蛛姫 「では、わらわに人間性を献上せよ」

不死人 「こいつ、具体的な要求してきやがった・・・」

蜘蛛姫 「わらわは人間性を所望であるぞよ、ぞよであるぞよ」

不死人 「なんか言葉が崩壊してんぞ」

蜘蛛姫 「もーっ！人間性が欲しいのっ!!」

不死人 「単に要求になってるよ!?!姫は何処にいった？」

蜘蛛姫 「ほーしーいーのーっ！」

不死人「あー、もう分かった分かった、人間性だな」

蜘蛛姫「うん」

不死人「けど、改めて考えると、敵のドロップアイテムが人間性って訳分かんないよな」

蜘蛛姫「確かに」

不死人「しかもデカイネズミがドロップ」

蜘蛛姫「人間性って何なんだろうね」

不死人「あまり深く考えてもな・・・ところで人間性をどうするの？」

蜘蛛姫「へ？吸収・・・かな？」

不死人「吸収するの？」

蜘蛛姫「うん、それで・・・成長かな？」

不死人「なるほどね・・・よしっ！姫っ！しばしお待ちをつ!!」スタタタター

蜘蛛姫「え？あ！う、うん、いってらっしゃい」

蜘蛛姫 一人じゃんけんで暇を潰す

蜘蛛姫 200戦を越えた辺りで飽き始める

蜘蛛姫 自分の身体をペタペタと触ってみる

蜘蛛姫 おもむろにバストアップ体操を始める

蜘蛛姫 胸筋がパンプアップしたことで一定の効果を感じる

※感想は個人的な見解です。

蜘蛛姫 あれ、なんか寂しくない？とか感じ始める

蜘蛛姫 あいつ、何処まで行ってんのよとか感じ始める

蜘蛛姫 イライラし始める

蜘蛛姫 あいつ、私のこと馬鹿にしすぎとか怒れてくる

蜘蛛姫 帰ってきたら取り合えず一発殴ろうと決心する

蜘蛛姫 人としてどうなの？って剣呑な目付きになっちゃう

蜘蛛姫 あれ？とフト思う

蜘蛛姫 あいつ帰ってくるの？え、帰ってくるのよね・・・思わず呟く

蜘蛛姫 このまま帰ってこないかもとか思つて寂しくなってくる

蜘蛛姫 でもあいつなら帰ってくるよねとかも考える

蜘蛛姫 無性に不死人が恋しくなっちゃう

※諸兄、かように女とは自己の思考に自己を振り回し、こちらの思いもよらぬ結論に至つて己の感情を爆発させ我々を困惑させるのである。

諸兄、我々が出来るとは時間を味方に少し間を開ける事しかなく、自己の感情に振

り回される女に対して唯々諾々と頷き、全てを肯定するしかないのである。

諸兄、ゆめゆめ抗おうとされるな、其処には獣が互いに牙を刺すがごとき畜生修羅の世界しかないのである。

諸兄、諸兄、どうか寛大な心を。

不死人「ただいまー」

蜘蛛姫「あ……好きっ！」

ガキンツ!!!

不死人「告白されながら攻撃されたっ!!」

蜘蛛姫「うんうん、ちゃんと剣でガード出来るね、えらいえらい、遅かったけどまあ、いいや」

不死人「ちよつと待て、何がどうなっぺこうなっぺんだよ」

蜘蛛姫「ねえねえ、ねえねえキスしたい?」

不死人「お前の立ち位置が分からないっ！何があつたんだよ?!」

蜘蛛姫「さあね、よく分かんないや、お帰りなさい、で、人間性は?!」

不死人「おう、ご所望の人間性取ってきたぜ」

蜘蛛姫「やったね!」

不死人「はい」

不死人 人間性99個

蜘蛛姫「・・・そりや時間も掛かるよね・・・最大個数まで取ってんじゃん!」

不死人「ふ、単純作業は嫌いじゃないのさ」

蜘蛛姫「あー、頭使わなくて良いもんね」

不死人「はっはっは、苦もないね」

蜘蛛姫「お疲れ様」

不死人「それで、これをお前に捧げれば良いんだな?単に目の前で使うだけじゃ駄目なんだな」

蜘蛛姫「お、学習してる」

不死人「ふ、僕は日々成長する男だぜ」

蜘蛛姫 「まあ伸びしろはいっぱいありそうよねー」

不死人 「まあね、えっと、それじゃあ先ずは1個で試していい？」

蜘蛛姫 「? 良いけど」

不死人 「はい、人間性」

蜘蛛姫 「うん、ありがと、じゃあこれをギユツてして・・・」

不死人 「うんうん」

パシユン・・・

蜘蛛姫 人間性1個吸収

蜘蛛姫 「あー癒されるー」

不死人 「ん、成長・・・したのか？」

蜘蛛姫 「ん？」

不死人 「いや、1個じゃ分かんないか、じゃあ残りやってみるか」

蜘蛛姫 「うん！」

パシユンパシユンパシユンパシユンパシユン・・・

蜘蛛姫 人間性98個吸収

蜘蛛姫「ふぁー幸せー」

不死人「あれ・・・チップイまま・・・だよね・・・」

蜘蛛姫「あん？」

不死人「お前っ！ポインちゃんになる話はどうしたーっ!!」

蜘蛛姫「なんじゃそらっ！知るかっ!!」

不死人「えーっ!!成長すんじやねえの？そう言ったもん！」

蜘蛛姫「内面の成長はある」

不死人「嘘だーっ！」

蜘蛛姫「いや、嘘はついてないし」

不死人「え？ええ？ポインちゃんは？」

蜘蛛姫「慎ましいままです」

不死人「バインバイン？」

蜘蛛姫「ノーノー、あんなのただの飾りよ、脂肪よ、偉い人にはそれが分からんので

すよ？」

不死人「最終的にはパーフェクトジョングになってたよね」

蜘蛛姫「そうだった」

不死人「・・・ええええ」

蜘蛛姫「あ、真っ白に燃え尽きてる」

不死人「巨乳に・・・巨乳になるってっ！思ったのにつ!!」

蜘蛛姫「わー、血の涙・・・バストアップ体操やってるよ?」

不死人「それはお疲れ様だけでも、そんな痛ましい努力聞きたくない・・・」

蜘蛛姫「日々是努力よ、頑張ろう」

不死人「どれだけ気の長い話なんだよ・・・」

※諸姉、かように男とは己の欲望に振り回され、勝手な想像で無駄な努力をし、それが叶わぬと理解すれば絶望し怒るのである。

諸姉、貴女方の出来ることは、男をなだめすかして、その取るに足らない矜持の傷を癒してやる事だけである。

諸姉、諸姉、どうか、どうか寛大な慈悲の心を。

不死人「まあ、これはこれで味もあるしね」

蜘蛛姫「私のどの部位を見て話してる?」

ダークソウル 回顧編

ダークソウル 回顧編

不死人として、最初から不死人であった訳ではない。

元々は王家に仕える領主の若き騎士の一人であり、領主一族の一員として、若輩者なりに一翼を担っていた自負があった。

王家に関わるほどの爵位や地位があった訳ではないが、治める領地は守りきっていた。

それほど剣には自信がないけれども、魔法なんか炎の欠片すら出せないけど。

どこかの領主の様に、治める村が盗賊団や魔物に襲われても駆けつけず、領民が蹂躪されてから、ゆっくりと様子を見に行ったりはしない。

剣を片手にすぐ様に駆けつけて、抗い戦う村人達に混じった。

剣の腕は並み以下であったので、逆に領民に助けられることも多かったが、誰も若い騎士に不平など漏らさなかった。

「命の捨て時だっ!!今、命を捨てずにいつ捨てんだっ!!この野郎っつ!!」

お前達の為に命を捨ててやる、だからお前達も命を捨てろ、お前達の村だろう? 守るものがあるんだろう? 心配するな、一緒に死んでやる。

父親も不死人が小さな時に戦乱の刃に命を落とし、母親は死地に駆けていく不死人を見て悲しそうな嘆息を漏らしながら病に亡くなっていた。不死人には家族がいなく家庭がなく、失うものはそんなになかった。

先頭に立ち、相手の槍の切っ先がブスブスと鎧越しに身体に突き刺さろうとも、真っ先に敵に切り込んでいく。

突撃する集団の先頭に立ち続け、駆け続ける若い騎士。

【鼓舞】

その様なステータスが在れば、恐らくは振り切っていたであろう。

若い騎士に続く者達にも伝染する狂気のギラギラとした瞳、瞳、瞳。まるで不死人の闘争心が集団を包み込み、1つの生き物になっていく感覚を不死人は感じていた。快絶だった。まるで自分が別の生き物になったかのようにだった。

その不死人の闘争心に包まれた集団は相手にとって、問答無用の殺戮集団となり、敵は瞬く間に押し込まれ蹂躪されていく。そもその気概が違う。

村人が逃げ惑い、愉快に追い立てることを考えていた盗賊達は、突然襲い掛かってくる狂気の暴力集団に呆然とし、全身に刃物を貫かれる。

魔物はまるで家畜の様に捕獲され食われる。

多分、怒りや恐怖もあつただろうが快絶の中に混じって押し潰されていた。でなければ正気を保てなかった。

やがて集団は領民村人を巻き込んで、狂気の戦闘集団を形成し、皆、歴戦の強者となる。頭のネジが一本外れた集団が形成されていく。

戦闘が終われば、いつも全身血塗れになって大地に倒れ伏していた覚えがある。死の恐怖は感じなかった。

それでも、転がる遺体の中に見知った顔があれば胸がズキリとした。年端もいかぬ子ならば尚更だった。

戦いに狂っていたばかりではない、好意的に接してくれた娘もいた。文句を言いながらも若い騎士の味方でいてくれた、甘い台詞も囁いてくれた、目の前で敵の槍に喉を貫かれたけど。

夢を語った騎士仲間もいた、いつか騎士団長になって、もつと多くの領民を守ろうと

誓いあった、敵の斧で頭を潰され首を飛ばされてしまったけれど。

「坊主、絶体絶命でもギャグの一発くらいかまそうぜ」

そう言ったのは初老の屈強な村長だったか、皮肉屋の騎士団長だったか。その言葉を心に刻み込んだ。

でも、恐怖は狂気で塗り潰していたが、仲間達の死骸を踏み越える度に胸はズキリズキリと痛んだ。

だからだろうか、若い騎士の胸にダークリングが浮かび上がった。

不死人となり亡者へと至る印のダークリング。

不死人は、いつ理性のない亡者となり仲間を襲い掛かってくるか分からない、生者と暮らせない。

若い騎士は、仲間達が膝を折って嘆き、悔しげな顔をして、慟哭するのを聞く。

自分のことを悲しんでくれる人々を見て、我が身の事を忘れ、幸せな人生だなと感じた。

「ダークリング？絶体絶命？だからどうした。」

豊かな胸部の巫女に、最後だから胸を揉ませると言う抱きつかれて号泣され少し困った。結局胸は揉めなかった。

また、何処かで、じゃあな戦友、達者で。

そして亡者となる不死人が集められる世界へと自ら踏み込んだ。

最初に出会ったのは、

蜘蛛姫「おーい、戻ってこーい」

不死人「回顧中なのにつ！」

蜘蛛姫「なんか、ぼけーってしてたよ？」

不死人「してないよっ！昔を思い出してニヒルに不適な笑みを浮かべてたのっ！」

蜘蛛姫「村人Aなの？」

不死人「騎士だもん！」

蜘蛛姫「嘘だー、『ここはサマルトリアの村です』だけ言い続けるんでしょ?」

不死人「それ、村の入口にいる奴じゃん!」

蜘蛛姫「昨日はお楽しみのようでしたね」

不死人「懐かしいな!ドラクエのローラ姫を助けたままで宿屋に泊まった時の宿屋の主人の台詞だよね!」

蜘蛛姫「下世話だよね」

不死人「まーな、余計なお世話だよな、思わずもう一泊したけど」

蜘蛛姫「お盛んですね」

不死人「そんな台詞は言わない」

蜘蛛姫「そっか」

不死人「ちえ、歴戦の過去を思い出していたのに・・・」

蜘蛛姫「もうっ!そんなのはいいのっ!今は私と居るんだから、今の私とお話するのっ、めっ!」

不死人「・・・ははっ、そうか」

蜘蛛姫「そうだよ、だいたい過去の話なんかすると私なんかさ・・・」

不死人「ん?」

蜘蛛姫として生まれた時から下半身が蜘蛛、上半身が女性であったわけではない。栄華を極めた城塞都市の中心に位置する教会の

不死人「いや、エスエス1話に回顧録2個は詰め込みすぎだよ、冗長過ぎる」
蜘蛛姫「編集的に駄目出しされた!？」

ダークソウル 名刀編

ダークソウル 名刀編

蜘蛛姫「ねー、そう言えばさ」

不死人「うん？」

蜘蛛姫「私のツツコミを受け止めてるのって、あなたの武器なの？」

不死人「即死攻撃をツツコミって言うな」

蜘蛛姫「斬新なツツコミよね」

不死人「ツツコミと言うか、人の頭を突っ込み貫いてるけどね」

蜘蛛姫「ねえ、見せて見せて」

不死人「おいおい、これは僕の命みたいなもんなんだぜ、そう易々と女子供になんか……」

蜘蛛姫「うりゃ」

ガキンツ!!!

不死人「蜘蛛の足、やめてっ！」

蜘蛛姫「ほー、なかなか珍しい形の剣ねー」ギリギリギリギリ

不死人「やつやめろっ、罅迫り合いしながら武器を眺めないで！」

蜘蛛姫「だつて女子供だしー、そう易々と見せてもらえないしー」ガリガリガリガリ

不死人「是非っ、僕の命の武器を見て下さいっ」

蜘蛛姫「お願い？」ググググググググググググググググ、プツツ

不死人「さ、刺さってるっ！蜘蛛の足の先っぽが僕の頭に突き刺さり始めてるからっっ!!」

蜘蛛姫「お願いします？」グリグリグリグリグリグリグリグリグリグリグリグリ

不死人「はいっ！お願いしますっ!!どうか僕の刀をお手にとつてお確かめ下さいっ！」

蜘蛛姫「どれどれ」ヒョイ

不死人「ぜはっぜはっ、し、死ぬかと思つた・・・」

蜘蛛姫「ふーん、やつぱり普通の剣と形が違う」

不死人「そうだよ、刃も片側だけ、居合い刀だよ」

蜘蛛姫「凄いい切れそう」

不死人「ふ、僕の斬鉄剣さ」

蜘蛛姫「コンニャクは切れないんだね」

不死人「お前、よく知ってるな!!」

蜘蛛姫「あれ、でも私の蜘蛛の足、切られてないよね? ナマクラ?」

不死人「刃の無い峰(ミネ)で受けてるからだよ、ナマクラじゃない」

蜘蛛姫「へー・・・気を使ってくれてんだ・・・」

不死人「まーな」

蜘蛛姫「でへへ」

不死人「刀持ってニャけるな、怖いよ」

蜘蛛姫「別にいいじゃん、えっとこう持つのかな?」

不死人「そうそう、基本、左手の小指だけで持つ感じ、他の指は添えるだけ」

蜘蛛姫「こう?」ニギリ

不死人「うん」

蜘蛛姫「で、こうして振りかぶって・・・」グイ

不死人「・・・」

蜘蛛姫「振り下ろす」ポン

不死人「・・・」

蜘蛛姫「えい」プン

不死人「・・・」

蜘蛛姫「そい」プン

不死人「・・・」

蜘蛛姫「ふふふ、上手？」プン

不死人「・・・」

蜘蛛姫「？」プン

不死人「・・・」

蜘蛛姫「なによー、ジーっと見ちゃって、見とれてる？」

不死人「・・・あのさ」

蜘蛛姫「うん」

不死人「お前、いつも身体の前で、祈るようにして指組んでんじゃん」

蜘蛛姫「そうね」

不死人「刀を振りかぶって素振りすると、普段腕で隠れてたおっぱいが大解放、出血
大サービス状態だったよ？」

蜘蛛姫「んな!？」

不死人「しかも腕を上下するからそれなりに弾んでたし」

蜘蛛姫 「それなりとか言うなーっ!!」ブンツ

不死人 「危ねえ!」

蜘蛛姫 「避けるなっ!」

不死人 「避けるわっ!」って、僕めがけて刀を投げるなっ!」

蜘蛛姫 「もうっ!」どこ見てんのっ!」

不死人 「いや、あれだけ惜し気もなくおっぱいを晒されたら、見ちやうって」

蜘蛛姫 「くーっ!」

不死人 「女の子なんだから、恥じらいを持つとうね」

蜘蛛姫 「人のおっぱいガン見した奴に注意された・・・」

不死人 「じゃあ、水で濡れたT シャツ着てみようか」

蜘蛛姫 「なにが、じゃあ、なのよ、人にエロオプシオンを付けようとしないでよ・・・」

不死人 「触っていい?」

蜘蛛姫 「いいよって言う要素が何処にあると思った?なんでそう思っちゃった?」

不死人 「ないか・・・」

蜘蛛姫 「ある訳ないでしょ」

不死人 「そりゃ残念・・・あーあ、人の刀投げてくれちゃって」

蜘蛛姫 「斬鉄剣だから大丈夫でしょ」

不死人「いや、斬鉄剣って勝手に名付けただけだから・・・、刀って下手な切り方すると刃が伸びたり、刀そのものが反ったりするんだよ」

蜘蛛姫「そんなものなの？ やっぱりナマクラじゃん」

不死人「ナマクラじゃないよっ！ 結構苦労して手に入れたんだから」

蜘蛛姫「強い敵を倒してゲットだぜ？」

不死人「えーと、デカイ刃物振り回す大男に襲われてさ」

蜘蛛姫「うん」

不死人「ヤバイって、逃げ出したら足場から転げ落ちて、そしたらそこにあった」

蜘蛛姫「・・・しょぼい」

ダークソウル 選択編

ダークソウル 選択編

不死人「誓約は〔王女の守り〕の一択だよな」

蜘蛛姫「よし、歯を食い縛りなさい」

不死人「待て、待ちたまえ」

蜘蛛姫「えーと、逃げないように蜘蛛の足で掴んで……」グギユウ

不死人「ま、待てつて、は、離せつ、離せば分かるっ!!」

蜘蛛姫「話せば分かる、じゃないの？」

不死人「今は物理的な話をしてんだっ！」

蜘蛛姫「グーでポカンとやっちゃうぞー」

不死人「おい、自分の腕に沿って蜘蛛の足も構えるのはやめろっ！拳じゃなくて蜘蛛の足で殴る気満々じゃないかっ!!あと、殺っちゃうぞーつて聞こえるから」

蜘蛛姫「犯っちゃうぞー」

不死人「え？違法行為を？それともエロい事を？それによつて僕の対応も変わるけ

ど・・・」

蜘蛛姫「さあ、どちらだろうねー」

不死人「いや、待て、待って下さい！」

蜘蛛姫「なによ」

不死人「体を掴んでる蜘蛛の足が、何気に鎧を貫いて体にプスプス突き刺さって痛い
です」

蜘蛛姫「うん、分かってる」

不死人「分かってた?!」

蜘蛛姫「はあ・・・私の前で他の誓約者との話をするからよ・・・」

不死人「？」

蜘蛛姫「こ、こいつ・・・」

不死人「あ、なに、え、妬いちやったの？」

蜘蛛姫「私とも誓約出来るって知ってた？」

不死人「・・・マジ？」

蜘蛛姫「マジ」

不死人「へー」

蜘蛛姫「・・・(こいつ、誓約する気無いな)」グググググググググ

不死人「痛い痛いっ！体に蜘蛛の足が突き刺さってきてるっ！」

蜘蛛姫「しかも、よりによって王女の守り……」

不死人「分かった！分かったからっ！まずは離せっ、僕の話を聞けえ！」

蜘蛛姫「まあいいけど……」ポイ

不死人「くはあっ……」

蜘蛛姫「で、なんで王女の守りの誓約なの」

不死人「え？ああ……誓約の奇跡で皆を癒す力を得ることが出来るからだよ」

蜘蛛姫「本当のところは？」

不死人「王女様のおっぱいのデカさが半端ないんだよ！」

蜘蛛姫「あんた、ブレないわねー」

不死人「王女様自体が大きいから、当然おっぱいも大きいんだよなー、運動会の紅白

玉位？」

蜘蛛姫「確かにあの、巨人だもんね……」

不死人「しかも、王女様の呼吸に合わせてムチムチニヨンムチムチニヨンと動く」

蜘蛛姫「なにその、嫌悪感しか湧かない擬音」

不死人「更に……えっ」と「ガサゴソ

蜘蛛姫「？」

不死人「てつててー！そーがんきよーう！」

蜘蛛姫「双眼鏡？」

不死人「これを使つて……」ジーツ

蜘蛛姫「……どこ見てんの？」

不死人「おっぱい」

蜘蛛姫「死ねっ！砕け散れっつ!!」

不死人「な、これが普通の反応だろ？けど王女様は双眼鏡でおっぱい観賞していても、なーんにも言わず、ニツコリと微笑むだけなんだよ……」

蜘蛛姫「……取るに足らない虫けらだと思われて、相手にされていかないだけじゃないの？」

不死人「違うよ、あらあら、わたくしのパイオツに夢中なのね、うふふ可愛いわ、触つてみる？とか思つてんだよ、慈愛の心で接してくれてんだよ！」

蜘蛛姫「絶対違う」

不死人「ふ、何て言うのかなあ……男を包み込む包容力？小娘にはまだ早かったかな」

蜘蛛姫「抱き締めてあげようか？」

不死人「待つて、蜘蛛の足の包容は、抱き締めるでなく、刺し貫いて握り潰すだから」

蜘蛛姫「ふん、．．．で、何か誓約して良いことはあったの？」

不死人「へ？」

蜘蛛姫「だから、誓約して何かあんたにとつてプラスになることはあったの？」

不死人「おっぱい様と誓約出来たという満足感はあるよ」

蜘蛛姫「様って．．．実際には何の効果も無いよね？」

不死人「いや、実際の効果も有るよ？その、なんかブアーって光って回復？するつばい何か、恩恵？とかそういったやつ．．．」

蜘蛛姫「説明がフワフワしてるね」

不死人「うん．．．」

蜘蛛姫「使ったこと無いよね」

不死人「え？そんなことは無い．．．かな、ほら、結構戦いで役立つ？みたいな．．．」

蜘蛛姫「使ったこと無いね？」

不死人「はい．．．」

蜘蛛姫「じゃあ、私と誓約交わしても何の不利益もないよね？」

不死人「いや、デカパイパイ様と誓約を交わしているという満足感が．．．」

蜘蛛姫「タオパイパイじゃないんだから．．．何の不利益もないよねっ？」

不死人「あ、はい」

蜘蛛姫「じゃあ、もうっ、．．．仕方ないな、私が誓約してあげるよ」

不死人「．．．」

蜘蛛姫「はい、そこに膝をついて」

不死人「．．．ひとつ聞きたいんだけど」

蜘蛛姫「うん」

不死人「お前と誓約するとどうなるの」

蜘蛛姫「ん？」

不死人「何かメリツトがあるの？」

蜘蛛姫「えっと．．．こんとんのじゆうしやになれ．．．る？」

不死人「今、平仮名読みだったよね、そして疑問系」

蜘蛛姫「違うよ、あとね、なんか名簿みたいなのが貰える、．．．買える？」

不死人「なんじゃそら」

蜘蛛姫「あ！それとっ、凄いだよっ！こう、火の玉？というか火柱？溶岩がドロド

ロって、．．．なんか凄い．．．の？」

不死人「説明がフワフワしてるよね」

蜘蛛姫「えっと、溶岩でえ．．．」

不死人「．．．」

蜘蛛姫 「近道も……あつたかな……」

不死人 「……」

蜘蛛姫 「近道……」

不死人 「……」

蜘蛛姫 「……」

不死人 「……」

蜘蛛姫 「もーっ！もーっもーっ!!!」ジタバタ

不死人 「あ、泣いた」

蜘蛛姫 「誓約すりやいいじゃんっ!!私でいいじゃんっ!!なんで駄目なのよっ!!!」

不死人 「えー」

蜘蛛姫 「意地悪しないでよーっ!!」

不死人 「……」

蜘蛛姫 「びえーっっ!!!」

不死人 「あー、もう分かった分かった、お前と誓約するよ」

蜘蛛姫 「……ほんと?」

不死人 「本当本当、えーっつと、こうして膝をつきやいいの?」

蜘蛛姫 「うんうん」

不死人「・・・」

蜘蛛姫「えーつと、こんとんのじゆうしやになーれっ」キラキラキラキラ

不死人「なにこの、おままごと感」

蜘蛛姫「はい、誓約完了、これでもう私のじゆうしやだからね」

不死人「・・・（後でおっぱい様の誓約に戻しておこう）」

蜘蛛姫「誓約解除したらリストですぐに分かるから」

不死人「・・・」

蜘蛛姫「あと、人間性は1日3個を捧げること、ちゃんと毎日遊ぶこと、意地悪をしないこと、胸のことを言わないこと、クラブお姉ちゃんのお墓のお花を枯らさないこと、あまり遠くに行かないこと、篝火は私の篝火だけを使うこと、えつとそれから」

不死人「もう誓約じゃなくて制約だよねっ!!」

ダークソウル 屑夫編

ダークソウル 屑夫編

毒の沼地を歩く不死人の足取りは重く、グチヨリグチヨリと泥土が沈み込んで不死人の足を取る。

早くこつちに来いと引き留められてるみたいだなと不死人は考え、やなこつたと舌を出す。

途中、人の大きさを優に超える巨大な岩石を構える巨人達に遭遇。

息を詰めて盾を構えながら駆ける不死人の近くを巨人の投げつけた岩石が唸りながら飛んでいく。

不死人「うおー、恐えー」

足は止めずに声を出す、声を出せば体が動いて恐怖が薄れる、頭も回る。不死人は経験から学んでいる。

巨人達からは視線を切らず、一定の距離を保ったまま回り込む様にして目的地に近づいていく、巨人達も近づかなければ深追いしてこない、もしかしたら巨人達も怖がつて

いるのかも知れない。

殺し飽きているだけかも知れないけど。生き飽きているだけかも知れないけど。

そして不死人は見慣れた蜘蛛の糸の山へと至る。山を登ると途中に洞窟の入り口が現れ、不死人は中へと入っていく。歩を進めていくと巨大な広間へと辿り着く。

不死人は歩みながら、少しだけ広間の隅にある小さな岩を積んだ場所に目をやる。小さな墓標。

不死人「よう」

不死人の口から自然と声が漏れる。別に思い入れなどはないけど、申し訳ないなんて考えないけど、積まれた岩の前にある摘んだ花が枯れていないのを確認する。

一応、誓約の制約だからなあ

不死人が広間の奥から更に延びる通路を進むと、やがて真っ白な蜘蛛の足や胴体を持つ、指を組んでお祈りをする娘が見えてくる。娘は不死人の方を見ていた。

多分、不死人の足音が聞こえていたのだろう。軽く下唇を噛んで待つ娘、じつと不死人が進んでくる通路を見つめていた瞳は少し潤んでいたのかも知れない。

不死人は娘に挨拶もせず、ズカズカと娘の前の篝火までやってきてズチャリと鎧の音を立てて腰を下ろす。

娘は何も気にしない風で不死人を眺めている。もう下唇は噛んでおらず、うつすらと笑っていた。

やがて不死人は、両手にいくつかの人間性を取り出すと、立ち上がって、ほらよと娘の掌に人間性を乗せてやり、娘が愛しそうに、嬉しそうに人間性を抱き締めて吸収する様子を眺めていた。

そのまま不死人は娘の前で足を伸ばして腰を下ろす。

不死人「・・・やっちゃまった」ガツクリ

蜘蛛姫「何やらかしたの？」

不死人「アノール・ロンドに行ってきたんだよ・・・」

蜘蛛姫「あれ？人間性取りに最下層に行くって言ってたよね？」チャキ

不死人「ニツコリ笑いながら蜘蛛の足を構えるな」

蜘蛛姫「アノール・ロンドってあんたが誓約していたおっぱいお化けがいるところよ
ね？」

不死人「おっぱいお化けって言うな」

蜘蛛姫「一応、何をしてきたのか話は聞いておこうかしら・・・」

不死人「いや、ちゃんと最下層に人間性を取りに行つてたんだよ？ほら、今日も捧げ
たじゃん」

蜘蛛姫「うん」

不死人「それで、武器を進化できるかなーって思つてアノール・ロンドの鍛冶屋まで
行くことにしたの」

蜘蛛姫「おで・・・おで・・・の人？」

不死人「それ山下太郎君だから」

蜘蛛姫「ぐぎぎぎって凄い表現よね」

不死人「当時は斬新だった」

蜘蛛姫「ふんふん、それで」

不死人「うん、それで王女様の部屋で気が付いたんだけど・・・」

蜘蛛姫「ウエイト、ウエイト」

不死人「ん？」

蜘蛛姫「・・・あれ？」

不死人「なに？」

蜘蛛姫「あれれ、ちよつと待って、話がおかしくなった」

不死人「ん？そうか？」

蜘蛛姫「少し、整理させて」

不死人「そんな複雑な話か？おまえ人の話はちゃんと聞いとけよ」

蜘蛛姫「・・・分かった」

不死人「やれやれだよ、いいか、ポーツとしてたら駄目だぞ？おまえ、可愛いだけに馬鹿だと残念さが目立つんだからな」

蜘蛛姫「う、うん（可愛い・・・）」ポツ

不死人「まずは、ここから最下層に向かうわけ」

蜘蛛姫「うんうん、私に捧げる人間性を貯めるためだよね」

不死人「そう、それである程度貯まったから、おまえん所に帰ろうと考えるわけ」

蜘蛛姫「うん」

不死人「で、ふと武器を見て、あれ、これ結構鍛えたから進化とか出来んじゃねえ？つ

て気づくわけよ」

蜘蛛姫「なるほど、それで鍛冶屋に行こうと思うのね」

不死人「そう、鍛冶屋なら巨人の鍛冶屋が腕も良さそうだから・・・」

蜘蛛姫「おでおで鍛冶屋ね」

不死人「おでつて・・・」

蜘蛛姫「要は、アノール・ロンドまで行くのね」

不死人「そう、そんで王女の部屋で気が付いたんだけど・・・」

蜘蛛姫「うん、分かった、ここだ、ここがおかしい」

不死人「？」

蜘蛛姫「えーと、まず、あんたはアノール・ロンドの鍛冶屋に行くのよね」

不死人「そうだよ」

蜘蛛姫「それでアノール・ロンドに辿り着く」

不死人「そう、それで王女様の部屋で・・・」

蜘蛛姫「なんで鍛冶屋に向かったあんたが王女の部屋にいるの？」

不死人「え？アノール・ロンド行ったら、まずは王女様のおっぱいを眺めに行かないと不敬だよな？」

蜘蛛姫「おっぱいを眺める方がよっぽど不敬よっ!!」

不死人「違うっ！王女様はおっぱいを眺められるのが大好きなんだっ!!『うふふ、またわたくしのオッパイちゃんを見てるわん、もつとプルンプルンして欲しい?』って考

不死人「あー、真っ白だったおっぱいがうつすらピンクになっちゃってるなー、痛い？」

蜘蛛姫「ひやあ」ガバツ カクシツ

不死人「いや、悪かった、ごめんね、ごめんなさい、痛いよね？」ペコリ

蜘蛛姫「もうっ、痛いわよっ！もー！」

不死人「なんか我を忘れてた、以後気を付けます」

蜘蛛姫「我を忘れるって・・・何がアノール・ロンドであったのよ」

不死人「え？違う違う、アノール・ロンドの事ではなくて、お前のおっぱい揉んでたら、意外に柔らかくて、形も良くて、あれ？ちっばいも馬鹿に出来なくない？って思ってたたら、指先にツンツンって乳首とか当たっちゃってエロい気持ちでいっぱいになっただけ」

蜘蛛姫「胸の揉み心地を本人の前で赤裸々に語らないでっ！」

不死人「総合評価60点！大丈夫、順調に育ってます」

蜘蛛姫「前回の30点から飛躍した!!」

不死人「あ、前回の点数覚えてたんだ」

蜘蛛姫「まあ、30点は何気にシヨックだったからね・・・」

不死人「シヨックだったんだ・・・」

蜘蛛姫「で、アノール・ロンドでどうしたの？」

不死人「うーん、なんか長くなっちゃったから、また今度話すよ」

蜘蛛姫「まさかの次回に続く！」

ダークソウル 悲哀編

ダークソウル 悲哀編

前回のあらすじ・・・？

不死人が錯乱して蜘蛛姫の胸部を揉み続ける。うなる怒濤の蜘蛛の足連続攻撃！

しかし不死人は華麗なローリングで全回避。当たらない、ガチャのレアくらい当たらない。

そして蜘蛛姫は、自らの胸がダブルアップの点数評価を受けて御満悦。

不死人に言われたから気を良くするのか、単に自分の胸部が成長評価を得たことに満足なのか判断に迷うところではある。

再び蜘蛛姫の前に腰を下ろす不死人。

蜘蛛姫はそれを嬉しく思いつつも、不死人の視線が自分の胸部にはチラリとも向かず、ぼんやりと顔に向けられているのがやや不満。

いやいや、待て待て、ジーッと胸を見つめられても、なんだコイツになる。ん？ だったらこれで良いのか？ うーん、何気に紳士であると考えておくか、なんか悔しいけど。

まあ良い、まあ良い、ローリングを鍛えたのも、多分これからも私の側にいるつもりなのだからだろう。

それではこの人の話を聞こうではないか。

蜘蛛姫 「それで、アノール・ロンドで何をやらかしたの？」

不死人 「……」

蜘蛛姫 「気になるじゃん、言ってみなさいよ」

不死人 「……うん、じゃあ聞いてくれ」

蜘蛛姫 「わくわく」

不死人 「わくわくするなよ……」

蜘蛛姫 「メシウマ？」

不死人 「人の不幸を嬉しがるな、まあ、アノール・ロンドに行ったら、大人の男の義務として王女様のおっぱいに謁見に行くんだけどさ」

蜘蛛姫「何か、色々問い質したい気持ちだけど、続けて」

不死人「話が進まないからな、それでこちらとしては王女様の誓約を破棄して、お前と誓約し直してるから後ろめたいわけよ」

蜘蛛姫「別にいいんじゃない？あなたが王女の誓約よりも価値のある誓約主、こほん、あたしの事ね、私と出会ったんだから、仕方ないじゃん」

不死人「泣いて駄々こねられたからだよ・・・」

蜘蛛姫「うー」

不死人「そこで詰まるなよ、自分の行動に自信と責任を持って」

蜘蛛姫「うー」

不死人「まあ、それで後ろめたい気持ちで王女様の前に行つたんだよ」

蜘蛛姫「・・・何か嫌なこと言われちゃった？」

不死人「それが全く、何も言わないで、いつもみたいに優しく接してくれたんだ」

蜘蛛姫「へー」

不死人「こつちとしては、なんで誓約破棄したのか聞かれたりするかもって考えてたんだけどさ」

蜘蛛姫「うん」

不死人「罰として、あの大きなおっぱいでモミュンモミュンって押し潰されたり、摘

まみ上げられてあの大きなおっぱいにムニギユムムニギユムって挟まれて先っぽペロペロされたりするって思ってたんだけど」

蜘蛛姫「おい」

不死人「『あらあら、お仕置きしているのに貴方はどうして嬉しそうなかしら、ほらほら苦しいでしょう、息が出来ないでしょう』『王女様あ』みたいな展開になるって覚悟してたのにつ！」

蜘蛛姫「それ覚悟じゃなくて期待だよね！」

不死人「それがいつも通り……」

蜘蛛姫「全然相手にされてないだけよね」

不死人「だったのかな……ま、それならそれでと気を取り直し、双眼鏡を取り出しておっぱいウオッチングをしようと思ったんだ」

蜘蛛姫「雷に撃たれろ」

不死人「撃たれたんだよ……悲劇の始まり……」

蜘蛛姫「ん？」

不死人「双眼鏡が見つからないんだ、この前、試しにお前の胸にある下らないものを眺めるのに使ったじゃん」

蜘蛛姫「下らないものって言うなっ！……あー、なんかそんなこともあったよね」

不死人「それで・・・ほら、そこに転がってる」

蜘蛛姫「あ、落ちてる」

不死人「双眼鏡をここに忘れてたんだよ」

蜘蛛姫「ふーん、じゃあ王女の胸を双眼鏡で見れなかったのが悲劇ってわけ？」

不死人「それは痛恨のミスだけど悲劇と言うほどでもない」

蜘蛛姫「ふーん」

不死人「ミスをしないことは大事だけど、大体求められるのはミスをした後のリカバリーさ」

蜘蛛姫「ほう」

不死人「人は必ずミスをする、それをいかに上手く回復させるかが大切、そのためには広い視野で頭を回す事が大事だよ」

蜘蛛姫「なんかまともな事を言ってるけど、そもそもがおっぱいを見ようって話だからね」

不死人「クレバーな僕は考えたのさ、なるほど双眼鏡は忘れてしまったけど、弓矢を持っていると」

蜘蛛姫「？」

不死人「ふ、弓矢を装備するとスナイプモードみたいにズームアップ画面になるのさ」

蜘蛛姫「おお！」

不死人「試しに弓を構えると王女様のおっぱいがウオツチングモード、ウエルカム！
ソーグッド！」

蜘蛛姫「おー・・・ポーシット」

不死人「嫉妬だけに？」

蜘蛛姫「ちよつと上手い」

不死人「更にスナイプモードだと照準みたいなマークが表示されておっぱいに重なる
と背徳感が跳ね上がる！」

蜘蛛姫「・・・駄目だこいつ」

不死人「堪能したよ・・・させて貰いましたよ、王女様のたわわな柔らかな宝石をね・・・」
蜘蛛姫「さすがに何か言われなかった？」

不死人「王女様は相変わらず『ふふふ、夢中になっちゃって可愛いわ、1枚脱いで差
し上げようかしら』って微笑みのままさ」

蜘蛛姫「どんな女よ・・・」

不死人「したら王女様に弓矢が突き刺さった」

蜘蛛姫「何やってんのっ!？」

不死人「誤射だよっ!!スナイプモードをやめようとしたら、弓矢がブンって飛んでっ

たんだよーっ!!」

蜘蛛姫「あーあ」

不死人「うわっ! って思ったら王女様の悲鳴」

蜘蛛姫「うわあ、おっぱい覗き見て、その人を攻撃って最悪、サイコじやん」

不死人「王女様の悲鳴は、ちよつとエロかったかも」

蜘蛛姫「えつと通報って・・・」

不死人「お願いやめて、わざとじゃないの、信じて」

蜘蛛姫「まあ、巨大な王女様に小さな弓矢1本、死にはしないだろうけど流石に怒られたでしょ」

不死人「王女様、悲鳴上げながら白い光の結晶みたいになつて潰れちゃった・・・」

蜘蛛姫「あんた! 何やってんのっ!!」

不死人「それでアノール・ロンドが真っ暗闇になつちやった・・・」

蜘蛛姫「何があつたの?」

不死人「分かんない、こっちは王女様撃ちやつてアワアワしててき、偉い人に、お前何やってんの? って怒られてたかも」

蜘蛛姫「あーあ」

不死人「そしたら外が真っ暗」

蜘蛛姫「ふーん」

不死人「親衛隊？みたいなのに問答無用で襲い掛かれた」

蜘蛛姫「王女やっちゃったからねー」

不死人「篝火のお姉さんも怒っててさ・・・」

蜘蛛姫「ん？篝火？お姉さん？ちよつと詳しく話してみよーか」

不死人「ポーシット、いや、そんな色っぽい話じゃないよ」

不死人がアノール・ロンドに最初に連れて来られた時、夕暮れ時の輝く世界にしばらく声も出せずに立ち尽くしていた。

デーモンに連れ去られた時はどうなることかと思っただけ。

ふと戦場の夕暮れを思い出し、戦友達の笑顔を思い出し、胸が少しキュツと締め付けられた。

だから、これはいい景色なのだろう。

軽く息を吐き出してから不死人は長く続く階段を下りていく。

カツカツと自らが立てる足音に昔仕えた城主の城の回廊を思い浮かべる。どうも夕暮れの景色は過去を思い出す切っ掛けになるようだ。

そして不死人はアノール・ロンドの一室に辿り着く。篝火のある一室に。

暗月の女騎士「不死人でも休息は必要だろうか？」

不死人に声をかけてくれたのは部屋で壁にもたれ掛かり篝火を守る火防女、暗月の女騎士。

不死人「お姉さんって、台詞といい、立ち姿といい、暗月の女騎士と名乗るセンスといい、何か患っている方ですか？」

暗月の女騎士「なんの事やら、うっ、治まれい私の右手っ」ガタガタ

不死人「あーだいぶん拗らせてますね、お薬お出ししておきますね」

暗月の女騎士「ふ、戯れ事を・・・薬などで我が病が治まるものか」

不死人「確かに・・・それはそうと、僕の地方ではお互いに胸を揉み合って挨拶する

のが風習ですので、その固そうな鎧を外してもらっていいですか？」

暗月の女騎士「そうかそうか、首を跳ね落とすから、ちよつと兜の下に隙間を空けてくれ」チャキ

不死人「あ、地方ルールでした、ここではそんなこと求めませんよ？ちよつと勘違いしてました」

暗月の女騎士「そうか、知り合つたばかりの騎士の首を跳ねずにすんで良かったよ」

何度か篝火の下を訪れて色々と話をしていくうちに暗月の女騎士が王女様の王家に仕えている事が分かった。

王女様のおっぱいの話を始めると暗月の女騎士が剣の柄に手をかけたので直ぐに話題を変えた。

かなりの騎士団をまとめているらしい、クールでぶっきらぼうだけど、優しい人なのだとよく分かった。

忠誠心も半端ない。

だから、王女に手を掛けた不死人がいくら説明しても、弁解しても暗月の女騎士の攻

撃は止まらない。

だから不死人も居合い刀の柄を握り締める。いつも敵と向かい合ったとき、左手の小指だけで持つようにする自分が嫌になった。

不死人「お姉さん……」

蜘蛛姫「あらー」

不死人「なんかビュンビュン弾を撃ってくる魔法使いとも戦った」

蜘蛛姫「よく生き残れたわね」

不死人「ローリングで何とかした」

蜘蛛姫「あんた、どれだけローリングマスターになってるの?!」

不死人「分かんない……」

蜘蛛姫「けど、なんかアノール・ロンドから総攻撃って感じねえ」

不死人「もうどうやっても元には戻らないよね……」

蜘蛛姫「まあ、無事に戻れて何よりよ」

不死人「……まあ、殺られても篝火に戻るだけだけどね」

蜘蛛姫「……例えばさ、あんたが最後に休んだ篝火を特定するじゃん、若しくは管理できる篝火で休ませる」

不死人「うん？」

蜘蛛姫「それでその篝火回りを檻とかで囲んじやうのね」

不死人「……」

蜘蛛姫「そしたら、いくら復活してもその篝火のある囲いからは出られないよね？」

不死人「怖いこと考えられてた!？」

蜘蛛姫「そうならなくて良かったねって話」

不死人「確かに」

蜘蛛姫「はあ、これに懲りたら、おっぱいおっぱい言わないこと」

不死人「それは難しい」

蜘蛛姫「即答しやがった、……まあ、ねえ、……どーしてもって言うなら双眼鏡はここで使ってもいいかもね……」

不死人「なんで？何か意味あんの？」

蜘蛛姫「ボーシット」

ダークソウル 略奪編

ダークソウル 略奪編

蜘蛛姫「そういえばさ」

不死人「うん」

蜘蛛姫「今更だけど、あんた、アノール・ロンドのボスって倒せたんだ？」

不死人「ふふん、まあね、少し骨が折れたけど、僕と斬鉄剣の敵ではないよ」

蜘蛛姫「へー」

不死人「二人掛かりで襲ってきたけどさ、華麗な剣さばきでなんなく撃破」

蜘蛛姫「・・・ふーん」

不死人「ほ、本当だよ？」

蜘蛛姫「・・・」

不死人「・・・何かな？」

蜘蛛姫「本当は？」

不死人「うん、二人の白霊に最初から最後まで道案内兼アイテム回収、ボス撃破もし

てもらった」

蜘蛛姫「情けない・・・」

不死人「いや、だってこーんな大きな巨人騎士とか、身長より長い矢を放ってくる騎士とかがウジャウジャだよ、無理無理」

蜘蛛姫「白霊2体も付けて、あんたは何やってたの」

不死人「基本、後について回ってた、かな？」

蜘蛛姫「・・・」

不死人「あと、白霊が敵を後ろからプスーってしやすいように囮」

蜘蛛姫「・・・」

不死人「侵入してきた悪霊？を誘き寄せる為に手を振ったりとか」

蜘蛛姫「・・・」

不死人「あ、止めて、ジト目で見ないで」

蜘蛛姫「まあ、戦い方は人それぞれだけども、・・・無理して怪我されたり、殺されても嫌だし」

不死人「結構な割合で僕にトドメ刺してたよね？」

蜘蛛姫「私はいいのよ」

不死人「即答だ・・・」

蜘蛛姫 「私はいいのよ」

不死人 「いいんだ・・・」

蜘蛛姫 「ところで、今更の質問ついでにさ」

不死人 「うん」

蜘蛛姫 「アノール・ロンドで暗月の女騎士倒しちやっただんでしょ」

不死人 「うん、倒しちやっただ」

蜘蛛姫 「火守女だったのよね？」

不死人 「・・・え、えーと、あれ、どうだったんだろう・・・？覚えがないかも」

蜘蛛姫 「この前、あんたが火守女だったって言ってたけど？」

不死人 「そ、そうだったっけ？勘違いかも知れない」

蜘蛛姫 「ふーん」

不死人 「と、ところで、木箱の底ってどうなってるんだろうね、ほら、見てよ、ここに・・・」

蜘蛛姫 「暗月の女騎士は火守女だったんだよね」

不死人 「アソウデスネ」

蜘蛛姫 「ん」 テッ

蜘蛛姫の白い手がピツと不死人に向けて差し出され、掌に何かが置かれるのを待つ。不死人は今の会話から蜘蛛姫の掌に置かなければならないものを理解するが、何とかしてそれを避けたく思う。回避である。ローリング。

頭を回せ僕！この娘は暗月の女騎士の魂をエスト瓶の強化に使う気だ。

それは有り難い話なんだけど、もう少し、ほんのもう少しだけ暗月の女騎士の魂を見て、思い出に浸りたくもある。

考えろ！こいつを不機嫌にせずに暗月の女騎士の魂を渡さなくて済む方法を！いつも何とかしてきただろ？

不死人「……」

蜘蛛姫「……」

不死人「ぱく」

蜘蛛姫「」

指を一本と考えていた不死人だが勢いが良すぎて、蜘蛛姫の差し出された掌の指4本を口にくわえてしまう。

構うものか。

プチン

蜘蛛姫「はい、エスト瓶が強化されましたー」

不死人「あ、はい、ありがとうございます」

蜘蛛姫「あー、スツキリした！」

不死人「お前容赦ないな」

蜘蛛姫「なーんか思い出の品にすぎる男って情けなくない？」

不死人「まあ、そうだな・・・よしっ！頑張ろうっ！」

蜘蛛姫「うんうん」

不死人「これからはエスト瓶を飲む度に、暗月の女騎士さんに口移しで飲ませてもらってるってことにするっ！」

蜘蛛姫「生まれ代われっ!!」ブンツッ！

不死人「危ねえっ！」

ガキンツ!!!

蜘蛛姫は不死人とギヤアギヤア騒ぎながら心の片隅で想像する。

もし、私が消滅して火守女の魂となつたとしても、この男はいつまでも私の魂を持ち続けてくれるのであろう。

私の事を思い出して、懐かしんでくれるのだろう。

それはとても心安らぐことだと思った。

もし、他の火守女が現れて、私の魂をエスト瓶強化に使ってしまったら？

まあ、気持ちは分からなくもない。許そう。

その時はこの男がエスト瓶を飲む度にくちづけをすればいい。

ダークソウル 八方塞編

ダークソウル 八方塞編

不死人の目の前は薄暗く、更に靄の為、視界はほとんど遮られている。

そんな中、大質量の鉄、岩を引きずるズザズザという音が断続的に近づいてくる。何かが這って近づいてくるかのように。

居合い刀の柄を握り直す不死人、チャキという音が弱々しく聞こえるのは、不死人の不安のせいか。

いつもより居合い刀が軽い気がする。

不意に目の前の靄が盛り上がって膨らみ、中から漆黒の相手が靄のペールを剥いで姿を現す。

楔のデーモン

楔のデーモンの体は岩か鉄のように硬黒く輝き、隆々と盛り上がる腕や肩、胸の部位

が戦闘に特化していることを示す。

首から上、片足もなく、ズズズと這って来る、しかし何のアドバンテージも感じられない。

逆にその姿が恐ろしさを強調していた。

不死人は唾を吐いてから、自らを鼓舞するように低い雄叫びを上げて楔のデーモンに向かつて駈ける。

不死人「いや、無理だから、マジで！」

蜘蛛姫「な、なに？ どうしたの急に」

不死人「あ、ごめん、敵の事を思い出してた」

蜘蛛姫「ビックリしたー、え、そんな強い敵なの？」

不死人「んー、どうだろう？ 結構苦手な奴でさ」

蜘蛛姫「うん」

不死人として幾度となく死線をくぐり抜け（回避して）きた戦士である。

それなりに。

単調な攻撃とは言わないが、ある程度攻撃パターンを見極めれば苦戦せずとも楔のデーモンを倒すことが出来ていた。

しかし、ここにかけて楔のデーモンの地力が底上げされたかのように硬く、強くなってきた。

倒せない相手ではなかったはずである。

しかし、同じ攻撃でも楔のデーモンからのダメージ量が増え、逆に不死人からのダメージが減少すればどうなるのか。

不死人の少しのミスで一気に畳み込まれてしまう。

当然、苦戦となる。

え、マジで。

こいつ、雑魚キャラじゃなかったの?!

不死人「まあ、そんな感じで上手く進めない」

蜘蛛姫「ふーん、あんた自身がもっと強くなないと駄目なの?」

不死人「強さと言うか、相性なのかなあ、どっかに修行ステージとあれば良いのに」

蜘蛛姫「無いわよね・・・」

不死人「避けて進むのも手だけだな」

蜘蛛姫「んー、あ……！武器は？」

不死人「ん？」

蜘蛛姫「ほら！あんたが使ってる斬鉄剣」

不死人「これがどうした？」チャキ

不死人 右手装備 居合い刀

蜘蛛姫「そう、それ、もつと強化できない？向こうが強くなってると、こちらも強くなればいいのよ」

不死人「……なるほど」

蜘蛛姫「例の巨人鍛屋に行つてき、進化してきたら？そしたら楔のデーモンなんか

チヨチヨイノチヨイよ！」

不死人「グツアイディア」

蜘蛛姫「ヨーウエルカム」

不死人「アイムファインセンキュー」

蜘蛛姫「メイアイヘルピュー」

不死人「ゴッドブレスユー」

蜘蛛姫 「ロックア라운드ザクロック」

不死人 「・・・止めよう、語彙力の無い二人の英会話は悲しい」

蜘蛛姫 「うん、すごく痛々しかったわ」

不死人 「そんな訳で、ちよつくら行ってくらあ！」

蜘蛛姫 「行ってらっしゃーい」

篝火 死んで篝火に戻る

蜘蛛姫「あれ？」

不死人「ただいま・・・」

蜘蛛姫「どしたの？武器を進化したんじゃないの？」

不死人「・・・うーん、色々話したいことはあるんだけど・・・まあ、進化はしたんだよ、ほら」

不死人 混沌の刃

クラークのソウルから生まれた刀。クラークの混沌の性質だけを受け継ぎ、刀身には特徴的な班流紋が浮かんでいる。

蜘蛛姫「え・・・これって・・・」

不死人「分かる？」

蜘蛛姫「多分、・・・お姉ちゃん？」

不死人「うん、お姉ちゃんのソウルを使わせて貰ったよ」

蜘蛛姫「・・・そっかそっか」

不死人「ごめん」

蜘蛛姫「いいよ、魂で朽ちるよりはこうした方がいいかも・・・うん、お姉ちゃんを感^んじるよ」

不死人「混沌系では最強の攻撃力だって、鍛冶屋が言ってた」

蜘蛛姫「流石お姉ちゃん」

不死人「けど、使う度に僕にダメージ与えてくる・・・」

蜘蛛姫「お姉ちゃん・・・何やってんの・・・」

不死人「進化したら攻撃力が下がっちゃったから、鍛え直そうとしたんだけどさ」

蜘蛛姫「うん」

不死人「必要な素材がデーモンの楔」

蜘蛛姫「それって・・・」

不死人「楔のデーモンが落とすやつ・・・」

蜘蛛姫「お姉ちゃん！好き嫌いしたら駄目だよ、そこら辺の石で進化しなさい、めっ、だよ！」

混沌の刃 カタカタカタカタ！

蜘蛛姫「意地悪したら駄目！」

混沌の刃 カタカタ！

蜘蛛姫「そんな我儘言うならもう使ってあげないよ！」

混沌の刃 ガタツ！

蜘蛛姫「ふんだ！ずた袋に使われてから後悔しても遅いんだからね」

混沌の刃 カタカタカタカタカタカタカタカタカタ！！ガタツ！！

不死人「待つて待つて、一応僕の刀だから、勝手に話を進めないで」

蜘蛛姫「お姉ちゃんを自分の刀にする気っ!!」

不死人「あれ?!納得してた風だったよね!？」

蜘蛛姫「きーっ！私なんてここから一步も動けないのに！お姉ちゃんだけあんたと外

に行けるなんておかしいよっ!!」

不死人「お前、支離滅裂だぞっ!!」

混沌の刃 カタカタ！

不死人「お前もカタカタすんな！」

蜘蛛姫「なにさっ！二人で内緒話なんかしてっ」

不死人「落ち着け、僕にもカタカタしてるって分かるだけだから」

蜘蛛姫「それだけで分かり合えるっての!!」

混沌の刃 カタカタカタカタ

蜘蛛姫「むきーっ！」

不死人「やめれーっっ!!」

混沌の刃 カタカタ？カタカタカタカタ？カタカタカタカタ……

蜘蛛姫「ふぎっいいいっっ!!」

不死人「え？え！なに、二人って話せるの？」

蜘蛛姫「ニュアンスよっ!!」

混沌の刃 カタカタカタカタ!!

不死人「お前ら、ニュアンスで喧嘩すんなっ!!」

・
・
・
。

不死人「落ち着こう」

蜘蛛姫「うん」

混沌の刃 カタ

不死人「えーと、まず最初は楔のデーモンが倒せないって話だったよな・・・」

蜘蛛姫「うん」

不死人「んで、武器を強くすればいいんじゃないかね？って話になって」

蜘蛛姫「そうよ、私のグッドアイデアだったのよ」

不死人「それで居合い刀を進化して混沌の刃にした」

蜘蛛姫「お姉ちゃんのソウルを使ってね」

混沌の刃 カタカタ

不死人「うん、僕の戦い方にピッタリだったし、君のお姉ちゃんだから」

蜘蛛姫「うん」

混沌の刃 カタ・・・

不死人「進化したら攻撃力が落ちたから鍛えようと、そしたら、こいつの強化にはデー

モンの楔が必要で」

蜘蛛姫「デーモンの楔は楔のデーモンのドロップアイテムだったと」

不死人「うん」

蜘蛛姫「……」

不死人「……」

混沌の刃「……」

蜘蛛姫「本末転倒、無駄骨無駄足」

不死人「分かっている、みなまで言うな」

混沌の刃 カタカタ

不死人「なに言っているのか分からないけど、何となく呆れているのは分かる……ごめんよ」

蜘蛛姫「はー、とりあえずさ、違う武器を使ってみるしかないんじゃないかなー」

混沌の刃 カタカタカタカタ！ガタツ！！

蜘蛛姫「なにさ、お姉ちゃんは黙ってて！」

混沌の刃 カタカタ？

蜘蛛姫「はあ？喧嘩売っているの？」

混沌の刃 カタカタ！

不死人「だから、ニュアンスで喧嘩しないでっ！！」

ダークソウル 夢見少女編

ダークソウル 夢見少女編

不死人「はい、人間性」

蜘蛛姫「うん、ありがとう」

不死人の取り出す人間性が蜘蛛姫の白い掌に乗せられ、蜘蛛姫はそつと胸元に近づけて人間性を吸収する。

優しく光る暖かな輝きに蜘蛛姫の白い顔が照らされる。

何かに祈るかの様な表情の蜘蛛姫、不死人はぼんやりと蜘蛛姫を見る。

その表情から内心は何も読み取れない。

実は蜘蛛姫、何気なく片目を薄く開けて不死人を覗き見ていたがぼんやりした表情にイラリとする。

こいつ、私の完璧な清らかな乙女の祈り顔を見てもスルーしてやがる。

不死人がいない間、蜘蛛姫は何度も何度も練習を重ねていた。そう、少し遠慮しがちに伸ばす指先から、不死人の指先が触れた際に少し掌を震え頬も染めさせる。

1度掌に乗せられた人間性を見て嬉しそうに微笑んでから、優しく愛しげに指で包み込む。

ここポイントね。

握るんじゃないで、包み込む感じ。優しげでしょ？可憐でしょ？

人間性が貰えて嬉しいんじゃないの？その、なんと言うか、あんたが持つてきてくれたから、う、嬉しいというか、私のためにさ……

眉を少し寄せて、眉間に皺が寄らないギリギリで止めて敬虔な乙女眉を作る、瞳は睫毛がフルフルと光の粒を含んで震うかの如く閉じ、唇はだらしない程度に軽く開け気味にする。

ここもポイントね。

ほら、少し、隙を見せた方が可愛いげがあるのよ。

人間性の放つ光の反射まで考えて顔の傾き具合まで考えた。

蜘蛛姫は頑張った。

何度も片目を開けつつ、鏡で見ながら確かめ続けた。

鏡に写る自分の表情に、え、やば、マジ可憐なんだけど、誰？あれ？私か！と叫んでしまうくらい頑張った。

でも。

おいおい、こいつ普通にポケーとしてるんですけど。え、ゲイなの？フレディなの？清らかな乙女の表情のままに蜘蛛姫は不死人にあらぬ疑いを持ち始める。

ためしに恥ずかしさを堪えて肘をすこーしずらして、緩やかな胸の膨らみも覗かせてみる。

あ、駄目だ、チラリとも見やがらねえ。あれ、結構揉んできたりしてたよね？興味津々だったよね？

さては連戦に次ぐ連戦で、または混沌の刃の影響でボヘミアンラプソディーなの。心に傷を負ったのね。

そうか、ならば仕方がないや。

蜘蛛姫「うん、私はそんなの全然気にしないからね！」

不死人「何の話?!」

蜘蛛姫「いいよ、大変だったんだよね？おいで抱き締めてあげるから」

不死人「待て、なにその唐突な包容力は？何か変なもん混じってた？」

蜘蛛姫「もう頑張らなくて大丈夫、私が頑張つて何とかするから、あんたはここでブラブラして心の傷を癒して」

不死人「心に傷なんか負って無いよ?!」

蜘蛛姫「みんなそう言うのよ、大丈夫、あんたの事はよく分かつてるから、安心して、ね？」

不死人「ちよつと待て、本当に不安になってくるからそういうの止めて」

蜘蛛姫「ほら、男の子同士で愛し合つても何も問題は無いのよ？」

不死人「ちよつと待て」

蜘蛛姫「？」

不死人「まず、男同士で愛し合うことについて、僕は何も言うことはない、好きにしてくれ、としか意見はない」

蜘蛛姫「うん」

不死人「その上で、なんでお前の中で僕が男を愛するキャラになってんの?!」

蜘蛛姫「あれ？」

不死人「何がどうなった」

蜘蛛姫「男と女、あなたがイチャコラしたいのはどっち？」

不死人「女」

蜘蛛姫「あれれ？んー、男と女、結婚して家庭を作るならば？」

不死人「女！」

蜘蛛姫「ファイナルアンサー？」

不死人「懐かしいな、おい！」

蜘蛛姫「オーデイエンスが使えますよ？」

不死人「大衆に聞くまでもねーよ、ファイナルアンサー！女！」

蜘蛛姫「おりよりよ？」

片田舎の道を走るフィアット、のんびりとした道中の最中のパンク。

キコキコとタイヤ交換をしている中を小鳥たちが嘖ずりながら飛び回る。

平和だねえ、思わず口から漏れた瞬間、静寂を切り裂くけたたましいクラクション音、

二台の車のカーチェイス。

先に行くのは2CV（ドウシボー）運転手は純白の花嫁、追うのはスーツ姿の男達を乗せたセダン。

ファイアットが急発進して二台の車を追う。

蜘蛛姫「どっちにつく？」

不死人「勿論、おんなー」

蜘蛛姫「だと思った」

不死人「いきなりだし、長いよ！カリオストロなんか知らない子もいるよ！そして女だよっ！」

蜘蛛姫「うーん」

不死人「さっきから何かおかしいぞ、何があつたんだよ」

蜘蛛姫「私の考えすぎ・・・かな？いや、待ってそれだと・・・」

不死人「？」

蜘蛛姫「いやいや、私にもプライドはあるし・・・」

不死人「おい、何をブツブツ言ってるんだよ？言いたいことは言ってくれよ」

蜘蛛姫「うー」

不死人「な、じゃないと伝わらないぜ」

蜘蛛姫「そっか」

不死人「そうそう、言ってみ？どうしたの」

蜘蛛姫「なんで！なんで私の姿に見とれないのよーっ！！」

不死人「えー」

蜘蛛姫「可憐だあとか思ってたよーっ！」

不死人「いや、あのね、言ってみるとか言ったけど、赤裸々過ぎるよ」

蜘蛛姫「練習とかもしたのにつ！」

不死人「練習したんだ・・・」

蜘蛛姫「もーっ！」

不死人「いや、ちゃんと見とれてたよ？」

蜘蛛姫「嘘だもん！私、薄目で見てたもん！ボケーっしてしてたもん・・・」

不死人「違う違う、変にデレデレしてたら格好悪いじゃん、顔に出したら悪いなーっ

て考えてたんだよ」

蜘蛛姫「・・・」

不死人「あー、そうか、今日はいつもより、うわあって思ってたけど、そうかそうか、練

習してくれてたんだ」

蜘蛛姫「・・・本当？」

不死人「本当本当、すごく、その、儂げで・・・可愛かった」

蜘蛛姫「……てへ」

不死人「まあ、今後は気を付けるよ」

蜘蛛姫「あ、デレデレ見られるのは嫌だから」

不死人「ええー！」

蜘蛛姫「こう内面から滲み出る感情を押しさえきれずに、思わず顔に出ちゃう感じ、かな」

不死人「お前、どこの監督だよ！」

蜘蛛姫「まあ、私の可憐さに、思わず髪に手を触れようとして、いけないいけないと手を引っ込めようとするんだけど、未練たつぷりに手をゆっくり引っ込めようとする？
みたいな」

不死人「耽美が過ぎるよ！」

ダークソウル 混沌刃編

ダークソウル 混沌刃編

馬鹿な男がおった。

うん、他に言い表し様がないから馬鹿な男じゃな。

い。
どんなにぶちのめしても何度も何度も現れては訳の分からんことを言っておったわ

暗くて陰陰滅滅とした話。

クラীগは妹のために人間性を狩り続けていた。向かってくる者であろうと逃げる者であろうと。

い程。
時には女子供にまで手をかけた。人間性に年齢性別は関係が無いから。数えきれない程。

最初は心を乱した。半狂乱になる程に。その内、どうでも良くなった。心が死んだ。

何も感じなくなつた。

だからか、黒髪の妖艶な美女はいつしか下半身に蜘蛛を持つデーモンと化していた。

別になんとも。

逆に狩りがしやすくなつた分ありがたい話じゃな。

優越感？

無いと言えば嘘になるかの、我を前にしては皆、然したる抵抗もできず逃げ惑い、人間性を狩られるだけじゃつたからな。

持つ剣はいつしかどす黒い炎を纏うようになった。下半身の蜘蛛はいつしか炎を吐き出し、溶岩帯を作るようになった。

くくく、圧倒的ではないか。

妹は何も言わなくなつた。

白い妹はクラীগと同じく蜘蛛の下半身を宿し、岩の洞穴深くに佇んでいた。

愛する者と狩る者、交われる訳がない。

しかし姉妹の縁は切れない。

妹は何か言いたげな瞳でクラীগを見上げるが、デーモンになった姉を見つめるだけだった。

ありがたいとクラীগは思う。

色々言いたいことはある様だが、それはクラীগも同じこと、何も言われなければ、クラীগも口を閉じていられる。

妹は馬鹿者じゃ、デーモンと化した我も馬鹿じゃが妹程ではない。

そんな混沌とした救い様の無い日々が積み重ねられていく。

不死人「お姉さん、ちよつと黒髪が邪魔でおっぱいが見えませんが。少し髪を掻き上げて貰っても良いでしょうか？」

クラীগ「……」

正直、訳が分からなかったよ。実際、双眼鏡を構えた男を前に我は思考を停止させられておった。

不死人「あ、視線はこちらを気だるげに見たままで、後、舌先で唇を舐めて見ましようか」

クラীগ「……」

全身全霊の体当たりなど初めてじゃったが、男は綺麗な放物線を描いて吹っ飛んでおったの。

あ、人間て飛べるんだ。ぼんやりとそんなことを考えたの。

まあ、悠久の年月、たまには頭のネジが抜けた輩も出てくるのじゃな、そう結論付けた。

しかし、しかし馬鹿はまたやって来た。

不死人じやった。

不死人「あのさ、いきなり攻撃はどうかと思うんですよ。」

クラীগ「・・・あ、お・・・っ！」

恥ずかしながら何年も声を出さず、妹とも会話しなかった結果、私の喉は掠れた音しか発せず、言葉を紡ぐ事は出来なかった。

不死人「おやおや、自分の悪行に声も出せませんか。分かれば良いのです」

クラীগ「だっ！・・・おっ!!」

不死人「まあ、こちらもいきなりおっぱい丸出しは無理な要求だったかも知れませんが、

反省反省です」

クラীগ「ーっっ!!」

不死人「では、手ブラから始めてみましょう、まずその柔らかかそうで大きなおっぱいを掌で隠してみましょう。あ、おっぱいを押さえつけては駄目ですよ？あくまで添えるだけ、それで慣れてきたら人差し指と中指の二本だけで乳首ちゃんを隠してみましょう、ドキドキ？なんならピースして指を開いて乳首ちゃんを御開帳しても良いですよ、それと顎を引いて上目遣いでこちらを見て下さい、・・・あれ？顔が真っ赤ですよ？どうしました？」

なるほど、勢い良く溶岩を吹き掛けると人間てあんな風になるんだ。グロいなー。

不死人「なんで攻撃してくるんだよっ！」

クラীগ「何故、攻撃されんと考えるのじゃ？」

実はクラীগ、誰も居ない棲みかで、あーとかうーとか、あ・あ・あとか発声練習をしていた。

何をやっとするんじゃないかとチラリと考えたが、言われっぱなしは気に食わなかった。

一言言わねば気が済まん。

クラীগ「ここは我が棲みか、立ち去れいっ！そもそも貴様は・・・」

不死人「わ、ハスキーボイス！お姉さんぴったりだ！」

クラীগ「は？」

不死人「ちよつと『もう仕方ない奴じやのう』って言いながらおっぱいを両手で抱えてこちらに差し出してみて貰えませんか？『い、痛くするでないぞ・・・』って続けて下さい、あと、おっぱいをユサユサ揺らしながら『こんなことが楽しいのか？』と恥ずかしそうに言ってくだ・・・」

クラীগ「斬っ！」

なるほど、炎の剣で人を脳天から真つ二つにするとあんな風になるんだ。
発声練習をした意味は無かったな。

不死人「分かりました、エロ方面はお気に召さないと」

クラীগ「貴様の存在がお気に召さぬのじゃ」

不死人「あら、嫌われちゃったかな？」

クラীগ「・・・嫌われない要素があつたとしても？」

不死人「はあ・・・それじゃあ、勝手に双眼鏡でおっぱいを見えますのでお姉さんも
気にせずについて下さい」

クラীগ「貴様、デーモンだからって何をしても良い訳ではないぞ？」
不死人「？」

クラীগ「普通の娘にはこんなこと言ったり、やったりせんじやろうがつ!!」
不死人「やりますが？」

クラীগ「なお悪いわっ!!」

なるほど、蜘蛛の足でも角度と速度が良ければ鎧を貫くことが出来るのじやな。
なかなか善き手応えじやったわい。

クラীগ「しばらく姿を見せんと思ったら、こんな隅っこでココソと・・・」

不死人「・・・100点満点！」

クラীগ「はあ？」

不死人「余すところなく観察させて貰いましたよ・・・ええお姉さんの胸のおっぱいやん、いえ、揺れる美双丘を!!」

クラীগ「なっ!!」

不死人「ふ、お姉さん、完敗です、お姉さんのおっぱいに乾杯です！大きさはFカッブでありながら奇跡の吊り鐘型！ツンと上向きのおっぱい、あ、ロケットおっぱいと僕は呼んでいます。少しも垂れていないのは驚愕です、垂れ始めてもそれはそれで妖艶さは増しますがね。そしてお姉さんが歩く度にユサリユサりと動きますが、柔らかげでありながら弾力のあるブルンブルン感も見てとれました。ふふ、白めの肌色ですが炎に充てられてたまに上気していましたよ？桜色おっぱいでしたよ？そして感動の乳首ちゃんは・・・」

クラীগ「・・・とう」グチャリッ！

なるほど、人の話は最後まで聞くべきじゃが、そうしなくても良いときもあるんじゃない。

勉強になったわい。

不死人「何故、乳首ちゃんの話をさせないっ！」

クラীগ「あ、すみません、気持ち悪かったもので」

不死人「あれ、話し方変わった?!」

クラীগ「申し訳ありませんが、そちらの御意見は参考にさせていただきますので」

不死人「あ、これ、参考にもする気がないやつだ、相手にされていかないやつだ」

クラীগ「それではお引き取りを」

不死人「その話し方でフト思ったんだけど、白色ワイシャツとスーツ着て貰って良いですか？胸元は少しボタンを開け気味で。パツパツ感を出すためにはワンサイズ小さい方がいいのかな・・・？勿論ノーブラね。ワイシャツに水を吹き掛けて湿らせておきますね、うつすら透ける豊満ロケットおっぱい、良いですね。あ、乳首は起つきさせときましょうね。表情はハアハアして貰えますか？」

クラীগ「お帰りはこちらです」グチャリツ!!

なるほど、色々なシチュエーションで楽しむ・・・いや、待て待て、違う違う、馬鹿に引つ張られとる。

誠に道理の通じぬ馬鹿の一念恐るべし。

不死人「どうですか！今のローリング、紙一重ですよ？キyunとしました？」

クラীগ「ブンブン飛び回る蠅にキyunとくる程特別な性癖は持ち合わせとらんわい」

不死人「人を虫扱いしやがった！」

クラীগ「最近、チョコマカ逃げることを覚えおつて……うつとおしい、フン！」ブ
ンツ！

不死人「おつと……」ゴロゴロ

クラীগ「ちっ！」

不死人「ふふ、いいんですか？そんな大振りして」

クラীগ「なにつ！」

不死人「お姉さんの大きなおっぱい様がブルンブルン素敵に揺れて僕を誘ってますよ？
恥ずかしいけど本当は僕に見て欲しいんですよ？分かります」

クラীগ「……」ドブルンツ

不死人「わーっ！敢えておっぱいを晒した?！」

クラীগ「おりゃあつ！」

なるほど、こやつは胸を晒すと硬直して攻撃を叩き込み放題になるのじやな。
今のは気持ち良かったの。

不死人「そろそろ、触ってみても良いですか？」

クラーグ「死ねっ！」ブオッ

不死人「おっと」ゴロゴロ

クラীগ「ちつ、避けるな」

不死人「いや、流石に溶岩は熱いので・・・少し提案があるのですが」

クラীগ「なんじやい」

不死人「僕がここを通る度にお姉さんにソウルを払って、お姉さんは僕におっぱいを使った御奉仕をおこなうという営業形態はどうでしょうか！」

クラীগ「は？」

不死人「本番無しで、まあ、そこはお互いの努力ということ・・・僕はハッピーお姉さんもハッピーなハッピーハウスです！」

クラীগ「人ん家を如何わしい店にするなっ！」ブンツブンツ

不死人「ひえっ！」

なるほど、馬鹿は馬鹿なりに馬鹿馬鹿しいことを考えるもんじやな。

しかし、こやつは我が、いらっしやいませーとか言い出したらどの様な顔をするのかのお。

くくく。

クラীগ「くっ！」

不死人「わっ、危ないっ！ごめんなさい！」

クラীগ「・・・戦いの最中に謝るでないわい」

不死人「うわー、もう少しでおっぱいに傷をつけるところでした」

クラীগ「フン、そんな緩い攻撃など当たるものか」

不死人「・・・最近、色々な場所に回って結構経験積めてるんですよ」

クラীগ「ほう、武者修行かの」

不死人「ええ、剣筋が早くなってるでしょ？」

クラীগ「ふん、大して変わっとらんわい、我に抗おうと必死じゃの・・・」

不死人「そんなものですね・・・あ、大丈夫です、今のところお姉さんのおっぱいを超えるおっぱいには出会ってませんから安心して下さい、あ、見ます？僕の出会ったおっぱいノート」

クラীগ「なんの修行をしとるんじやっ！」ブンツ

不死人「うおっと！」カキンツ！

クラীগ「さっさと他の所に行つてしまえ」

不死人「ふ、嫉妬ですか？お姉さん」

クラীগ「・・・」

不死人「わー、生ゴミを見る目だ、お姉さんの気持ちが良い分かるなあ」

クラীগ「分かつて貰えて嬉しいのお」

なるほど、最近、手こずると思つたらそんなことをしておつたのか。馬鹿は放つてお

くと何をするか分からんのお。

それにしてもおっぱいノートって・・・

我の事はどの様に書かれておるのかの？

正直、うっとおしいよ。

めんどくさかったよ。

何せ、何をどう言っても、何度ぶちのめしても、何度も何度も何度も現れるの
じゃから。

いい加減にしてくれと思った。

良い加減を知れと思った。

そう思うじゃろ？

殺して死んでいた心が、バキバキと音を立てて軋まされたわい。

我は貴様とは、はしやげぬ人外の畜生化物じゃ。

貴様と楽しい時間を過ごす事など許されぬ者じゃ、いや物じゃ。

少しづつではあるが貴様の剣の腕が上がっていくのを実は嬉しく思っておったなどと言える立場ではない。

だからの、貴様。

我の胸元を貫く刀を呆然と見つめるな。

そんな苦しげな声を紡ぐな。

我は本気で貴様を殺そうとしておったよ。殺した心を更に押さえ込んで圧殺しての。

一方で何度も何度も何度も何度も刃を重ねる内に次第に殺し合いながらの会話が長引いて、貴様の腕の上達ぶりを頼もしくも思つとつたよ。

嘘ではなく本当にの、こんな気持ちをなんと言えば良いのか、我は知らん。

殺し愛。かの？

だからの、貴様。

悲しげに我の頬に手を伸ばすな、貴様の執着は我の胸ではなかつたかの？ 100点満点なんじやろ？ 今なら触り放題じゃのに、チキンじゃのう。

まあ、貴様に頬を優しく撫でられるのも悪くはない。

何を泣く……。

不死人の戦士の癖に。

いや、我もデーモンの癖に。

涙が止まらんわい。

嫌な気持ちではないぞ。

ふふ、涙を拭ってくれるのか？

だから、我もそつと貴様の涙を指で掬ってやろう。

ほれ、泣くな、進め。

貴様が悔やまぬよう微笑んでもやろう。

ほれ、泣くな、進め。

この先にはのお、我のいけ好かない妹がおる。

まあ、貴様好みではないかも知れんが、胸の残念な娘だが、大切な妹なんじや。

貴様なら色々と面倒を見てくれるのじやろう？

多分。

ほれ、泣くな、進め。

体が、蜘蛛の、デーモンの体が、白く、溶けて崩れていくのお・・・

貴様。

馬鹿なりに進め。

ではの。

私の、デーモンとなったクラークの話はここまでじゃ。次の不死人の話を待つが良いぞ？待っても何も出んぞ？

お前に人としての心があるなら、この話はここで終いにしておくれ。お前にも心はあるじやろう？な？

そうか、そうか、お前には人の心が無いのじやな？
ろくでなしじやのう、人の嫌がることはするなど教わらんかったかの。

そして『混沌の刃』へ。

え、なにこれ。あれ？

ちよつと待つて待つて？え？え？え？

我の魂を宿した？居合い刀に？は？なにそれ？誰が許可したんじや。

あれ？妹？我が妹？

なんで？仲良くなったの？いや、それは良いことなんだけど・・え、楽しそうにしと

るの？

え、なんで、妹の小さいおっぱいを揉んだりするの？なんでも良かったのかの？

あれ？何か納得がいかなの？

は？好き嫌いするな？馬鹿妹が何を偉そうに言つとるのじゃ？こんな奴じやつたか？え？なにこいつ。

貴様もデレデレしてる？変わり無い？いや、我にしつこく絡んできとつたのではないのか？

混沌の刃　ガタガタ！カタカタカタカタ！！

ダークソウル 謝罪編

ダークソウル 謝罪編

不死人「幽霊やべえよ・・・」

蜘蛛女「は？幽霊？」

不死人「おう、楔のデーモンがなんともならないから、別エリアに行ったんだけどさ」
蜘蛛女「うん」

不死人「なんかこう、湖みたいなとこでき、岩の搭とか木の橋がある所で」

蜘蛛女「へえ、素敵な所ね」

不死人「馬鹿、薄暗くて気持ち悪いんだって」

蜘蛛女「・・・馬鹿に馬鹿って言われるとイラってするわねえ」

不死人「そこはスルーしてくれ、それで進んでくとき・・・」

蜘蛛女「幽霊が出たの？」

不死人「うん、出た」

蜘蛛女「どんな奴？オバQ？」

不死人「それはそれで怖いよ！違うよ、修道女みたいななの」

蜘蛛女「ほう・・・」

不死人「あれ？目付きが悪くなってるよ？」

蜘蛛女「修道女ねえ、どうせ胸がどうか何とか言うんでしょ」

不死人「言わないよ？全身半透明の霧みたいな奴でさ、なんかヒラヒラフワフワの服着てたから体型とかよく分かんない」

蜘蛛女「ふーん」

不死人「取り敢えず、フワフワ飛んでる真下にダツシユで潜り込んでどんなパンツ履いてるかは確かめた」

蜘蛛女「あー、私なんでこいつと話をしてんだろう、帰ってくれる？もう家ご飯なんだ」

不死人「待って、見捨てないで、結局白い霧の固まりしか見えなかったから」

蜘蛛女「いや、見たとか見てないとかじゃなくて、スカートの中を覗こうっていうあなたの行動が問題なんだよ？」

不死人「上見て走り込んで何度崖から水底に落ちたことか・・・」

蜘蛛女「しかも命賭けてやがった」

不死人「あいつら、僕が下から覗き込んでもイヤーンとかやらないし、普通に攻撃し

てくるし」

蜘蛛女「幽霊に、しかも修道女に何を求めてる？」

不死人「え？修道女とかテンション上がらない？」

蜘蛛女「特殊な性癖を私に言わないで」

不死人「いやいや、特殊じゃないよ?!ほら、こうキチツとしている女性とか素敵じゃない?」

蜘蛛女「はあ？結局エッチい話になるんでしょ？」

不死人「いやいや、そういうことじゃなくて、仕事をしていると言うか、信念があると言うか、ちゃんとしている女の人って魅力的だよねって話」

蜘蛛女「あー、はいはい」

不死人「くそ・・・このエロテイシズムをどう伝えればいいんだ?!この狙わずしてエロテイシズムが発生する法則をっ!!」

蜘蛛女「・・・私さあ、プーなんだよねー」

不死人「・・・」

蜘蛛女「皆様が使命だなんだとアレコレ東奔西走されている間、ぼけーつとしてるだけなんだー、ごめんね」

不死人「・・・ふぎゅ」

蜘蛛女「狙わないエロティシズム？キチツとしている女のエロティシズム？へーそんなのあるんだー」

不死人「いや、あの、その」

蜘蛛女「服とかも着てないし、申し訳ないわねー」

不死人「ぼ、僕の特特殊な性癖ですから・・・気にしないで下さい」

蜘蛛女「あれ？特殊じゃないって・・・」

不死人「ううん、特殊ですよ？僕だけですよ？マイノリティですよ？」

蜘蛛女「嘘ついていたの？」

不死人「嘘なんかついてません、言い方の問題でした」

蜘蛛女「ふーん、じゃあ、あんた変態なの？」

不死人「え？・・・ま、まあそうですね・・・」

蜘蛛女「じゃあ、ちゃんと謝らなきや、変態でごめんなさいって」

不死人「え？」

蜘蛛女「ね、変態が訳の分からない話をして、私が傷つきそうになったんでしょ？だから謝らなきや」

不死人「そ、そうなりますか・・・ね」

蜘蛛女「さん、はい」

不死人「へ、へんたいで、ご、ごめんなさい・・・」

蜘蛛女「ん？なんて？」

不死人「へ、変態でごめんなさいっ」グスツグスン

蜘蛛女「あれ？なんで泣いてるの？悔しいの？本当はそう思っていないの？」

不死人「ち、違います、こ、これは自分の愚かさを悔いる涙です」

蜘蛛女「へー、だったらそれも謝らなきゃいけないんじゃない？」

不死人「あ、はい、愚かでごめんなさい・・・」

蜘蛛女「変態が抜けてるわよ」

不死人「へ、変態で愚かでごめんなさいっ！」

蜘蛛女「あれ？なんで立ったまま謝ってるの？謝るときってどんな姿勢になるんだっけ？」

不死人「は、はい、頭を下げます！」

蜘蛛女「ふーん、ならそうすべきよね」

不死人「はい！」

・
・
・

不死人はパンツ一丁で仰向けに腹を晒し、犬のごとく手足を丸めて息を荒くする。蜘蛛姫の蜘蛛の足が不死人の胸ぐらをグリグリと踏みつける。

不死人「はあはあ、御主人様あ、僕は、はあはあ、僕は、恥ずかしい格好を見られて、はあはあ、喜ぶ変態の愚か者ですう、はあはあ、もつと、踏み踏みして叱ってください
いいい」

蜘蛛姫「しまったやり過ぎた」

ダークソウル 恋愛指南編

ダークソウル 恋愛指南編

ダークソウルガールズ新春号

【ラブテクニックスバイブル】

おハロー！みんな元気にラブってる？

え？恋のライバル出現?!そんな時も焦らないで。

気になる男の子に接近する女狐や雌豚が現れたらあなたは焦っちゃおう？

大丈夫！

今から教えるテクニックスを使えば女狐雌豚の好感度をズンドコまで貶めて、逆に貴女の好感度はラブマックスしちゃうわ。

その方法は、男の子に女狐雌豚との相性が最悪で、女狐雌豚はそんなに良い女じゃないって気付かせるの。

え？悪口を言うのかって？ふふそんなことをしたら貴女の好感度はズタズタよ。

貴方に悪口は似合わないわ。

悪口を言うほど男の好感度は下がるからね。

その方法は、男の子に指摘する風を装って、女狐の最悪さ加減を教え込むのよ。

女狐の話が出たら、間接的に駄目な所を指摘するの。

そうすれば、ほら！

男の子は、『あれ、女狐雌豚って駄目なんじゃない？ん、目の前にいるこの子の方が良くない？あれ？俺なんでこんな女神様を放って置いたんだ？えつやばくない？愛してる』となるわ。

後は二人で夜のデーモン遺跡に・・・

蜘蛛姫「ふむふむ・・・馬鹿らし、こんな嘘っぱち」

蜘蛛姫「・・・別に私には関係ないしね」

蜘蛛姫「けど、まあねえ、せっかくだから・・・ねえ」

蜘蛛姫「実験的・・・そう！実験的な意味合いで！」

蜘蛛姫「ふむふむ」

・
・
・

不死人「やったぜ！楔のデーモンを撃破ーっ！」

蜘蛛姫「おー、やったね」

不死人「この雷属性のクレイモアがあれば何とかなつた！」

蜘蛛姫「・・・あれ？お姉ちゃんの刀・・・」

不死人「うおーっ！このクレイモアの突きはリーチもあつて強力だぜえっ！」

蜘蛛姫「えーと、お姉ちゃ・・・」

不死人「しかもっ！隙があれば突きからの切り上げでダメージを上乗せ！」

蜘蛛姫「お姉ちゃんの混沌の刃は？」

不死人「・・・何故、聞こえない振りをしているのに気を使わないの？」

蜘蛛姫「そんなの知らない、で、なんでお姉ちゃんの混沌の刃使わないの？」

不死人「使ってるよ？ただ楔のデーモンには相性が悪いから・・・」

蜘蛛姫「ふーん、お姉ちゃん、面食いなのかな？」

不死人「いやいや、別にお姉さんの好みは関係ないよ？武器の特性と楔のデーモンの倒し方が合わなかったただけ」

蜘蛛姫「へー」

不死人「だからほら、普段は混沌の刃を使ってるんじゃない」

混沌の刃「・・・」

蜘蛛姫「なるほどねー、つまりあんたは時と場合、場所によって女を使い分けるのね？」

不死人「何故その結論になる?!」

蜘蛛姫「あーあ、せっかくお姉ちゃんのソウルを使った刀を作ったのに、もうポイするんだ」

不死人「使ってるよ?!ポイしてないよっ？」

蜘蛛姫「なーんか都合の良い女扱い感が感じられちゃうなー」

不死人「なんでっ？敵によって武器を変えただけでそこまで言われてるの？」

蜘蛛姫「こいつ使えねーなって感じ？相性悪いなーって思っちゃった？」

不死人「言葉に悪意しか感じられない・・・」

蜘蛛姫「まあねえ、お姉ちゃんも使い勝手が悪いところはあるかもね」

不死人「え・・・まあ、使う度にダメージをこっちも食らうってのはあるけど」

蜘蛛姫「ふーん、じゃあシビアな戦いだと混沌の刃は向いてないのかもね」

不死人「・・・うん」

蜘蛛姫「えっと雷のクレイモアだっけ？普段使いでもそっちの方が良いんじゃない？」

不死人「・・・」

蜘蛛姫「刀にこだわって苦戦してたら意味無いしね」

不死人「・・・」

蜘蛛姫「・・・くくっ！マニユアル通りっ！絶対的好手っ！！これでこいつもお姉ちゃんにこだわる事もなくなる、私に夢中？ふふ、私の魅力に参っちゃう？うへへへ」

不死人「・・・僕が間違ってた」

蜘蛛姫「うん！（キター！ラブマックスキター）」

不死人「こいつと戦い抜くって決めてたのにつ！」スチャツ

混沌の刃 カタツ！

蜘蛛姫「へ？」

不死人「ちょっと苦戦したからって！違う武器を使うなんて！僕はっ僕は間違ってたっ！」

蜘蛛姫「おや？」

不死人「ごめんな・・・お前を裏切るような事をして・・・こんな・・・こんな情けない僕だけど一緒に死線を越えてくれるか？」

混沌の刃 ガタツ！

不死人「・・・ありがとう」ギユツ

混沌の刃 カタカタ・・・

蜘蛛姫「あれ？なんか違う。思ってたのと違う」

ダークソウル 師弟編

ダークソウル 師弟編

不死人は蜘蛛姫のいる棲みかに向かう道中、不意に気が付く。毒沼をズボズボ歩きながら気付く。

不死人「あれ？僕ってこのエリア探索してなくない？」

少し考えてみよう。

不死人は記憶を辿る。

不死人の頭の中はすぐにクラীগのおっぱいの記憶と思い出で満たされる。

不死人「あれは素晴らしかった・・・」

混沌の刃 カタツ？

急に感慨深げに呟く不死人に混沌の刃が不思議そうに震え鳴る。

不死人はクラীগのおっぱいが如何に素晴らしかったか力説を始めようとしたが、混沌の刃を使用する度に受ける自傷ダメージが跳ね上がりそうな予感がしたので口をつぐむ。

ふ、僕も色々と学んできたってことかな？

しかし、やつぱり、この辺りを探索した記憶がない。

ちつぱい姫と出会った後もこちら辺を探索した覚えはないや。

それもそのはず、不死人はクラীগの棲みかまで一直線に向かい続けていたからである。当時はクラীগの美乳を愛でるだけが目的だったから。

え？他に寄る意味とかあんの？あのおっぱいプルンプルンでエロいお姉さんを超えるイベントとか発生するの？と考えて脇目などふらず一直線であった。

蜘蛛姫と知り合ってから、あの娘と遊ぶため来ていたので寄り道する必要がなかった。

うーん、と不死人は考える。

最近、混沌の刃を使い込んで修行しているけど丁度良いかもしれない。

好き好んで歩き回りたいエリアではないけど、何か良いものが有るかもしれない。

もしかしたら、ポインちゃんが付き合って下さい、ずっと前から好きでしたと頬を染めながら言ってくるかも知れない。

デーモンに襲われるお姫様を助けたら、抱いてとお願いされるかもしれない。

天から女の子が降ってくるかもしれない。

新しい飛行艇の設計主任が可愛い女の子かも知れない。それでスゲーなつかれるの。

不死人は彼女がいなくても関わらず、バレンタインの日にウキウキしてしまう男性諸氏の気分になっていた。

貴兄、思い当たる事はないか？

不死人「よーし！いつちよう回ってみようか、鬼が出るか蛇が出るかだ、いくぜ！」
チャキン

混沌の刃 カキン！

意気揚々と刀を振りかざす不死人に混沌の刃が鏢を鳴らして応える。

不死人の心、混沌の刃知らず。

そしてこの探索が物語の歯車を加速させる人物との邂逅をもたらす。

そう、この蜘蛛姫がいるエリア近くに身を潜め、隠匿し続ける人物である。

不死人「・・・」

恥女「フシユー、フシユー」

不死人「・・・」

恥女「フシユー、フシユー」

不死人「……」

そして不死人はずた袋を被った乳と尻をボロ切れで隠す？隠せているのか？恥女と邂逅する。

しかも恥女は人の背丈ほどある血塗れ錆び錆びの肉切り包丁と木屑を纏めた盾を持っていた。

違う人物との邂逅を想像した方もいるかもしれない。

クラীগの棲みか付近にいる。長女的な人物を思い浮かべた方もいるかもしれない。

不死人「予想を軽く越えやがったっ!!」

恥女「!」ビクッ

不死人「なんで恥女なんだよっ!」

恥女「……チジヨ、チガウ。」

不死人「喋った?!」

恥女「アヤマレ」

不死人「いや、乳とケツをほぼ丸出しにして徘徊してれば恥女呼ばわりも仕方がないよ?。」

恥女「ナルホド」

不死人「あ、恥女が納得した」

不死人は改めて恥女を見る。なるほどなかなかの我が儘ボデイさんである。が、ちつとも嬉しくないのはどうしてだろう？

いや、小汚ない布袋を被ったポロ切れ女では、なんというか、こう、どこかの現住民族（裸族）の姿を見たのに等しい。

エロメーターがピクリともしやがらねえ。

それにしても血塗れの肉切り包丁とは・・・

不死人は深くため息をつく。

恥女「ナマエ、ミルドレッド、チジヨ、チガウ」

不死人「はあ・・・ミルドレッドさんですか・・・何だろう、この全く何も安心出来ない感じは・・・」

ミルドレッド「アンシン、シテ」

不死人「いえ、目の前にズタ袋を被って血塗れの包丁を持つカタコトの輩がいるんですよ？」

ミルドレッド「ダイジョウブ、ホカノヒト、『人食いミルドレッド』ト、ヨブ、アンシン」

不死人「その通り名、不安感しかねえよっ!!」

ミルドレッド「オヤオヤ」

不死人「えっ？僕、襲われちゃうの？バトル？」

ミルドレッド「ノンノン」

不死人「本当かよ・・・？」

ミルドレッド「バスト、ヒップ、ダイスキ？オソワレタイ？」

不死人「いえ、泥沼に良質なシュークリームを落として踏んだ様な残念な気持ちで一杯です。」

ミルドレッド「ゴマカシテル、ハズカシガツテル」

不死人「よし！掛かって来い、相手になってやる」

ミルドレッド「コウカイ、スルヨ？」

不死人「うん、出会った所から後悔しかないよ・・・」

ミルドレッド「ツンデレ？」

不死人「もう何を言っても駄目な事が分かりました・・・はあ・・・で、何か御用があるのですか？」

ミルドレッド「ワタシ、アナタニ、ケン、オシエル」

不死人「あーそうですかそれはおつかれさまですそれではしつれいします」

ミルドレット「ツヨクナルヨ？」

不死人「いや、デカイ包丁構えた奴から学ぶことはねーよ、だいたいズタ袋被つてボロ切れ着てる奴とここまで話している自分にビックリだよ……」

ミルドレット「デハ、シユギヨウ、ハジメルヨ」

不死人「ごめんなさい、本当に意味が分かりません」

ミルドレット「イクヨ」スチャ

不死人「えー」

馬鹿みたいな格好はしていても同じ世界の住人、不死人はミルドレットを舐めちやいない。

訳が分からないが。

ミルドレットが構えた瞬間から不死人は、ミルドレットのたくましい腕を見て、一撃を混沌の刃で流し避けられるよう身構えた。

ミルドレットの体勢が崩せれば一撃を入れて逃げよう、そう決意した。

次の瞬間、不死人は混沌の刃の切っ先をそつと下方に向けられ肉切り包丁を首筋に突き付けられていた。

不死人「……え」

ミルドレットの肉切り包丁を握る拳がピクリとした瞬間までは見えていた。

いつの間にか刀を握る不死人の腕が下に向けられ、顎を上向きに上げられて、肉切り包丁に首の皮一枚を裂かれていた。

不死人、全く認識できず。

ミルドレット「ゼンゼン、ダメ」

不死人「ええーっ!!」

ミルドレット「ヨワスギ」

不死人「ま、まじかつ!？」

ミルドレット「シユギヨウ、スル?」

不死人「ち、ちよつと待って、え?!真面目にか?!ショックだ!!僕そんなに弱かったっけっ?」

ミルドレット「シユギヨウ、スル?」

不死人「・・・」

ミルドレット「・・・」

不死人「・・・」

ミルドレット「ホラ、オツパイ」バインバイン

不死人「そんな身体を揺すられても・・・ああ揺れてるなあ位の感想しか出てきませ

ん

ミルドレット「・・・」

不死人「・・・」

ミルドレット「チラリ」

不死人「そんなボロ切れ捲られても・・・」

ミルドレット「・・・」

不死人「・・・」

ミルドレット「シユギヨウ、スルヨ？」

不死人「・・・」

ミルドレット「・・・」

不死人「あ、この人、ミルドレットさん」

ミルドレット「オッス、オラ、ミルドレット」

蜘蛛姫「凄いの紹介された！」

不死人「僕の剣の師匠」

蜘蛛姫「凄いこと言われた!!」

ダークソウル 絆編

ダークソウル 絆編

蜘蛛姫「で、どうなのよ？」

不死人「へ？」

蜘蛛姫「あの大きな包丁を持った奴」

不死人「ミルドレッド師匠の事？」

蜘蛛姫「師匠で……」

不死人「いや、僕もアレの弟子とは人には知られたくないけど……師匠と呼ぶには抵抗があるけどさ……」

蜘蛛姫「大体、師匠と弟子つてもっと強い絆とかで結ばれてるもんでしょ？あるの絆？」

不死人「……無いかも」

蜘蛛姫「そんなの師弟とは言えないわよ、絆よ、絆が必要な不死人「うーん、でも……師匠の強さは魅力的なんだよな」」

蜘蛛姫「そんなに？」

不死人「半端ない」

蜘蛛姫「本当？なんかネタキャラ臭がプンプンしてるんだけど」

不死人「うん、それは全肯定なんだけどね」

蜘蛛姫「強いんだ」

不死人「僕を1としたら師匠は100以上の強さなんだよな」

蜘蛛姫「ダブルスコアどころじゃないじゃん?! えっ、そんなになの」

不死人「うん、悔しいけど太刀筋が全然見えない、最初、時間停止の能力を使ってるって思ったもん」

蜘蛛姫「えー、そんなに強かったんだ・・・やば、この前初めて会ったとき、追い返しちゃった・・・」

不死人「うん、師匠悲しそうにトボトボ帰っていったね」

蜘蛛姫「だって、いきなりズタ袋被った裸同然の女を紹介されたんだもん」

不死人「たしかに仲良くなりたいタイプではない」

蜘蛛姫「カタコトだし」

不死人「確かに」

蜘蛛姫「どんな稽古してるの？ちゃんと教えてもらってるの？」

不死人「基本、師匠と戦い続けている、全然手を抜いてくれてるけどね」

蜘蛛姫「ふーん、ここはこうしろとか、ああしろとか教わりながら？」

不死人「師匠にそんな事が出来るとでも？」

蜘蛛姫「戦うだけなんだ・・・」

不死人「まあ、何とか師匠の動きをトレースするだけで精一杯、たまに、『ダメ』とか

『ヨイ』とか『オッパイ』とか言ってくれるよ?」

蜘蛛姫「オッパイって何なの?!」

不死人「僕にも分からないよ!ガンガン打ち込んでいる最中にいきなり『オッパイ』って言われる身になってよ!」

蜘蛛姫「どういう意味で言ってるのよ・・・」

不死人「1度聞いたんだよ?師匠、オッパイってどういう意味ですか?ヨイですか、ダメですか?」

蜘蛛姫「ふんふん」

不死人「したら師匠、その場でピョンって飛んでおっぱいをブルンてさせて『コウ?』って首を傾げたんだよ・・・」

蜘蛛姫「?」

不死人「僕もその反応しか出来なかったよ!」

蜘蛛姫「うーん、何なんだろう」

不死人「まあ捕らえ所の無い人ではある」

蜘蛛姫「良いのかなあこのままで・・・」

不死人「うーん、剣の腕は上がってる気はするけど」

不死人と蜘蛛姫は二人して腕組みをして考え込む。考えても答えは出ないのだが。

ふと蜘蛛姫は視界の隅に、不死人の背後に茶色い何かを捉えて視線を向ける。

蜘蛛姫の住処の岩陰にそれはあった、いや、いた。膝を抱えて俯いて座り込むミルド

レッド師匠を・・・。明らかに落ち込み、ドヨーンとした空気を漂わせていた。

こころなしか、ミルドレッド師匠の周りが暗く見える。

しよぼーん。

あわわ、と蜘蛛姫は慌て、そつと不死人に後ろを見ろと指で指示する。

不死人も蜘蛛姫がそつと指差す後方をそれとなく見て、あわわ、と慌てる。

蜘蛛姫は考える。理由は良く分からないけどミルドレッドは不死人を鍛えてくれて

いる。

そして、少なくともこの男はミルドレッドの稽古を嫌がってはいない。

ならば上手くいく様にしてやろう。

蜘蛛姫「けど、良かったわね、良いお師匠さんに出会えてさ」

不死人、伊達に蜘蛛姫と遊んでいない、瞬時に蜘蛛姫の考えを汲み取りアシストは逃さない。

この時、二人の瞳はキラーンと光っていた。

不死人「そうそう、分かりにくい所はあるけど、めっちゃくちゃ良い人なんだよ」

蜘蛛姫「ねー、聞いてるだけで楽しそう」

不死人「稽古のやり方も、体で覚えろ、みたいなの？格好いいよな」

蜘蛛姫「達人って感じだわ」

不死人「うん、おっぱいボインだし」

蜘蛛姫「・・・なんだと？」

不死人「おいおい、どうしたどうした?! 僕の知るおまえは気の利く可愛い女だぞっ？僕を助けてくれる良い女のはずだぞお願いします」

蜘蛛姫「ふん・・・まあいいわ、これからも頑張りなさいよ」

不死人「ありがとう！早く師匠に会いたいな」

蜘蛛姫「あらあら」

ミルドレット「・・・コンニチワ？」

不死人「わー、師匠だー」

蜘蛛姫「まあ、ちょうどあなたの話をしていたのよ？」

ミルドレット「ワタシ、ダメ？」

不死人「駄目なわけではないですよっ！」

蜘蛛姫「誰がそんなこと言ってるの？良い師匠よ」

ミルドレット「ヨカッタ、アンシン」

蜘蛛姫「ええ、安心安心」

ニコニコと微笑む不死人と蜘蛛姫を嬉しそうにミルドレットは眺めていた。

と、ミルドレットは蜘蛛姫の姿をジーンと眺め、スツと蜘蛛姫の胸部を指差す。

ミルドレット「ダメ」

蜘蛛姫「え？」

ミルドレット「ナイ、オッパイ、カワイソウ」

不死人「」

蜘蛛姫「・・・ほー、そうかそうか喧嘩売ってんのね」

ミルドレット「？」

不死人「待て待て、師匠相手に1秒も持たないって！落ち着け！」

蜘蛛姫「女にはねえ、負けると分かっているも引いちやいけない時があんのよ」
不死人「格好いいけど！男前だけど！やめてっ！」

ミルドレッド「シユギヨウ、スル？」

蜘蛛姫「はあ？」

ミルドレッド「シユギヨウ、スル、オツパイ、ドーン」

蜘蛛姫「え？」

ミルドレッド「オツパイ、オオキクナルヨ」

蜘蛛姫「ほ、本当に・・・？」

ミルドレッド「ウン、ホントウ」

蜘蛛姫「師匠っ!!」

不死人「絆はっ?!」

蜘蛛姫「そんなもの犬にでも食わせておけ！」

不死人「おまえ、逆に清々しいな」

ダークソウル 服飾編

ダークソウル 服飾編

不死人「うーん」ガチャリ、ガチャリ

蜘蛛姫「クネクネして何してんの？自分で自分のおしりの穴を見る練習？」

不死人「最っ低の間違いだなっ！違う、鎧姿を見てたんだよ」

蜘蛛姫「ふーん、何で？新しいのに変えるの？」

不死人「別に不都合は無いけど、いつもこればかりだなーって思ってたさ」

蜘蛛姫「問題ないならいいんじゃない？」

不死人「そうなんだけど……たまには軽装の装備で戦い方を変えてみようかな、と……」

蜘蛛姫「ふーん、確かに今のあんたの鎧って重そうよね、騎士のやつ？」

不死人「うん、上級騎士の鎧だけ！ちよこちよこ強化してるんだ」

蜘蛛姫「見た目は全然変わらないのね」

不死人「まあな」

蜘蛛姫「なんかこう、肩からツノ的なものが伸びたりすると分かりやすいのね」

不死人「格好いいのか、それ？」

蜘蛛姫「じゃあ、どんどんマントが伸びてくの、最終的には3メートルくらい？」

不死人「それ絶対踏まれるか、何かに引っ掛かるよね」

蜘蛛姫「大丈夫、マントの端を持つ係りの人が二人つくから！」

不死人「どこの王族だよ!?!まともに戦えないよ」

蜘蛛姫「そっか」

不死人「さて、どんな装備にするかなー、守備力をどれぐらい削るかから考えた方が

良いのかなあ」

蜘蛛姫「考えるまでも無いでしょ？」

不死人「え？」

蜘蛛姫「あんだ、今、師事してる人いるじゃん」

不死人「うん？」

不死人装備一覧

武器

右手 肉断ち包丁

左手 木板の盾

防具・

頭 ずた袋

胴 なし

腕 なし

脚 なし

指輪 錆びた鉄輪

不死人「・・・」

蜘蛛姫「あははははっ！ミルドレッド！ミルドレッド師匠がいる！あははははーっ」

不死人「・・・」

蜘蛛姫「け、軽装になれて、よ、良かったね、ぶふふうっ！」ケラケラケラ

不死人「・・・」

蜘蛛姫「あー笑ったー、頭のずた袋が良い味だしてるわー」

不死人「ふしゅー、ふしゅー」

蜘蛛姫「あははははっ！あは！ミ、ミルドレッドの呼吸音っ！あははははっ！」

不死人「ボク、ケイソウ、シユギヨウ、スル？」

蜘蛛姫「あはははははははっ！しゃ、しゃべり方もミルドレッドになってるっ！」

不死人「トテモ、サムイ・・・」

蜘蛛姫「ははははっ！そ、そりや、さ、寒いわよっ！あはははははっ！く、苦しいっ！あははは！笑いすぎて苦しい！」

不死人「まあ、これは無いな」

蜘蛛姫「くすすつ、無いわねー」

不死人「そう言えばさ」

蜘蛛姫「うん」

不死人「おまえもミルドレッド師匠の弟子になってたよな」

蜘蛛姫「はい？」

蜘蛛姫装備一覽

武器

右手 肉断ち包丁

左手 木板の盾

防具・

頭 ずた袋

胴 なし

腕 なし

脚 蜘蛛の足

指輪 錆びた鉄輪

不死人 「・・・」

蜘蛛姫 「・・・」

不死人 「・・・」

蜘蛛姫 「・・・」

不死人 「・・・」

蜘蛛姫 「・・・」

不死人 「・・・ミ」

蜘蛛姫 「？」

不死人 「ミルドレット、イチゾク」

蜘蛛姫「アハハハハハハハ」

不死人「アハハハハハハハ」

蜘蛛姫「アハハハハハハハ、

・・・フシユフシユフシユフシユ」

不死人「い、息が激しいっ！あははははっ！あはははは！」

蜘蛛姫「胸の装備はマナ板」

不死人「じ、自虐ネタはやめろっ！あははははっ！」

蜘蛛姫「あははははっ！」

蜘蛛姫の棲みかで、ずた袋を被った不死人と蜘蛛姫がお互いに指差しながら笑い声を響かせる。

不死人が肉断ち包丁を振り上げドタドタと駆け回ると、蜘蛛姫は笑いを止められなくなり涙を流して笑う。

こんな日がいっまでも続くといいなあと蜘蛛姫は思うのでした。

ダークソウル 悪霊編

ダークソウル 悪霊編

不死人は最下層の回廊隅で息を整える。右手の武器を確認する、混沌の刃は切っ先の下部分に数ヶ所歯こぼれがあつたがまだまだ使えそうだ。

不死人は囁く。

「ごめんな苦勞させてばかりで、次篝火に行ったら直すね」

不死人の手の中の混沌の刃の柄が微かに震え、不死人は『構わん』と答えてくれた様に感じる。

さて、少し落ち着いてきた所で状況を確認してみよう。

いつもの如く蜘蛛姫に捧げる人間性をセコセコと集めていた。が、不意に感じる閉塞感、ヌルリとした悪寒に全身を包まれる。

以前にもあつた別世界からの侵入者だ。不死人は思わず唾を吐き捨ててしまう。

もし神様のような存在が有るとしたら、よつほど怠惰で下界のことに見向きもしていないか、クレイジーな思考の持ち主だろう、不死人は決めつける。

救いの無い世界過ぎる。

なんだって、わざわざ人の世界まで来て、殺し合いを始める？どこか別の場所で勝手にやってくれ。

突然目の前の通路脇から刃物を振り下ろされた。

不死人はローリングでかわそうとしたものの、ギンと鎧の背中辺りを削られ火花を散らす。焦げ臭い臭いが辺りに漂う。

大丈夫、身体には届いていない。ミルドレッド装備でなくてよかった。

赤く不気味に輝き、表情など欠片も分からない侵入者が不死人の目の前に立っていた。

いいさ、わざわざ人の世界にまで侵入して殺し合いに来る奴だ、クソみたいな顔に決まっている、見るまでもない。

ブンブンと薙刀の様な刃物を振り回しながら不死人との距離を詰めてくる侵入者。

よく見るとその刃は炎に包まれて揺らめいていた。

炎系統に強化か？わざわざそんなもん持って来るんじゃないやねーよ。

「二人でやっつてろ馬鹿」

不死人は直ぐに脇の通路に飛び込んで一目散に逃げ駆ける。

後方から侵入者が追ってくる気配がする。

殺し合いがしたけりやてめえの身体を刺して自害しとけっ！

階段を駆け昇った不死人は振り返り様火炎壺を侵入者に向かって投げる。

ゴウツと立ち昇る炎を侵入者はバックステップでかわそうとしていたが、不死人は直ぐ様逃げたので分からない。

分かれ道が入り組んだ地形が幸いし不死人は侵入者からひとまず身を隠す事が出来た。

「あーあ、どつかの落とし穴に落ちて死なないかなあ」

不死人は嘆きながらも装備を整える。どうせ、殺し合いが大好きな気×のサイコ野郎だから諦めなどしないのは分かっている、とどめを刺してお帰り願うしかない。

どうも人間性を篝火に捧げて生者になると侵入者を呼び込んでしまう様である。

だったら生者にならなきゃ良いのにと不死人は他人事の様を考えるが、あの蜘蛛姫の姿が思い浮かぶ。

うーん、これは意地なのか、見栄なのか、あいつには不死人のままの姿をあまり見せたくはない気がする。

生者になる人間性まで自分に捧げているかも、とか思わせたくない。逆に『生者に戻る分の人間性も捧げなさいよ』頭の中にいつもの声が響きもする、あいつなら言いかねん。こちらに気を使った様な寂しげな表情も浮かんでしまう。

うむ、駄目だ分からん。

不死人は周囲に気を配りながら動かさず考える。侵入者なんかこちらを探し回らせてイライラさせるに限る。皆がためえみたいな殺人狂だと思ふな、反社会勢力め。

飯に殺られたとしても十中八九、不死人として篝火に戻るだけなのだが、気に食わない、全くもつて気に食わない、侵入者になんか殺られてたまるか。

という訳で生き延びる方策を考える。まずは落ち着こう。オーケー？

正面から対峙するのは？見たところ魔法系統は使わなさそうだが。

「いや、あの長物は厄介だ、こちらが飛び込む前に畳み込まれそうだが、却下」

飛び道具で勝負するか？

「火炎壺はそんなに無い、そもそも距離があれば回復されてしまう、却下」

何処かで待ち伏せる？背後を取れば有利だが。

「間違いないが、相手も警戒してらるだろうから、そうそう楽に背後は取れんだろう、及第点」

不死人は自問自答を繰り返す。有利な戦況を得る為、自分でプレゼンし却下を繰り返す。

ここでネガティブな思考に陥らないのが不死人の強みなのだろう。最適解を手繰り寄せていく。

『不死人にも休息は必要だろうか?』不意に男前な女騎士の声があった。不死人は体力を回復していないことに気が付く。

エール瓶を取り出し口にして体力を回復させていく。

多分、自分の勝手な思い込みと妄想の幻聴なのは分かっていたが励ましにはなった。

お陰様で1つの道筋が浮かんだ。

「うん、まずは場所を探るか」

不死人はゆっくりと音をたてない様に立ち上がると、無事に蜘蛛姫の所に戻るため、思い描く場所を求めて歩を進め始めた。

どれ程の時間が経過したのだろうか、赤黒く揺らめく侵入者は不死人の姿を見つけ出せず、何度も同じ通路を通り過ぎる。

時折、目につく死角に踏み込んで薙刀を突き入れるが手応えなど無かった。

次第に侵入者の注意力は乱れて不死人の姿を探し出すことに重きを置き始める。殺し合いを自ら始めた癖に。

と、侵入者は進む通路途中、上方から軽い衝撃を受け慌てて盾を構える。侵入者のいる通路の上にはもうひとつ上の階層があった。

ピュルルルル……ペチヨ

侵入者の兜に当たり潰れて付着するは『糞団子』、侵入者は汚物臭に包まれる。

侵入者の上の階層から行われる不死人の投擲、糞団子は虹の如く放物線を描き侵入者に当たり続ける。

「うんこーっ！」

意味をなさない不死人の雄叫びに侵入者は上の階層につながる階段めがけて駆け始める。その間もピュルルルペチヨリ、ピュルルルペチヨリと糞団子が侵入者の全身に当たり飛び散る。

不死人の糞団子投擲スキルは群を突き抜けた次元突破クラス！

恐らくは以前蜘蛛姫と勝負した『遠くに立てた棒に石ころを当てるだけの大会』の成果であろう。何がどう役に立つかわからない、何でもやってみるもんだなあ……

「うんこーっ！ うんこーっ！ うんこーっ！ うんこーっ！」

不死人の叫びと共に投擲される糞団子で侵入者の姿が糞まみれになる。侵入者は構

わずに駆け続ける。

恐らくは殺意しか無いであろう侵入者が薙刀の間合いに不死人を捉えた瞬間、侵入者の面前が炎に包まれ侵入者は仰け反る。

不死人、火炎壺を投擲。ヒット。

頭部を炎に包まれた侵入者の隙を不死人は逃さない。混沌の刃を両手に構えて飛び込むと侵入者の肩口から袈裟斬りに刃を振り下ろす。

不死人の両手には侵入者を切りつける手応えが全くなかった。

外した?!と不死人は愕然とするが目の前の侵入者の鎧は深々と引き裂かれた跡と血煙が舞っていた。

不死人は夢を見ている様に己の完璧な一筋に目をやる。

不死人は無意識に返す刀で横合いに刃を流すように撃ち、今度は鉄を削る手応えを感じながら混沌の刃を振り抜く。

侵入者は火炎壺からの連続撃に対応できずよろめく。

不死人、止めの一撃を侵入者の頭部に撃ち込むべく刃を上段に構え振り下ろす。

しかし、流石殺し合いだけを続ける侵入者、逆転手の盾での刀弾きを狙うべく手にする盾を不死人の剣筋に合わせ振る。パリイ。

うん、それ知ってる知ってる、ミルドレッド師匠にアホ程やられ続けた弾きだ。

不死人が侵入者の動きに合わせて、一步下がりがら刃先を下げ引くと侵入者の盾が空を切り、結果侵入者は不死人の前で体軀を晒した。

不死人の混沌の刃がスルリと侵入者の喉元に吸い込まれ勝負は決した。

不死人「よう、あー、大変だったあ……」

蜘蛛姫「お疲れ様ー、つて……ん……あんだ、臭い！」

不死人「……」

蜘蛛姫「え？なに？漏らしちゃったの？」

不死人「……」

蜘蛛姫「あんだ、今いくつなの？もしょうがない子ねー、ほらおいで着替えよう」

不死人「……」
蜘蛛姫「？」
不死人「……ぐすん」

ダークソウル 一番星編

ダークソウル 一番星編

蜘蛛姫「さて、ここに魔術師のとんがり帽子があります」

不死人「あるね」

蜘蛛姫「私が被ると・・・」カポ

不死人「うん」

蜘蛛姫「どう？どうかな、イメージチェンジ？」

不死人「・・・」

蜘蛛姫「なんか言ってよ」

不死人「えつとね」

蜘蛛姫「うん」

不死人「ごちやごちやし過ぎ、下半身の蜘蛛の足と帽子で視線を散らされる、うるさい姿って言えば良いのかな？何も主義主張が感じられない」

蜘蛛姫「・・・」

不死人「なんか有る物着てみました感？1つ1つは良いアイテムなんだけど全体的に見るとチグハグ、統一感が無い感じ」

蜘蛛姫「・・・」

不死人「トータルで見て纏まっていない、残念な感じに見えてしまう。崩しとかそれ以前」

蜘蛛姫「・・・(よし、我慢して話は聞いた、殺ろう)」

不死人「だいたい、せっかく会いに来て、そんなデカイ帽子被ってたらお前の顔が隠れて見えないじゃん」

蜘蛛姫「ぶひよ」

不死人「？・・・何だ、しゃっくり？」

蜘蛛姫「いいの、構わないで、続けて」

不死人「ん？だから、・・・なんだったつけ」

蜘蛛姫「私の顔が？」

不死人「そう、それ！せっかく可愛い顔してんのに隠したら勿体ないじゃん、やつぱり話はお互い顔を見ながら話した方が楽しいよ」

蜘蛛姫「うんうん」

不死人「それにせっかくサラサラストレートの綺麗な白髪も隠れてんじゃん、もつと

その白髪が生かせるファッションをだな・・・」

蜘蛛姫「ん？私の髪が何だっけ？」

不死人「いや、お前のその綺麗な白髪が隠れてるって話、その髪型って結構似合ってるよな、素朴さというか、清純というか」

蜘蛛姫「そっかそっかー」

不死人「まあ、どうしてもその帽子を被りたいなら服装を合わせて・・・」

蜘蛛姫「いーのいーの、こんな帽子、ほーい！」ヒュルルル

不死人「わー、お前ひとの装備品投げ捨てんなよ！」

蜘蛛姫「あー、ごめん、つい」

不死人「あーあー、泥が着いちやったじゃねえか、もう」

蜘蛛姫「ごめんねー」

不死人「別に良いけどさ・・・ん？なんか浮かれてる？」

蜘蛛姫「んー？別にー？そうかなあ」

不死人「？」

蜘蛛姫「ねえねえ、じゃあさじゃあさ、どんな格好だと似合うと思う？」

不死人「んー、お前に？そうだなあ・・・」

蜘蛛姫「うん」

不死人「うーん」ガサゴソ

蜘蛛姫「わくわく」

不死人「これかな？」スツ

蜘蛛姫「どれどれ」

蜘蛛姫 装備品

胴 星型のニツプルシール（金色ラメ）

蜘蛛姫「・・・」

不死人「あ、駄目だ、残念さが際立つただけだった、逆転の発想でいけると思ったんだ
けどなあ」

蜘蛛姫「・・・」

不死人「チツパイは何をしてもチツパイか・・・」

蜘蛛姫「・・・」

不死人「ふつ、僕もまだまだなあ・・・」

蜘蛛姫「……(よし、我慢して話は聞いた、殺ろう)」

ダークソウル 解明編

ダークソウル 解明編

不死人「おーすつ、いやあ相変わらずこのエリア厳しいな、毒の沼地でガリガリ体力が削られるよ」

蜘蛛姫「???くへくく／＼／＼♀。"×」

不死人「は?どうした?」

蜘蛛姫「◇『』→→「↓△」

不死人「・・・え」

蜘蛛姫「(♀)『く△◎・・・」

不死人「・・・おいおい、冗談は止めろって」

蜘蛛姫「→〃」(「!!!」

不死人「・・・え、マジで言ってるの?ちゃんと話してみて?」

蜘蛛姫「!!!」(「へ〃」●◎△↓」

不死人「えーっ!!!マジでか?!え?本当に?」

蜘蛛姫「!! → 「.:。 / (” \$ ゝ??」

不死人「ちよ、ちよつと待て!ちよつと待て、えつと・・・僕の言葉は分かる?」

蜘蛛姫「!!」” “\$ (, [} ☒」

不死人「分かるなら、頷いてみて・・・」

蜘蛛姫「●。 ” ^ 『』 ×) ? > ? :」

不死人「えー・・・伝わってないっぽい、えーと、分かる?意味は伝わっている?」

蜘蛛姫「・・・【◎●】

・

・

・

当初、不死人も蜘蛛姫もお互いに相手が何か冗談かネタを始めていると思っていた。何をやってるの?

ちよつとしつこくない?と。

しかし、お互いに言葉が通じないまま時間が経過していく。

互いに悪ノリが過ぎると怒り始め、そして互いに不安が浮かび始める相手の顔を見て、まさかと思い始める。

それでも不死人も蜘蛛姫も、そんな疑念を振り払うかの様に話し続ける。
いやいや、そんなはずはない。

何かの間違いだ、と。

しかし、やがて疑念は最悪の確信へと変わる。

不死人「本当に言葉が通じなくなってる・・・」

蜘蛛姫「」
? : X 「一・・・」

不死人と蜘蛛姫、互いの言葉が通じない。

お互いに分かる、いつもの不死人だし蜘蛛姫だ。そんな認識は当たり前だ。

それでも、お互いに何を言っているのかが全く分からない。言葉が通じない。

不死人も蜘蛛姫も呆然となり絶句。

その後も身ぶり手振りを交えて話そうとするがお互いに聞こえるのは意味を為さない音。

全く、全然、言葉が伝わらない。

どれ位時間が過ぎただろうか、不死人も蜘蛛姫も何も言えなくなってしまう。

蜘蛛姫は思う。

この男との馬鹿話は本当に楽しくて、楽しくて、いつも心待ちにしていた。

蜘蛛姫は考える。

この男と会う前の日々を。

姉とも話さなくなり、いつもポツンと洞窟の奥深くにいて、篝火が燃えているのを何とは無しに見守っていた。

それが今ではどうだ？

こんな楽しい日々が自分に訪れるなどとは思いもしなかった。そもそも願いもしなかった。自分が笑い声をあげることなど想像もしていなかった。

そんな日々が無くなってしまおう？

また、一人で篝火を眺める日々が始まる？

と、見開いていた蜘蛛姫の瞳からツウと一筋の涙が伝い落ち、やがて蜘蛛姫は顔を歪ませてポロポロと涙をこぼし始める。蜘蛛姫の唇が震え嗚咽が漏れる。

不死人「馬鹿！泣くな！」

蜘蛛姫「(◇)「?」!!」 ☆\$<!!」

何かを叫ぶ蜘蛛姫の体を不死人は力強く抱き締める。

鎧を纏った不死人が生身の蜘蛛姫を抱き締めると蜘蛛姫は痛かったかも知れない。

そんなの気にもしなかった。

不死人はか細い蜘蛛姫の体が泣いてヒクヒクとしやくり上げるのを感じ、蜘蛛姫の背

中に回した腕でポンポンと蜘蛛姫の背中を優しく叩いてやる。

不死人は蜘蛛姫の華奢な両腕がしがみつく様に自分に回されるのを感じ、心に勇気の炎を灯す。

古今東西、男が奮い立つのはこんな時だろ？

不死人「大丈夫、絶対に、大丈夫、何とかする、心配するな」

不死人は優しくゆっくりと、伝わらない言葉を蜘蛛姫に伝え、蜘蛛姫は不死人の声の音色がいつもの不死人のそれと同じと気が付き、少し安堵する。

不死人の手が蜘蛛姫の白く長い髪を優しく撫で続けると蜘蛛姫は落ち着きを取り戻す。

そうだった。

この男の話が通じなくなっただぐらいで何処かに行ってしまうような男ではなかった。

うん、この男なら何とかしてくれるのだろう。．．．いや違う、私達で何とかする。

不死人がゆっくりと髪を撫でて背中を優しく叩いてくれたお陰で蜘蛛姫は涙を止めて、きつく唇を結び、不死人から身を離して前を向くことが出来るようになる。

よし、何とかしよう！

と、蜘蛛姫が顔を埋めていた不死人の肩付近から蜘蛛姫の鼻まで、ミョーンと鼻水が伸びた。

まあ泣きじやくると鼻水も出ちやうよね。

蜘蛛姫は顔を真っ赤にして、不死人は蜘蛛姫の驚いた表情を見て、二人して声を立て笑う。

お互いにいつもの笑い声の音ではなかったけど。
笑い合えるのに変わりがなかった。

不死人「考えよう、結果には何かの原因が存在する」

蜘蛛姫「・・・」

不死人は蜘蛛姫に伝わらないと分かっているけど蜘蛛姫に話し掛けながら考えをまとめていく。

蜘蛛姫も不死人が何を言っているのか分からない上で不死人の言葉をじつと聞く。

実はこの時、蜘蛛姫は互いの言葉が通じないままならば不死人の言葉を覚えようと決意していた。

だから蜘蛛姫、真剣。

不死人「まず、考えられるのは、いつもと何かが違うのが原因」

不死人は躊躇せず自分の装備品をガチャリガチャリと外して地面に並べていく。


蜘蛛姫は不死人の行動を見て、不死人が何かおかしいことがないか確認しようとしていると気が付く、なので蜘蛛姫自身も変なものが付いていないか確かめ始める。

特段、変わったことは無いようである。

不死人、体に布切れを巻くだけの姿になり、身に付けていた装備品や道具、武器、つまりは混沌の刃を地面に全て並べる。

全て外した。

不死人「どうだ？通じるか？」

蜘蛛姫「メ、〇—？」

不死人「装備品を全部外しても駄目か・・・」

蜘蛛姫、目の前で不死人がほぼ全裸状態になっているのに少しドキドキしてしまう。

いやいや、そんな場合ではないぞと思いつつも、そう言えば、さっきは抱き締められちゃってたなあ、などと思いついたりもしていた。

むむむ、なーんか生意気なことされてた気がするぞ。

ふむふむ、どうもこいつの装備品にも変なところは無いようだし、こいつ自身を調べてあげよう。

不死人は不意に蜘蛛姫の蜘蛛の脚で体を持ち上げられて逆さ吊り状態にされる。

不死人「えー！なにになに？」

不死人はいきなり逆さ吊りにされて叫ぶが、蜘蛛姫が真剣な表情で不死人の体をまじまじとチェックしている事に気が付く。

不死人「ああ、なるほど」

不死人、大人しく蜘蛛姫のチェックを受ける。

蜘蛛姫、意外に不死人の体が引き締まっているのに気が付き思わず蜘蛛の脚で撫で撫でしてしまう。

わ、こいつ生意気に腹筋割れてる！あー、この傷痕は痛そうだなあ・・・へー腕太いんだ、ん？んー？こんなとこを布で隠して何があるのかなー？ここも見ないとだよね！

蜘蛛姫、真剣。

不死人「残念ながらそこは何も変化がねーよ！」

不死人は蜘蛛の脚が不死人の股間の布切れを外そうと伸ばす様子を見て、逆さに吊るされながらもビシリと突っ込みを入れる。

蜘蛛姫「・・・//？」

咳払いのような音を出して蜘蛛姫は何事もなかったかの様に不死人を地面に下ろした。

不死人はスクツと立ち上がる。

不死人「今度はお前の番だからな！」

蜘蛛姫「★◎§●◆!!!」

蜘蛛姫は不死人が何事か言いながら手の指をワキワキと蠢かし近づく姿を見て瞬時に警戒、蜘蛛の脚を構えて威嚇する。

そこは互いに言葉は通じなくとも意思は疎通され、不死人が歩を進めることは無かった。

不死人も蜘蛛姫も分かっている。

馬鹿なことをしていないと不意に心が潰されそうだ。

不死人「んー、装備品が原因では無いのかなあ・・・」

蜘蛛姫 ☒ ◎ (、★◎?)

不死人が腕を組んで頭をかしげ蜘蛛姫は様子を見守る。

混沌の刃 カタカタカタカタカタ!

蜘蛛姫「！」

蜘蛛姫は姉クラッグの魂の宿る混沌の刃が小刻みに震えているのに気が付き、地面に置かれていた混沌の刃を抱えあげると鎧をひっくり回し眺めていた不死人に手渡す。

不死人「え？どうした？これ？」

蜘蛛姫「☆*%◆!!」

不死人「ん、震えてる・・・！お姉さん何か気づいたとか?!」

混沌の刃 ガタ！

不死人「えーと、ちよつと待って、こつちもどうやって意思を伝えんだよ・・・」

蜘蛛姫「!! ≦×? ÷\$☆?」

蜘蛛姫は何か言ってから、自身を指差し、その後不死人を指差してみる。

混沌の刃、不死人を指差した時にカタカタカタと震える。

蜘蛛姫がもう一度同じことをしても不死人を指差したときにカタカタカタと震えた。

不死人「僕に原因が有るってこと・・・?」

混沌の刃・・・

不死人「うーん、じゃあ・・・」

不死人は蜘蛛姫に混沌の刃を手渡すと自分の頭から順に指で指して示していく。

頭は？

腕？

胴体か？

足？

まさか股間?!

混沌の刃は蜘蛛姫が握り締める中、カタリとも震えなかった。

不死人と蜘蛛姫、微かな光明にすぎないようにしてもう一度不死人の頭から爪先までを順に指差す、しかし混沌の刃は震えず。

試しにもう一度不死人と蜘蛛姫を順に指差すとやはり不死人で混沌の刃は震える。

どういうことだ？

不死人は考える。

蜘蛛姫が何事かを言いながら混沌の刃を振っているのを横目に見て考える。

落ち着け、良く考えよう、ここに来るまでに何をした？何時ものように人間性を集めていた。特に思い当たることはない。本当に？うん、思い当たらない。よし、少し進もう、毒の沼地のルートは？いつもと同じ一直線だった・・・だけど・・・

不死人「!!!!!!」

!!!!!!

不死人は目を見開き、口を開けてしまう。

え？そんなことで？これが原因なのか？待て待て、まずは試してみよう・・・。
不死人は地面に並べた装備品の内、震える指で1つの装備品に手を伸ばす。
ここに来る前、不死人は沼地に足を取られない効果のある指輪を手に入れていた。
だから不死人は、指輪を付け替えていつも付けていた指輪を外していた。

外していた指輪は・・・

【老魔女の指輪】

あるとき老いた魔女から送られた古い指輪

人には解せぬ文言がびっしりと刻まれているが特に効果はないようだ

不死人はゆつくりと、祈るように老魔女の指輪を自身の指にはめていく。

蜘蛛姫「お姉ちゃん、ちゃんと教えてよっ！お願いっ！」

いつもの蜘蛛姫の声が響く。なるほどね、さつきは指は指差していなかったな。

蜘蛛姫「お願いっ！あいつと話したいの、もつともつとお話して、もつともつと仲良くしたいのっ！お姉ちゃん！あいつと話せないのは嫌なの・・・助けてよお」

不死人「・・・可愛いこと言ってるじゃん」

蜘蛛姫「・・・えっ！」

不死人「あー、良かったー！戻った戻った！これだよこの指輪、これを外してたんだよ」

蜘蛛姫「え？え！」

不死人「この指輪で話が出来てたんだなあ・・・いやいや、それにしてもそんなに僕のことを思ってくれてたとは、男冥利に尽きるな」

蜘蛛姫「・・・うああ、ああ」カーツ

不死人「おー、真っ赤」

蜘蛛姫「*▽→▲●◇!!!」

不死人「いや、それは今更無理だろ」

蜘蛛姫「↑↓P↑↓P↑↓P↑↓P↑↓P!!」

不死人「ソニックブーム連発するなよ・・・」

蜘蛛姫「←→K」

不死人「サマーソルト?! 待ちガイルかお前！」

蜘蛛姫「・・・ぐぬぬう」

不死人「怖い顔すんな、まあよし、だろ？」

蜘蛛姫「・・・まあよし、よ」

混沌の刃 カタ！

ダークソウル 擬態編

ダークソウル 擬態編

蜘蛛姫「ねえねえ」

不死人「うん？」

蜘蛛姫「今、あんたってどれ位の装備品あるの？」

不死人「えっと、はつきりとは分からないけど、大体シリーズで5、6着位だったかな・・・？」

蜘蛛姫「見せて見せて」

不死人「えー、ミルドレッド師匠スタイルになるオチが見えてるよー」

蜘蛛姫「いやいや、あれは悪ノリが過ぎたからよ、今回はちゃんと暇潰しゲフンゲフン、あんたのベストな装備品を考えてあげる」

不死人「別に暇潰しでも良いけどねえ、ま、そんじやあ木箱から出して並べて揃えて晒してやんぜ！」

蜘蛛姫「解りにくいボケを・・・」

不死人「さあ、不死人を始めよう」

蜘蛛姫「多分、みんな「？」ってなってるよ？」

不死人「気にしない気にしない、んーと、まずはこいつかなあ」

不死人 黒色レディーススーツ、白色ワイシャツを取り出す。

蜘蛛姫「・・・」

不死人「あー、懐かしいなあ」

蜘蛛姫「・・・」

不死人「このスタンダード感が良いよねえ、抜群の安定力だね」

蜘蛛姫「・・・いや、何でこんなの持つてるかはあえて聞かないけど、あんたの装備品を見ようって話だからね？」

不死人「お前のお姉さんとこれで遊んだなあ・・・」

蜘蛛姫「マジで?!」

不死人「うん、ノリノリだった覚えがある」

混沌の刃・・・

※混沌刃編参照 不死人はノリノリでした。不死人は。

不死人「本当はタイトスカートとパンストでオーイーフォーヒットコンボ！なんだけどな、まあ仕方ないや、ほれ着てみ」

蜘蛛姫「・・・はあっ?!馬鹿なの?何で私が?着るわけないじゃん!」

不死人「えー・・・絶対可愛いよ?」

蜘蛛姫「むぐつ、か、か、可愛い?」

不死人「うんうん、妖艶な魅力もアップ間違いないね!」

蜘蛛姫「えー、そうなの?じゃあ・・・き、着てみようかなあ・・・」

不死人「やつほい」ワクワク

蜘蛛姫 黒色スーツ姿(上半身)

蜘蛛姫は頬を赤らめスーツ姿となる。だが、なんだろう・・・なんと言えば良いのだろうか・・・クラーク姉さんが豊満なバストでワイシャツ胸部をパツツンパツツンにしたスーツ姿、胸のボタンも開け気味で、窮屈そうな胸部。想像しただけで妖艶さにメロメロになりそうであった。

一方、この蜘蛛姫のストーンとしたスーツに着られている感は……

不死人「……(リクルート、就職活動中……)」

蜘蛛姫「？」

不死人「……初々しくはある」

蜘蛛姫「えへへへ」

不死人「うん……(狙った所に微塵もカスってねえ)」

蜘蛛姫「可愛い？妖艶？」

不死人「うーん、ちよつと待って、えーつと」

蜘蛛姫「ありよ？」

不死人「最善の一手があるはずなんだ、えつと、これか！」

不死人 白色ナース服を取り出す。

不死人「清楚な中に輝くエロス！きつとこれなら！」

蜘蛛姫「えー、次い？もー、しょうがないなー」

不死人「うん」ドキドキ

蜘蛛姫 ナース服（上半身）とナースキャップ

蜘蛛姫はニコニコとナース服に身を包む。・・・不死人はそつとタメ息を漏らす。クラグ姉さんのナース姿を思い浮かべる、挑戦的な瞳で舌舐めずりしながら制服では隠しきれない豊満な胸部を揺らす。不死人は何でも言いなりになる覚悟。ああ胸の鼓動がとまらないっ！

さてもう一度蜘蛛姫を見よう。ああモノ○ロウの制服カタログとかに映ってる感じだなあ、あー制服かあ、としか感想がねえ・・・

蜘蛛姫 「ねえねえ清楚？エロス？てへ」

不死人 「・・・」

蜘蛛姫 「ん？」

不死人 「看護師さんだなあ・・・（何だろう、お仕事お疲れ様ですとしか言えない）」

蜘蛛姫 「えへへへ」

不死人 「ちよつと待って、ちよつと待って、えつとえーつと、・・・これ、か？」

不死人 スクール水着を取り出す。

不死人 「つて、下半身蜘蛛なのにどうやって着んだよっ!」

蜘蛛姫 「えっ!?!なにになに?」

不死人 「違う、間違い、えっと・・・これだっ!」

不死人 キャビンアテンダント制服を取り出す。

不死人 「これで頼む!」

蜘蛛姫 「よっしやあ! (ふふ、必死になっちゃってー、もう私の魅力にノックアウトじゃない!)」

不死人 「・・・(くそっ、少しもときめきがねえ、しかしこれならっ!)」

蜘蛛姫 キャビンアテンダント制服(上半身)、スカーフ、キャップ

蜘蛛姫はニツコリと笑ってドヤ顔でキャビンアテンダント制服姿。

不死人はクラীগ姉さんのキャビンアテンダント姿を思い浮かべる。不死人に命令

され、睨み付けながらも不死人の言うことを聞くクラীগ姉さん、頬を少し赤らめてい
る・・・不死人が優しくクラীগ姉さんの髪を撫でていい子いい子すると更にクラীগ
姉さんの頬が赤らむ。キツチリと着こなした制服の奥の魅力的なバスト、僕だけのキャ
ビンアテンダント、くそ、たまらん。

さて、蜘蛛姫を見てみよう。あー、妖怪系のアニメとかで旅行回の時に出てきそうだ
なあ、何だろう、あと、教科書の挿し絵程度の感想だなあ・・・特に何も思わないや・・・
姉妹なのにねえ、・・・あれ？コスプレ大会を始めたときはこんな気持ちじゃなかったの
になあ、もつとワクワクドキドキだったよなあ・・・あれええ・・・

不死人「うおおーん！」

蜘蛛姫「号泣っ!？」

不死人「うわあああーん！」

蜘蛛姫「うわあ・・・(そんなに感動しちゃうんだ・・・嬉しい!)」

不死人「蜘蛛姫のすかぼんたんっっ！」

蜘蛛姫「なんでっ!？」

その後、すったもんだのあげく、蜘蛛姫はいつもの姿が一番という結論に至りました
とさ。

あと、不死人が混沌の刃に制服を着させ始めようとして、不死人の制服コレクションは蜘蛛姫に全て燃やされました。
めでたしめでたし。

ダークソウル 転生編

ダークソウル 転生編

ドタドタドタ！

不死人「良いこと思い付いた！」

蜘蛛姫「え?!何? 駆け込んできて、唐突に」

不死人「ふふん、日夜あーでもない、こーでもないと思考している僕だからこそその閃き！」

蜘蛛姫「妄想でしょ？」

不死人「違う、哲学的思考だもん」

蜘蛛姫「ふーん」

不死人「で、何かと言うのだな・・・」

蜘蛛姫「あー、待って、ちょっと待って」

不死人「ん？」

蜘蛛姫「えつとね、エッチイことは嫌だよ? ちよつと最近なんか、我ながらガードが

甘かったかもって反省してるんだ……」

不死人「お前の僕の評価ってどうなってるの?!」

蜘蛛姫「……聞きたい？」

不死人「……やめとく」

蜘蛛姫「うん、その方が言いかもね、良いアイデアとかはお姉ちゃんやっというてね？」

不死人「いやいや、ちょっと待て、聞くだけでも聞いてよっ！あと姉を売るな！」

蜘蛛姫「えー……もう、仕方ないなあ、エロかったら突き刺してグルグルブツンだからね」

不死人「表現が怖いよ、でも大丈夫、問題なし」

蜘蛛姫「ふーん」

不死人「まずこのアイテム」

【ひび割れた赤い瞳のオーブ】

効果 他の世界に閻霊として侵入する

蜘蛛姫「むむむ、これをいつも使われて侵入されてんのね」

不死人「多分ね、僕は使わないから結構貯まってるんだ」

蜘蛛姫 「これがどうしたの？」

不死人 「これに加えて、これ」

【決別の黒水晶】

効果 協力プレイ時、霊体を元の世界へ戻す or 元の世界へ戻る

蜘蛛姫 「んん？」

不死人 「えつとね、まず、お前ってここから動けないじゃん？」

蜘蛛姫 「うん」

不死人 「でね、ものは試しなんだけど、まずこの【ひび割れた赤い瞳のオーブ】を僕とお前で一緒に使おうんだよ」

蜘蛛姫 「ふんふん」

不死人 「そしたら、2人とも悪霊として別世界に行くんだよ」

蜘蛛姫 「私も？」

不死人 「そう、で、ここからポイントなんだけど、例えば僕が【亡者】の状態でも白サインとかで別世界に行くと、元の【生者】の姿で現れるんだよ」

蜘蛛姫 「ほう」

不死人 「そう、つまり、蜘蛛姫の場合、別世界に行くと元の人間の姿で現れる……か

も」

蜘蛛姫「・・・なるほど！」

不死人「えっと、お前って元人間だよな？蜘蛛一族とかじゃないよね？」

蜘蛛姫「何よ蜘蛛一族って・・・元は人間だってば！」

不死人「よしよし、じゃあ、お前が人間の姿で別世界に現れる可能性があるってことだな」

蜘蛛姫「ほ、本当に!？」

不死人「正直、分からない、期待させるだけ期待させてガツカリかもしれないし、：：勝手に人間姿に戻りたいだろうなあって考えてたのも悪いと思う」

蜘蛛姫「そんなことないよっ！嬉しいよ？」

不死人「うん、なら良かった」

蜘蛛姫「えっと、ずっとは戻れないんだよね、その、なんだ、別世界に行っている間だけなんだよね」

不死人「うん、もし人間の姿に戻れたら、まあその間、限られた場所だけど色々一緒に見て回ろうぜ」

蜘蛛姫「え？なんでアンタと？」

不死人「マジかっ！」

蜘蛛姫「うそうそ、うそよ、へへへ、一緒に歩いて回ろうねっ！」

不死人「びつくりした・・・それで一応他人の別世界だからさ、ヤバイ奴がいたらこの【決別の黒水晶】で戻ってこよう」

蜘蛛姫「分かった」

不死人「よし、それじゃあ早速試してみるか！」

蜘蛛姫「よっしゃあ！」

不死人は蜘蛛姫と一緒に2個のひび割れた赤い瞳のオーブを握り締めて祈り始める。本来の使い方では無いけれども、蜘蛛姫は真剣に、不死人は真摯に祈る。

しかし蜘蛛姫、少しにやけてしまう。

だって、こいつが私の為に色々考えてくれてたんだよ？にやけるって。

そして、2人の周囲の空間が歪み始める・・・

不死人「どうだ?!」

不死人は少し赤く輝く侵入悪霊姿で目の前を確認する。目の前にも赤く輝く侵入悪霊がいる。良かった、蜘蛛姫も一緒に別世界に来ている。

良かった。

そして、何よりもいつもの蜘蛛姫の大きさではない、大きな蜘蛛の下半身ではなく普通の人間の大きさだ!

よしっ!

蜘蛛姫の意識も覚醒していき、自分の下半身がいつもの大地に根ざしてしまった蜘蛛のそれではないことに気が付く。

もう、元々の自分の足の形なんて覚えてはいないけど、ほっそりとした両足が今の自分にはある!

蜘蛛姫「や、やった・・・やったわっ!元の姿よっ!」

不死人「おう!」

蜘蛛姫「ほ、ほらっ!歩ける!色んな所に行ける!アンタと歩いて行ける!」

不死人「うん、そうだな!よしよし・・・ん?」

蜘蛛姫「へへへ、やったあ・・・ん?んん!」

不死人と蜘蛛姫は同時に思考が停止している。

不死人はいつももの上級騎士の鎧姿、蜘蛛姫は、まあ、いつもの上半身裸はいつも通り、
で、下半身は……

裸ん坊、万歳！

不死人「わお」

蜘蛛姫「うぎやあーあつっ!!!」

蜘蛛姫、人間姿になった喜びで思わず大の字で万歳をしていた。不死人の目の前で。
蜘蛛姫は響き渡る悲鳴を上げてその場にうづくまる。

不死人「いつもとたいして変わらないから大丈夫だよ？」

蜘蛛姫「アホなのっ？アンタ、アホなのっ？アホなのねっ！」

不死人「えー、せっかく人間に戻ったんだからブラブラしよーよお」

蜘蛛姫「早く！戻るアイテム使えーっ！」

不死人「大丈夫だよ？自信を持ってよ、子供っぽい感じだなあって思っていたけど、
ちやんと股……」

蜘蛛姫「それ以上言ったら殺す」

不死人「ええー、ジロジロ見たりしないからさー、ね？」

蜘蛛姫「じゃあ今、ガン見している視線を外せーっ！目を潰せえ！」

不死人「いやいや、もう最初にモロ見えたから心配しないで、もう今更だから、さあ

行こう」

蜘蛛姫「殺す殺す殺す殺すお前を殺す絶対殺す殺す殺す殺す必ず殺す殺す殺す殺す殺す殺す百回殺す殺す殺す殺す殺す」

不死人「あ、ヤバイ感じになっちゃった、分かった分かった、んじやあ、決別の黒水晶使うよ」

蜘蛛姫「早くしろー！」

不死人「分かったって……」

蜘蛛姫「……」

不死人はうずくまる蜘蛛姫の前に屈んで蜘蛛姫と手を重ねて黒水晶を使う。

不死人「……」

蜘蛛姫「……」

不死人「……」

しーん。

蜘蛛姫「……おい」

不死人「あれ？」

不死人と蜘蛛姫が黒水晶を使おうとしても黒水晶は少しも発動しない。

不死人「……えーと」

蜘蛛姫「うん」

不死人「なんか使えないみたい、あれ？白霊だけ？蜘蛛姫がいるから？あれ？」

蜘蛛姫「……」

不死人「……あはは」

蜘蛛姫「……」

不死人「……」

蜘蛛姫「……ねえ」

蜘蛛姫の眼光が今までにない鋭さに変化していくのを見て、不死人は思わず喉をゴクリと鳴らしてしまう。

不死人「だ、大丈夫だよ、この世界の主を倒せば元に戻るからっ！」

蜘蛛姫「……じゃあ……さっさと片付けて……くれる……？」

不死人「サーツ！イェツサーツ!!」

不死人は直立不動の最敬礼で答え、この世界の主を求めて駆け出す。蜘蛛姫は不死人が駆け去るとユラリと立ち上がって安全そうな、何よりも全裸の姿を隠せる岩影に身を隠す。

そして不死人はいつもと比べ物にはならない俊敏さと闘争心で世界の主に混沌の刃を突き刺して倒す。

まあ、脅されたというのものもあるけど、不死人がやられると蜘蛛姫だけが残っちゃうからね。

不死人は頑張った。

蜘蛛姫「さて、無事に元の世界に戻りました、と」

不死人「・・・」

蜘蛛姫「ふふ、ほんの少しだけど人間の姿に戻れて嬉しかったわ」

不死人「そ、それは良かった」

蜘蛛姫「ありがとうね」

不死人「あ、あの」

蜘蛛姫「それで私言ってたわよね？エッチイことしたら突き刺してグルグルブツンだつて」

不死人「」ブンブンブン

蜘蛛姫「どうしたの？首をブンブン振って、涙が飛び散ってるわよ？」ユラリ・・・

不死人「ひいつ！」

ダークソウル 焔編

ダークソウル 焔編

蜘蛛姫「そう言えばあんたって魔法使いちゃったりするの？」

不死人「ま、まほ？まほーうう？」

不死人は蜘蛛姫からの問いに虚ろな瞳でたどたどしく呻き呟く。

蜘蛛姫「そこからなの・・・」

不死人「冗談冗談、魔法ね、うん、知ってる知ってる、この前もお店屋さんで高値で売れた」

蜘蛛姫「・・・うん、あんたが脳筋ステータスなのがよく分かったわ」

不死人「だってミルドレッド師匠の修行に理力とか上げる要素がないもんっ！剣撃、半端な筋力じゃ受けた刀ごと押しきられて突き刺さるんだよっ！まず筋力あげるっつーの」

蜘蛛姫「あー」

ミルドレット「チャント トメテ」

ドガンツ！

ドガンツ！

ドガンツ！

不死人「師匠っ！待って！一撃がドラゴンの時と一緒に！師匠っ！待ってーっっ!!!」

ドガグチャツ!!!

ミルドレット「アレ？」

不死人「ぐはあ・・・」

不死人「あと、連続切りを防いでいる内にいつの間にか気絶していたりとかっ！耐久度とスタミナが圧倒的に足りないっ！」

ミルドレット「スピード アゲルヨ？」

ドガガガガガガガガガガガガガガガ！

ドガガガガガガガガガガガガガガガ！

ドガガガガガガガガガガガガガガガ！

ドガガガガガガガガガガガガガガガ！

ドガガガガガガガガガガガガガガガ！

不死人「師匠っ！目が追い付きませんっ！師匠の腕がいつばいに見えるっ！一度止めてくださいっ！待つて待つてーっ！」

ミルドレット「？」

不死人「首をかしながら連続切りするなーっ！！やめてーっ！！」

ドグチャチャギャガン！！

ミルドレット「オット」

不死人「ぶほお・・・」

蜘蛛姫「それは・・・魔法とか考えも出来ないわねー」

不死人「そんな余力はない」

蜘蛛姫「でもそれじゃあ魔法使う相手だと苦戦するんじゃない？」

不死人「・・・この前、師匠、魔法をパリイしてた」

蜘蛛姫「へ？」

不死人「師匠といえる時に侵入してきた馬鹿がいてさ、撃つてきたソウルの魔法をペ
ンって盾で弾いてた」

蜘蛛姫「ミルドレッドの盾ってボロボロの木のやつだよね・・・？」

不死人「うん、それでペンって・・・表情は見えなかつたけど相手も驚いてただろう
なー」

蜘蛛姫「そりゃ呆然とするでしょ」

不死人「なんか黒いソウルの塊みたいな魔法もぜーんぶペンペン弾いてたなー」
蜘蛛姫「・・・」

不死人「逃げ出した相手を追い掛け捕まえてまで魔法を撃たせてパリイしてたなあ」
蜘蛛姫「・・・」

不死人「そのうち盾を捨てて素手でパリイし始めるし」

蜘蛛姫「・・・師匠怒ってたの？」

不死人「いや、純粹に楽しかったんだと思うよ？モット！モット！って笑ってたし」

蜘蛛姫「うわー」

不死人「泣きながら魔法を撃たされ続ける侵入者があまりにも不憫で最後は僕がとどめを刺したよ」

蜘蛛姫「相手も災難ね」

不死人「そんな師匠の修行で魔法を覚える要素があるとても？」

蜘蛛姫「やっぱり無いわね」

不死人「ちなみに師匠、侵入者が消えてから僕に『マホウ、ウテル？』って聞いてきた、もつと魔法パリイをしたかったんだらうな」

蜘蛛姫「そんなに楽しかったんだ」

不死人「魔法パリイの相手をさせられるところだったよ」

蜘蛛姫「うーん、ミルドレッド師匠はそれでいいとしても、アンタが魔法使い相手だと苦戦しちゃうんじゃない？」

不死人「僕も魔法パリイ出来るように頑張る」

蜘蛛姫「目指すところが違う。もしくは高みを目指しすぎてる。どっだけ修行する気よ」

不死人「気の長い話ではあるな」

蜘蛛姫「ん？・・・あれ？」

不死人「うん？」

蜘蛛姫「そう言えばあんたって私と誓約してるわよね？」

不死人「うん、混沌の従者だよ」

蜘蛛姫「あれ？私の混沌の従者なら混沌の魔法が使えるんじゃない？」

不死人「そうなの？」

蜘蛛姫「・・・あんた、まさかおっぱい王女と誓約し直したんじゃないでしょうね・・・」

不死人「いやいやいや！してないしてない、だいたい王女様とことは敵対しちゃってるから！」

蜘蛛姫「そもそも、その話が嘘の可能性もある・・・」

不死人「僕ってどれだけ信用がないの?! えー、ちゃんと混沌の従者として人間性を捧

げてんじやん」

蜘蛛姫「あ、そっか」

不死人「まったく」

蜘蛛姫「じゃあさ、理力とか無いアホでも混沌の魔法なら使えるんじゃないの？良かったじゃない、これで魔法使いに対抗できるわね」

不死人「アホって・・・お前、自分の従者をアホ呼ばわりするなよ」

蜘蛛姫「失礼しました」

不死人「まあいいけどさ、んーと混沌の魔法って・・・どつかにあるのか・・・？」

蜘蛛姫「捨てちゃってない？」

不死人「それは無いと思うけど、ん？これか？」

【混沌の大火球】

巨大な混沌の火球を投げつける。攻撃後、溶岩が発生。

【混沌の嵐】

周囲に幾つもの混沌の炎の柱を吹き上げる。攻撃後、溶岩が発生。

不死人「へー、大火球に嵐ねえ」

蜘蛛姫「炎系統だったんだ、溶岩とか凄いのかな」

不死人「なぜ疑問形？」

蜘蛛姫「だって私使えないもん」

不死人「そうなの？クラীগ姉さんは炎の剣とか溶岩の攻撃してたけどなあ、つてあれ？これ使えないぞ」

蜘蛛姫「え？」

不死人「ほら、装備しても使える状態にならないよ、ほれほれ」スカスカ

蜘蛛姫「本当だ、どうして？」

不死人「こつちが聞きたいよ、なんでだ？おい発売元」

蜘蛛姫「えー分かんないよお」

不死人「課金できるだけ課金させといて特典アイテムの不具合とか暴動もんだぞ」

蜘蛛姫「人を悪質運営みたいに言わないでよ、あんたの方に問題があるのよ、多分不死人「そうなのかなあ．．．うーん何だろう？」

蜘蛛姫「んー．．．理力とかは関係ないと思うけど．．．んー．．．えつとー．．．愛

？」

不死人「へ？」

蜘蛛姫「ほ、ほら、私に対する崇拜心とか信仰心とか、そ、その愛しく思う心とか……不死人「いや、それは充分にあると思うぞ？（仲良く遊んでいろし）」

蜘蛛姫「ふがつ?!」

不死人「他の何かなんだよ、捧げた人間性の数か？いや充分な筈だよな、装備の仕方なのか？うーん」

蜘蛛姫「あうあうあうー」

不死人「やっぱりお前の方に何か問題があるんじゃない？アイテムの渡し忘れとか」

蜘蛛姫「え？な、ないよ？渡せるものは全部渡してるよ？」

不死人「そうなの？」

蜘蛛姫「うん」

不死人「じゃあ仕方ないね」

蜘蛛姫「あ、こいつ諦めやがった」

不死人「だってどうしようもないじゃん、何か思い付いたら試してみるさ」

蜘蛛姫「そうするしかないかー」

不死人「そうそう、……ん？」

この時、不死人の脳内に閃きのシナプスの結合が瞬く！ぼんやりとした映像の欠片が次第に結合していき実体を表し始める。不死人は身動きせず、呼吸すらせずに思考を手繰り寄せて最適解を手繰り寄せていく！悪魔的思考!!

色々試してみる

← やつぱり駄目

← 僕が残念そうにしていると蜘蛛姫は絶対助けようとしてくれる、はず

← ちょっとエッチなお願いをしてみる

← キスとかから始めて、蜘蛛姫の警戒心とか恥ずかしさを徐々に崩していく

← デープなキスとかもさせてもらう

← 蜘蛛姫も何だかんだとその気になる

← 盛り上がってまいりました！

← ちつぱ、もとい、おっぱいへとターゲットを移す

← あれ？ 蜘蛛姫、顔赤いよ？

← 蜘蛛姫にも色々してもらっちゃったりする

← うひひ

不死人「・・・こほん、あ、あのさ」

蜘蛛姫「殺すわよ？」ニッコリ

不死人「・・・」

それだけ人の心を読めたら、もう魔法みたいなもんだよなあと不死人は思いました。

ダークソウル 癒姫編

ダークソウル 癒姫編

不死人は背後を取った亡者騎士の背中から混沌の刃を突き刺して腹へと貫く。ゾリと亡者の背骨がアバラ骨を削る手応えに兜の中の眉をひそめてしまう。クールにクレバーに、と自分に言い聞かせてはいるものの、この感触ばかりは慣れることがない。

ミルドレッド師匠との修行を繰り返し、毎回ぼろ雑巾にされてはいるものの一応の成果はジワジワと表れている。結果、相手の攻撃に合わたりのパリイ、攻撃をかわしてからのバックスタブが多くなり、眉をひそめる感触を味あわされる事となる。

不死人「この感触だけは慣れないや、慣れても人としてどうかと思うけどねえ・・・」
不死人の思わず漏れる呟きに血に濡れる混沌の刃がカタリと震えて応える。

不死人「という訳なので癒して下さい、プリーズ」

蜘蛛姫「・・・は？久しぶりにやって来たと思えば、いきなり何ほざいてんの？」

不死人「ええ?!そんなに久しぶりじゃないよ!」

蜘蛛姫「・・・なんか、お姉ちゃんとはばかり遊んでる気がするな!」

不死人「そんなことないよ?!」

蜘蛛姫「『く』って入力しても予測変換で『蜘蛛姫』って表示されなくなってるし」

不死人「いやいや、そんなの偶然だから!たまたまだよ?」

蜘蛛姫「ふーん・・・まあいいけど・・・で、いきなり何を言ってきたのよ?」

不死人「えつと、ちよつと戦いで心がゴリゴリ削られてるから少しお前に癒して貰お

うかと・・・」

蜘蛛姫「え?あんた半分亡者みたいなのだから心とか無いよね?」

不死人「今まさに心が削られた!!」

蜘蛛姫「心と欲望を履き違えたら駄目だよ?」

不死人「違う!その区別はついている!僕にはまだ心があるもん!」

蜘蛛姫「本当に?そう思っているのはあんただけじゃないの?もう亡者になってい

て、私が構ってあげているだけかもよ？」

不死人「やめて、切なすぎる」

蜘蛛姫「ふん」

不死人「分かった分かった、これからはもつとお前に会いに来るからさ、冷たくしないで、お願い」

蜘蛛姫「別にどうでもいいけどね、ま、まあ、分かればいいのよ」

不死人「ごめんね」

蜘蛛姫「・・・つたく、で、何？私に癒されたいの？」

不死人「そうなんだよ、ちよつと心がゴリゴリ削られてるから蜘蛛姫様の癒しをと」

蜘蛛姫「ほー、なるほどなるほど、なるほどねー、なる・ほ・ど、ふんふん、私の癒しを求めていると」フンス

不死人「（凄いドヤ顔だ・・・）」

蜘蛛姫「もー仕方がないなー癒しちやおうかなー癒してあげようかなー癒し姫って改名しようかなー」

不死人「ありがとう！流石蜘蛛姫、いやさ、癒し姫！」

蜘蛛姫「それでどうして欲しいの？エッチいのは駄目だからね」

不死人「うん、落ち込んだ原因は分かっているんだ、パライからの一撃とバックス

タブの一撃なんだよ」

蜘蛛姫「ふんふん」

不死人「あの嫌な手応えが原因なので、同等行為の癒しの上書きをすれば回復する筈なんだ！」

蜘蛛姫「えーっと、パリイって相手の攻撃を盾とかでペーンって弾いて体勢を崩させてからの攻撃だっけ？」

不死人「そう、うう思い出すだけで手に嫌な感触がする・・・」

蜘蛛姫「重症ねえ・・・えっと、バックスタブは・・・」

不死人「相手の背後を取って後ろからの突き刺し」

蜘蛛姫「うええ、えげつない攻撃ね」

不死人「まあな、けど殺られない為にはこつちがやるしかないしさ・・・」

蜘蛛姫「そつか・・・分かった！私に任せなさいって！」

不死人「おお！」

蜘蛛姫「で、どうして欲しいの？」

不死人「えっと、取り敢えず、まず僕に攻撃してくれる？」

蜘蛛姫「え？殴られて気合い入れたいの？」

不死人「そんな事は求めていない、ま、いいからいいから、ほれほれ」

蜘蛛姫「ふーん」

蜘蛛姫は不死人の思惑が分からないままではあるが、不死人が求めている事をすると決めた。

蜘蛛姫はスツと蜘蛛の足を振り上げると狙いを定めてから不死人に向けて振り下ろす！

あ、でも少し心配だから半分くらいの力加減で。当たっちゃっても少し痛いくらいで。

蜘蛛姫「おりゃあ！つて、え?!」

蜘蛛姫は不死人に当たる筈の蜘蛛の足が外れてガツンと地面を削り驚く！しかも不死人の姿が無い。

あれっ?!あいつが消えた?!

不死人「そんな大振り、僕には通用しないな・・・」

蜘蛛姫「え」

蜘蛛姫は目の前にいた筈の不死人の囁き声が背後の耳元から聞こえて愕然とする。

え?何で?!いつの間にか?しかも蜘蛛の足を登って私の体の真後ろに?!

混乱する蜘蛛のガラ空きの両脇から背後を取った不死人の両手がニュツと伸びる!

不死人「パリー」ペーン

蜘蛛姫「ほへ？」スカッ

不死人、唸る蜘蛛の足の斬撃を素手で弾く！蜘蛛姫の蜘蛛の足は天高く跳ね上げられてボデイがガラ空きとなる。

不死人「タプタプタプタプタプタプタプタプタプタプタプタプタ
タプタプタプタプタプタプタプタプタプタプタプタプタプタプタ
タプタプタプタプタプタプタプタプタプタプタプタプタプタプタ
タプタプタプ」

不死人はガラ空きとなった蜘蛛姫の白いバストを下から搦り上げるようにしてプルプルと弾ませ揉み上げ続ける！

不死人「覚え込め！僕！これが本当のパリー！これこそパリー！パリーー！」

蜘蛛姫「うぎやああああーっ！！な、な、何してんだーっ！！この野郎ッ！！」

蜘蛛姫、跳ね上げられた蜘蛛の足を、夢中で胸をプルプルさせている不死人の脳天目掛けて容赦なく突き下ろす！

不死人「パリー」ペーン

蜘蛛姫「うん？」スカーン

不死人「モミモミモミモミモミモミモミモミモミモミモミモミモミ

モミモミモミモミモミモミモミモミモミモミモミモミモミモミモミモミ
 蜘蛛姫「ふぎやあ！ふぎやあ！ふぎやああーっ！なまじつか強くなっているだけ
 に始末が悪いーっ!!」

不死人「努力の賜物だね！」

蜘蛛姫「やかましいっ!!」ブン！

不死人「パライ？」ペーン

蜘蛛姫「疑問系で弾くなーっ！」

不死人「うおおおーっ！これが僕のパライじやーいつ!!モミモミモミモミモミモミ
 ミモミモミモミモミモミモミモミモミモミモミモミモミモミ」

蜘蛛姫「いい加減にしろーっ!!」ブンブン

不死人「パライパライ」ペンペーン

・

・

・

番外編

ダークソウル 混沌の刃はつらいよ編

ダークソウル 絵画編

不死人「か、帰りたいー」

雪道の冷たい風が吹き荒ぶ中、主（あるじ）は情けない悲鳴をあげよつた。泣き言なんか聞きたくないのお。

ふつ、久方ぶりのクラーグじや、クラーグ姉さんじやい。まあ今はソウルを使われて混沌の刃となり、主の腰にぶら下がっておるがの。話も出来ん刃の身、時折カタカタ震える程度じや、情けないがの。．．．しかしコヤツはさつきから聞き苦しい泣き言ばかりじや、うつとおしい。

混沌の刃 カタカタ

不死人「うんうん、姉さんも帰りたいよねえ」

まあ主との意思の疎通などこんな程度じゃな。たまーにバチつと伝わるかの。
不死人「くそつどうなってるんだよ、ここ何処なんだよ・・・」

コヤツは周りを見回すが儂にもさっぱり見覚えがない場所じやのう・・・そもそもがここに来た状況から考えて、ここがまともな場所ではなく、少なくとも我が妹のおる世界とは掛け離れた世界の可能性があるがの。

さて、どこから話したものかの？

不死人「イエーイ、ソウルゲットだぜ、ピロリンっ」と

主は最初の篝火がある地点をウロウロしながら小躍りしておった。てか、自分で効果音出すなよ恥ずかしい。

不死人「なーんか、怪しい階段があるなあと思っていたら、やっぱりお宝がザックザック、やったね」

主は嬉々として辺りを徘徊してはソウルやアイテムを拾って集めておった。なんか

情けないのお、おーおー、嬉しそうな顔しよってからに。

そしてコヤツの、我が主の凄いところとか、持つて生まれた悪運とか、主はデカイ鳥の巣まで辿り着きおった。

不死人「え．．．なにこれ？鳥の巣．．．か？あつ卵だ、盗もつと」

おいおい主よお、主様よお、盗人とは感心せんのお、ほつといてやれよ、可哀想じゃろ？

混沌の刃 ガタツ！

不死人「ふふつ、任せて、ちゃんと一番デカイのを選ぶから。心配しないで」

いや、儂、全然乗り気じゃないし、てか、止めろつて言つてるし、話せないけど。

不死人「あれ？拾うとか、盗むとかのコマンドがない．．．んん？」

A 丸くなる

不死人「丸くなる?!え、なにに？楽しそう！」

鳥の巣で卵と並んで丸まるつて．．．あー、儂オチが見えたのお．．．おいおい、コ

ヤツ丸くなりおつたぞ、えー．．．

結論から言うと、丸まった我が主はデカイ鳥に掴まれて遠くに運ばれおつたわ。その

間、主は真顔で無表情だったの、ガチガチに硬直しとった。流石の儂もコヤツの顔を見てギョツとしたわい。ふん、人間は想像を超える事が起こるとこの様な顔になるのじやな。

北の不死院　チョーン

不死人「つて、最初に捨てられた場所じゃん！」

混沌の刃　カタカタ？

不死人「あー、えつとここは僕が不死人になった時に来た場所なんだよ」

主は儂の疑問に答えながら周りを警戒する。

不死人「不死人になるとき、ここに運ばれて亡者になるのを待つんだよ、だから、ほら来た！」

ふむ、目の前の亡者の群れがこちらに掛けて来よるわ、主は儂を構えて迎え撃つ。ふん、亡者など相手になるまい。流れるように切り伏せていきおるわ、ま、当然じゃな、儂の主じゃからな！凄じやろ、やるときはやる奴なんじやよ？

不死人「うーん、ここは調べ尽くしたけどなあ、せつかくだから見て回つとくかあ」

コヤツはブツブツ言いながらも目の前の城のような建物に入っていく。

不死人「こんなの居なかった！」

主は叫びながら細い廊下で儂を突き出しながら叫ぶ。ふむ、なかなか強敵の黒い騎士じゃのう。攻撃も重い。つて、おいおい、落ち着け主様、お前なら倒せん相手では無からうに。わっ！コヤツ逃げ出しおった。ええーっ?!

当然黒い騎士も儂らを追ってくるが曲がり角で態勢を整えた主にあっさり切り伏せられる。

不死人「ふん、僕を舐めるのも大概にしろ、曲がり角は盾を構えてそつと覗き込むのが基本だ！」

いや、まあ、いいけどさあ・・・

その後も主は迷うことなくウロウロと歩いては亡者や黒い騎士を倒しアイテムを集めておった。

逃げたり、こつそり奇襲したりもしておったが、まあ良からう。

・ ・ ・ 一人、主と同じ様な騎士の鎧を着た亡者とも戦つておつたの、隙だらけの亡者の大振りを主は盾で受け流すだけのお。ほれ、さつさと切らんかとイライラさせられたわい。

やつとこさ、そつと首筋に儂を這わせて倒したが、主は暫くその場から動かんかった。・ ・ ・ 知つとる奴じやつたのかのお。主は何も言わんから分らんわい。くだらんことはペラペラ喋るくせにの。

途中、デカイ聖堂跡の床が抜けてもう少しで下の階まで墜ちるところじゃった。主のローリング回避は神技レベルになつたらんか?!

さて、下を覗き込むと凶悪そうなデーモンが待ち構えてこちらを憎々しげに睨み付けておつた。

不死人「ここはスルーで」

知つとつたよ。

主の元いた場所の探索は概ね問題なく終わり、再び鳥の巣で丸まって儂らの世界に戻つたのじゃ。

うん？導入部でつらつら語ってしまったのお。まあ、この後、今迷い込んでいる世界に引きずり込まれてのお。
続きはまたの。

ダークソウル 混沌の刃女泣き編

ダークソウル 絵画編2

さて、待たせたかの？元クラীগ姉、今は混沌の刃じゃ。

前回は主が元いた不死院に戻りアイテムや装備品を回収したところまで話したんじゃが。その後も主はそこら辺をウロチョロしては剣技を磨きつつ、アイテムや装備品を集めておったの。

不死人「でさー、丸まったらデカイ鳥が卵と間違えて運ばれちゃってさー」

火守女「……………」

不死人「そう言えばデーモンにも運ばれたことがあったなー、あれもびっくりしたなあ」

火守女「……………」

いや主よ、その辛気臭い牢獄の女はガン無視してるよ？話し掛けてくんないオーラがうまくつとるぞ？ペラペラ話してるが一言も返事しとらんぞ。

不死人「そうそう、敵が強くなってき、あれって入れ替わりとかどうやってやるんだろう？」

火守女「私は汚れ、こ」

不死人「元々何処かに隠れていたのかなあ？俺達の出番はまだだなあ・・・とか考えてさ」

火守女「・・・」

不死人「ねえ、どう思う？そう言やあこころは変わらないなあ」

火守女「・・・」

主、今この女何か言いかけてたぞ？聞いてやれよ。会話のキャッチボールしろよ。・・・しかし、この女も主がこんなに話し掛けとるんじゃないか？気取つとるのかのお？少なくとも儂はこやつと話はしとったぞ、・・・内容はともかく。なーんか気に食わんのお。

と、儂の思いが通じたのか辛気臭い女がほんの少ーしだけチラリとこちらを向きおつた。ん？主ではなく主の腰にぶら下げられとる儂を見ておる？

火守女「・・・ふ」ドヤ顔

このアマ儂を鼻で笑いおった?!しかもドヤ顔で!!

不死人「あれ?何か言った?なにになに?」

違うっ!主!こやつは刃に身を落とした儂を見て鼻で笑ったんじやつ!なんじやいの?は?儂は主と命を共にして冒険しまくつとるんじやつぞ。貴様なんとは積み重ねが違うわいつ!そもそもは主との命の奪い合いから始まって、そこから互いに・・

火守女「・・・・・必死・・・」ぶぶ

むきーっつ!!このアマ、儂を指差して何をこいとるんじやつ!必死?はあ?やつてやる殺つてやるぞっ!

不死人「へ?必死?うんうん必死必死、ねえねえなんでこんな牢獄に入ってるの?出てみる?」

ぐぬうっ!くそアマは主の言葉に無反応でフィと背を向けるとそれきりなんの反応もしなくなっておった。・・・うん、儂、この女嫌い。大嫌い。

混沌の刃 ガタガタカタカタ

不死人「ん?ああ、そろそろ行こうか、じゃあまたね」

主は辛気臭いくそアマに一声掛けるとスタスタと女のおる牢獄から離れていく。ふん、儂は今から主と色んな所に行くのでなあ、くくく、あー忙しい忙しい、主に頼られ

ると大変じゃのお、貴様はその牢獄で一生俯いておれ。くくく。

儂は主と共に進む優越感に浸りながらくそアマを眺めてやる。

ん？くそアマのマントの手の所がモゾモゾ動いとる？主は背を向けとるので気づかんぞ？

火守女「……………」そつと中指を立てる。

むぎやーつつ!!!主っ！主よっ！戻れっ！あのくそアマをボコボコにしにするぞっ！
むがーっ!!!

……………ほん、どうも主がウロチヨロするのでなかなか本題に入れんのお。まったく。

ダークソウル 混沌の刃旅鳥編

ダークソウル 絵画編3

うむ、元クラーク姉の混沌の刃じや、なかなか話が進まんがそもそも主がウロチヨロしておるので仕方あるまい。それはともかく、あの辛気臭い火守女殺す。

あ、思い出したらムカムカしてきた、主よさつきとあのアマをぶち殺して火守女の魂とやらを回収するべきではないかの？なんかパワーアップするのじやろ？知つとるよ。

不死人「・・・さつきから小刻みにカタカタしてるけど、クラーク姉さん、何かあった？」

主は儂の柄を握り尋ねてきよるわ。てかクラークはもう消滅しておるのにいつまでその名で呼ぶのかのお。嬉しいような、もの悲しいような・・・いかんいかん、主を惑わすようなカタカタは自重せんとな。儂はその後、ピタリと動きを止めてやった。

不死人「?・・・さつきの火守女の子が心配?」

はあつ?!何言ってるんの?何言ってくれちゃってるの?おい主つ!お前馬鹿なの?いや、馬鹿なのは知ってるけどそこは察しろよ!

不死人「うんうん、あの子ずっと俯いて牢獄にいてさ、自分の運命に捕らわれている
というか、従順に従っているというか・・・」

いやいや、いやいやいやいや、主よ、いやいやいやいや、あのアマはそんなタマではないぞ?! 儂を煽る、中指立てるわでクソアマの部類じゃぞ? えー、主の眼が節穴過ぎるー、えー・・・

不死人「なーんか蜘蛛姫に重なるところがある様でほっとけないよなあ」

・・・んー、確かに妹と似た境遇ではあるが、それを差し引いてもクソじゃぞ? 儂の評価は。あやつは妹と違ってまーつたく可愛げとかないぞ。

不死人「あと、意外に胸が大きい」

・・・知つとるよ。

あえて触れんかったがの。あーなんか俯いてるから、ただでさえデカイ胸が強調されとるなーと思つとつたよ、意地でも文字には残さんかったがの。

主が言ったから意味ないけどな、・・・うん、よし、儂を使ったときの返しのダメージ量をちよつとだけ引き上げておこう!

不死人 死んで篝火に戻る・・・

不死人「ちよつと待て！なんで一撃入れただけで体力がギューン！つて死ぬ程減るんだよっ！」

うむ、少しやり過ぎたかの？

不死人「え、マジで？姉さん、勘弁してよ」

分かった分かった、分かったわい。ちよつとやり過ぎたの。ちゃんと元通りにしておくわい。悪かった悪かった。

混沌の刃 カタカタカタカタ

不死人「本当に頼むぜ？」

・・・。

うーん、主は本当に儂の声、とか思いつか思いつか思念とか伝わつたらんのお？こうたまにバチンと意志が伝わると、聞こえていない振りとか、分からない振りをしておるのかと疑いたくなるのお。

・・・ちよつと、覚悟を決めるか・・・

うーん・・・

でも、本当に伝わるとなあ・・・

調子に乗られるとなあ・・・

んー・・・

よしっ！

貴様ら、しばし待っておれ、ちよつと色々念じて伝えてみるから。

何故待つと？

・・・刃に身を墮としたとは言え、女には人に知られたくない思いがあるのじゃよ？
察せよ。

では待っておるように。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
?

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
?

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

．．．？

．．．．．

．．．．．

．．．．．

．．．．．！

．．．．．

不死人「そう言えば、最近おっぱい女王様に謁見してねーな、寂しがってるかなー？
よしっ！行くか！」

はい、全く伝わっていませんでしたー！

ふん、まあこんなもんかの。

主がおっぱいに謁見しとる様子は省くぞ？

簡単に言うとう主がブツブツ言いながら双眼鏡で、デカイおっぱいをハアハアしながら
覗いとっただけじゃ。

なあ、主よ、主様よお、儂の事は忘れとらんか？また一撃で致命の一撃返しするよ？

※注

時系列的には不死人がおっぱいおっぱいおっぱいを弓矢でプチンする前の話になり

ます。

おっぱい。

不死人「やべえ、王女様エロ過ぎる・・・」

いや、相手はエロい事は一言も話しておらんかったぞ？

不死人「真面目そうな顔してあんなこと考えているなんて・・・くそつ、僕に身分さえあればっ！」

いやいや、主が勝手にエロいこと妄想してるだけじゃろ？そこまで本気で悔しがるなよ・・・

ふん、まあ良いわい。

ここまで話が進めば、冒頭の絵画世界まですぐそこじゃ。

まったく、絵画編などと言っておきながら本題に入るのが遅すぎるんじゃない。だいたいのお・・・

パパラパッパーッ!!

アノール・ロンドをウロウロし始めた主の近くでトランペットの音が響き渡りおった

!

不死人「だ、誰だ?! 何処にいる?! 出て来いっ!!」キョロキョロ

おい、主よ。おるじやろ、主の目の前に。腰くらの高さの段の上でトランペット吹いとる奴が、金ピカの鎧着とるから目立っておるじやろ? 見落とさんじやろ?

暗月の女騎士「ふっ、ここだっ!」

不死人「き、貴様っ! 何奴?」

暗月「・・・アンタ、腕に覚えがあるようだが、駄目だな、世界で2番目だな・・・」
不死人「何いっ! じゃあ誰が1番だって言うんだ!」

暗月「ヒュー、チツチツチツ」クイクイ

目の前の金ピカ女騎士は口笛を吹くと指を顔の前で振ってから親指で自分の事を示しおった。

不死人「ち、ちくしよう、貴様あ降りてきやがれっ!」

え? 主よ、金ピカは低い段の上じゃから手を伸ばせば届くよな? と言うか、金ピカも主の言葉に嬉しそうにトランペットを置いてるし。

暗月「ふっ・・・とうっ!!」

ズザツガチャンゴゴゴゴゴゴロー

あーあー、金ピカ、ジャンプしてローリングするからせつかくの鎧が傷だらけじゃぞ

?頭のツノも歪んじやってるぞ?

暗月「ふふ、待ちかねたぞ。どうだ今の登場は?」

不死人「ふふ、暗月さん・・・シビレましたよ」

何この寸劇。

えー、めんどくさい奴が出てきおった・・・

ダークソウル 混沌の刃ハイビスカスの唄編

ダークソウル 絵画編4

儂と主は紆余曲折を経てアノール・ロンドまでやってきたんじやがな、主のアホはおっぱい女王との謁見？をやつと終えたかと思うと今度は金ピカ女騎士と遊び始めたんじや。

いや、確かに途中遭遇したデーモンや亡者どもをなんやかんやと儂で切り伏せてはいるんじやよ？ 剣の修行はしとるんじやよ？ けど何だろうこの適当に遊び呆けとる感は。

まあ儂らに目的とか無いから仕方ないことかも知れんがの。ぶつちやけ儂も主とブラブラするのは嫌ではないしの。

しかし、この金ピカと遊ぶ主の姿はどうかと思うのお。

暗月の女騎士「久しいな、不死人のキミ」

不死人「ええ・・・地獄のゲートが開いてしまいました・・・ふふ、流石に僕一人では骨が折れましたよ」

暗月「そうか、遂に地獄のゲートが・・・我（わが）右手が疼いていたのはそのせい
か・・・くっ！すまない、我盟約の縛りさえ無ければキミの力になれたものを！」

不死人「ふ、暗月さん、貴女の使命は分かっています、なーに、デーモンの百や千匹
くらい滅殺の女王の剣の使い手の僕の敵ではありませんよ」

暗月「・・・すまない」

地獄のゲート？デーモンの百や千匹？滅殺の女王、え、儂のこと？いやいや、主よ、最
近したことはその辺をウロチョロしてデカイ鳥に連れ去られたり、強そうなデーモンを
スルーしたりしただけじゃぞ？

間違っても地獄のゲートとかには行っておらんぞ？

主と金ピカは互いにニヤリと笑い合う、歴戦の強者の様にの！

暗月「ふ、実はキミの助けになるかと思つて新必殺技を編み出したんだよ」

不死人「え?! あつ、あの天地解虐エクスペローラ乱舞を越える必殺技ですか!!」

暗月「うむ、あの天地解虐エクスペローラ乱舞は力が拡散し過ぎていたと思い、剣の
力を集約する様にしたんだよ・・・」

不死人「ゴクリ」

主よ、なぜ迫真の緊張感溢れる表情で喉を鳴らせる？普段そんな表情などしたことな
いじゃろう？

金ピカは主の前に立つと剣を振り上げ、意識を集中し始めおった。……あれ？マジで空気が張りつめて来おった、え？金ピカの身体がオーラに包まれ始めておるのっ?!天地解虐エクスプローラ乱舞？マジで!?

暗月「唸りれっ！天地解虐エクスプローラ乱舞っつ!!」ブン

そして金ピカは剣を力強く振り下ろす、……うん、何も起こらんよ。

暗月「ドビシユーンツツ！ズババババツツ!!ドガシャーン！」

金ピカは大声で自ら効果音を叫ぶとガタガタと身体を震わせて剣技の凄さを表現する。えーっ!?

いや、金ピカよお、流石にそれはどうじゃ？それにお前さつき『唸りれ』とか囁んじやつてたからな？唸れつて言いたかったんじやろ？

不死人「……こいつは、……すげえっ!!」

主は乗りおった！へタンと腰を抜かして地面にへたりこみおった！

不死人「く、空間が歪んでいる?!」

暗月「……え、う、うむ、気を付けろ、時空の狭間に引き込まれると命の保証は出らんぞ」

今、金ピカ『え』つて言った！小さい声で『え』つて言つとつたぞ！儂聞こえたもんね。しかし主は聞こえなかった振りでスゴイと言いつつおる。

不死人「流石です暗月さん！これなら・・・」

暗月「くっ！ひ、左手がっ！」ガクガク

不死人「暗月さんっ！」

暗月「くそっ！これしきの事でっ！や、闇につ・・・！」

不死人「暗月さんっ！暗月さんっ！！しっかりして下さいっ！」

いや、お前らがしつかりしろよ・・・なーんのダメージも受けておらんから、ただ剣を振り下ろして叫んだだけじゃから、天地解虐エクスプローラ乱舞は。

暗月「だ、大丈夫だ、ハアハア、まだ闇には捕らわれんよ・・・」

不死人「暗月さん、こんな思いをしてまで僕なんかの為に・・・」

暗月「ふ、気にするな、我が勝手にやっているだけだよ」

不死人「暗月さん・・・」

地面に横たわる金ピカを抱き抱えながら主は金ピカの手を強く握りしめておる。ちよつと近すぎんかの、お前ら？ん？こういうプレイなの？なら儂の感想も変わつてくるんじやがな。

暗月「・・・もう大丈夫だよ、ところでキミも地獄のゲート戦で新たな技を編み出したのだろう？」

不死人「・・・くく、暗月さんの目は誤魔化せないなあ」

暗月「ふん、転んでもただでは起きない奴だよキミは……」

主と金ピカは立ち上がると、今度は主が身構えおる、えー、主もやるのお？

不死人「ただの分身ではありませんよ、これはアストラル世界の自身を生み出し技：ザ・ミラーツ!!とうっ！」

暗月「なにつ！」

主は叫ぶと金ピカの前で反復横跳びをガチャガチャと始めおった……

あのなあ主よお、アストラル世界以前に残像すらも出来とらんからの？

不死人「ぶおーんっつ！」

主は反復横跳びをしながら低い唸り声を上げる。えつと、何が起こつとる事になつてるのかのお？

暗月「た、確かにキミが二人になっているが……これがザ・ミラーなのか？」

金ピカよ、お前も律儀よのお、お互い様なのか？そういう暗黙のルールなのか？お前もいい年じやろうに、それに火守女なんじやろ？良いのか篝火をほつたらかしにして……

不死人「ふふ」

主はガチャガチャ反復横跳びしながら儂を、つまりは混沌の刃を横振りに難いだ。

暗月「こ、これは、ただの分身じゃない?! 実体分離だっ!」

不死人「とうっ!」

金ピカの驚き(演技)に気を良くしたのか主はブンブン儂を振り回しおる、儂を巻き込むのは止めてくれんかのお。

暗月「前後からのソニックブーム?! 絶対、分身には出来ない・・・」

不死人「これがっ、我師、劍聖アイモスハイアラキでさえ修得できなかった技、ザ・ミラーツ!」

暗月「キミの魔導の血で完成を為したという訳か・・・確かにこの技があればデーモンの百や千匹は殺れるな!」

不死人「ぜはっ! ぜはっ! ぜーぜー・・・」

んーと、突っ込みどころが多過ぎて混乱しそうじゃが、一つ一つ丁寧にやろうかの。

まず、主は実体分離など出来とらんわ! ずーっとボツチじゃったわい! ただ反復横跳びしながら儂を振り回しただけでソニックブームの欠片も出とらんわ! お前の師匠は恥女のミルドレッドじゃ! 魔導の血? 主には理力の欠片もないわい! デーモンの百や千匹、瞬殺でボコボコに殺られるわ! あと息切れしとるぞっ!

その後、主と金ピカは互いに必殺技を披露し合い、訳の分からん理屈をこねておった。すまんが儂の、混沌の刃にスタミナゲージがあるとしたらとつくに空っぽじゃ、もう

金ピカとのやり取りは何も語る気が起きんわい。
もうやだコイツら。

主と金ピカは最後に互いの拳をガチンと打ち合つて別れを告げおつた。
はあー・・・疲れた・・・

不死人「あー、面白かつたつ！クラীগ姉さんもノリノリだったね！」
なんじやとつ!!今、なんと言いおつた?!

ダークソウル 朧月編

ダークソウル 朧月編

なあ不死人のキミよ、楽しかったなあ。本当に。

最初は馬鹿にされて終わりかもしれないとドキドキしてたんだよ。

けどキミは我に応じてくれたんだ。嬉しかったなあ。本当に嬉しかった。

それでもキミとの時間が終わって、キミが去っていく時はいつも『やり過ぎたかもしれない』『もう飽きられるかもしれない』って不安しかなかったんだよ。色々一人で考えてしまったんだよ。

馬鹿みたいだろう？

本当に不安だったんだよ。

でもそのうち、そんなことを考えもしなくなっただけだね。

だってキミも本当に楽しそうなんだもん。

次はどんな必殺技を見せてやろうか何を話してやろうか、そんなことばかり考えて心踊るだけになっていたよ。

キミも色んな必殺技を見せてくれたなあ、楽しかったなあ。

あの時のキミと我は本当に楽しい世界の主人公でいたんだよ。我の中では。だってキミといた時は他のことなんか何も考えずに済んでいたんだから。楽しいことしかない時間だった。

本気に楽しかったなあ。

あと、キミと蜘蛛の女の子の話も面白かったな。

他の火守女がいるのは知ってはいたけど、まさかそんな子がいるとは考えもしていなかったよ。

あまり、変なことばかりして困らせてはいけないよ？

きつとその蜘蛛の女の子もキミが来るのを楽しみにしていると思うよ。我と同じに。どうか、その子を悲しませるような事はしないでいて欲しい。

まあ、キミなら大丈夫か。

一度会ってみたかったな。

キミは亡者になる前の話も少ししてくれたね。

もし我がキミと同じ騎士団で肩を並べて戦っていたら、と考えただけで血沸き肉踊る気持ちになった。

我の勝手な思いだけど、キミになら命を委せられると思えたな。

キミと過ごした時間は楽しかった。
今思い出してもキラキラと輝いているよ。

だけど、今はどうだ。

必殺技なんかお互いに出そうともしないよね。

キミも我も苦しうに息を荒げて剣を重ねて火花を散らしてる。言葉も交わせない。
つまらないよね。

本当につまらないよね。

こんなのキミと私の戦いじゃないよ。

こんなのキミとの時間ではない。

実は凄いな必殺技を考えていたんだよ、絶対にキミも気に入ると思う。

見せたいなあ、もう一度キミにスゴイって言われたいなあ。遊びたいなあ。
でも無理。

うん、キミの剣筋が私の身体に入り始めた。本当に強いキミは。

けど、我は命果てるまでキミを倒そうとするよ。そうするしかないんだ。

劍先がキミの鎧を貫く度に、我の心にも劍先が突き立てられている様に痛い。

ごめん。

ごめんね。

ごめんなさい。

こんな殺し合いなんか止めて、何時もみたいにキミと必殺技を見せ合いっこしたいよ。

やーめたって言いたいなあ。

本当にごめん。

今の跳ね上げはスゴイな。

キミは本当に強いな。

我の劍がそろそろ限界になってきたようだよ。

劍がひび割れてきている。

キミの刃は恐ろしいな。

劍を握る両手も、手甲の中が血で滑って、感覚も無くなってきたやっとなあ……

こんな時。

最後の時。

本当は仕える主の事を考えなければいけないんだらうけど。

私の率いる騎士団の事を考えなければならんだらうけど。

我は願う。

どうか、これからのキミの未来が、キミを悲しませる事がないように。

キミが笑って過ごせますように。

願います。

ダークソウル 混沌の刃恋巡り

ダークソウル 絵画編5

さてさて、主（あるじ）は金ピカとひとしきり遊んだ後もアノール・ロンドをウロウロとしておった。

「どうやら主はこの地がお気に入りのようにじゃの。儂は気取った感じがして好かんがな。」

不死人「はあはあはあ」

のう主よ、おっぱい王女に何度謁見すれば気が済むのかのお、こら。ついさつき、金ピカと遊ぶ前にも謁見しておったではないか。そもそもこの女、主を相手にしておらず、同じよーな事を繰り返して話しとるだけではないか。

双眼鏡を覗きながらはあはあする奴を主とする儂の身にもなつとくれ。

・・・まあ、馬鹿で可愛い奴だなあとか思わんでもないがの。

不死人「いやっほーい！」

主よ、レバーを回すとクルクル回って上下する階段で遊ぶなよ。いや、確かに凄い仕組みだなあとと思うよ？けど、満面の笑みで繰り返し繰り返し上下する程のものでもなからうに。

おいおい、そんな身を乗り出して遊んでおるとズッコケるぞ・・・って!!おいつ!!

不死人「どわああああーああ!!」

アホがっ!!縁を掴まんかっ!足掻けっ!!手を伸ばせっ!!

ドガチャッ!

不死人「ひいひいっ!!」

主は落っこちながらも手足を螺旋階段の縁に突き出してなんとか引っ掛かりおったわい。必死じやのう。

頼むから、こんな情けない死に方はやめてくれよ、マジで。あと、娘子みたいな悲鳴もあげるな。

おうおう、主はガタガタ震える手でも何とか階段側によじ登りおったわ。

不死人「あ、危なかつたーっ!」

主は大の字になって息を荒げて生を実感しておる。

マッチポンプじゃのう。

ちなみにマッチポンプとは、自らマッチで火をつけて、それをポンプで消すことで、自分でやったことを自分で解決する偽善的な行為の事じゃぞ。クラীগ姉さんの「豆知識」じゃ。

ん？

んん？

・・・主よ、お前の腰の辺りの床が濡れて色が変わっておるが・・・

何やら臭いも・・・

あれ？

おーい、主？

不死人「・・・・・・・・」

主は遠い目をしたままで無言で儂を腰から外すと、水を浸した布切れでフキフキと拭いて、それから鎧を脱いで自分の身体と鎧をフキフキしておった。

不死人「・・・・・・・・クラীগ姉さん、どうか、どうかこの件はご内密に・・・」

混沌の刃・・・・・・・・カタ

いや、言わんよ。

主が漏らしたなんて、情けなくて言えんよ。

だから、刀相手にそんな深々と頭を垂れるなよ・・・

ま、自分より先に儂を最初に拭いたのは感心じゃ。

不死人「多分、少しでも体重を軽くしようとした人間の生存本能に基づく行為であつて、怖くてとか、びびつてとかじゃなくて、剣士としての性と言うか、その」

うんうん、分かつた分かつた、分かつたから。

恥ずかしくない恥ずかしくない。じゃからこれ以上、刃に情けない言い訳しなくていいから。

忘れた、忘れたわい。

混沌の刃 カタカタ

不死人「こんな入り口あつたつけ？」

気を取り直した主は辺りを見回して、今まで入ったことの無い建物の入り口に気が付きおつた。

んー多分、入ったこと無いと思うがのお。正直この辺りは似たような造りばかりじゃから、よく分からん。

まあ、行つてみれば分かるじゃろ？

主が入った部屋は大聖堂の様な、だだっ広い部屋じゃった。

儂の棲みかくらいはあるかのお。凄いいもんじゃ、まあ儂の棲みかの方が奥行きもあつて隠し部屋とかもあるがの。妹の蜘蛛姫付きじゃし。人間にしては頑張つた方じゃない？

で、こちらには蜘蛛姫の変わりに全身白装束の怪しい奴らがおつた。

不死人「うりゃあ！」

主は白装束の敵をバツタバツタと儂を奮つて切り伏せておつた。

柱の影に潜んでおつた白装束が主に向かつて攻撃を仕掛けて来よつたが返り討ちにしておる。

お！

おおっ!!

見た？

見た見た？

今の主の返す刀の一閃！凄いの、半端無い一撃じゃのう。

流石は儂の主じゃのう。

馬鹿な事やってても、やるときはやるし、決めるときは決める奴なんじゃよ。こやつは。

スコーン！

不死人「ぐぼっ！」

あ・・・主の兜にナイフが突き刺さっておる。

うわあ・・・痛そうじゃのう、ヘッドショットじゃのう。容赦ないのお。

うむむ、白装束の仲間があちこちらからワラワラ出てきて、主を囲んでナイフをピュン

ピュン投げてきておるの。

スコーン、スコーンと主の兜にナイフが面白いように突き刺さりおる。

こいつらえげつないの。

不死人「やーめーてーっ！」

たまらず主は叫びながら逃げ始める。多勢に無勢じゃから仕方あるまい。

それでも白装束は更にワラワラと出てきてしっこくナイフをピュンピュン投げつけてきよる。

貴様ら、悲鳴を上げて逃げておるのじゃから見逃せよ。狭量じゃのう。

おいおい主よ、なんでお前は白装束のいる方に逃げ出すのじゃ？部屋の奥に行つてどうすんの？え、パニックなの？こんなんでパニックつてんの？えー・・・

と言うわけで、儂の主は悲鳴を上げながらゴロゴロとローリングをしつつ投げナイフをかわしつつ部屋の奥の方へと逃げ込んだんじゃよ。袋小路じゃ。

不死人「行き止まりっ?!」

いや、分かつとつたよ。

どう見ても行き止まりじゃったよ。馬鹿でかい絵画がデーソとある壁じゃったろ？お前は行き止まりに向かつて走つとつたんじゃよ？

不死人「外につながつてるって思つてたのに！」

いやいや、遠目に見ても、どう見ても絵画じゃったろ・・・どれだけパニックになつとるんじゃ。

さて、こうなつては仕方あるまい、覚悟を決めて白装束どもと切り結ぶかの。

不死人「入れてーっ！絵の中に入れて下さーいっ！！」ドンドンドンドン

絵画を叩きながら泣き叫ぶ主。

まあ、分かつとつたけど、儂の主はアホじゃな。

と言うわけで、儂らは雪の世界に転送されておった。

話がつながらんじやろ？

儂もそう思うよ。

どれだけ行間を読めって話じゃわい。

詳しくは次に話すよ。何にせよやっど本章の冒頭部じゃわい。

ダークソウル 混沌の刃 孤高の刃

ダークソウル 絵画編6

さてさて主と儂は突然雪山に来たわけじゃが、状況から推察するに飾られておったゲカイ絵画の中に取り込まれたと儂は考えておる。

絵画が水面の如くミョーンと歪んで主をチュポンと飲み込むように取り込んだからの。

儂の主はいつもの鋭い推察力で、白装束の敵に囲まれようとも絵画の世界に入り込めると閃き、絵画の世界に避難することで一命をとり止めた訳じゃよ。

流石儂の主じゃの。

決してパニックった主がとち狂って絵画をバンバン叩いた結果ではないよ？

異義は聞かんよ？

不死人「……とりあえず進んでみるか」

主は転送先の長い吊り橋を歩み始め、崖先へとたどり着き雪を踏みしめる。
お？先に見えるのは篝火ではないのか？

不死人「よっしやあ」

主は篝火を灯すと惜しげもなく人間性を使い篝火の炎を高く立ち上がらせた。

不死人「さて、白サインは・・・？どこかなー、出ておいでー」

なあ主よ、新しい世界に来て直ぐに白サイン探して、白霊に助けてもらおうとするのはどうなの？

まずは自分で探索してみようよ、せつかなんじやから、のう？

不死人「くっ！やはりここが難所か・・・」

主よ・・・白サイン待ちの暇に任せて雪像を造るのは如何なもんじやろうか？

しかも儂の、クラーグ姉さん時代の1分の1スケールの雪像って・・・結構デカイよ？

主はさつきから儂の雪像の胸の部分に雪を足しては崩れてを繰り返しておる、真剣じやのう。妥協せんものう。

自分で言うのもなんじやが、当時の儂のおっぱ、こほん・・・胸部を雪で再現するのは無理な大きさだと思いがなあ。

しかし、こいつ、儂のソウルが宿る混沌の刃を腰にぶら下げながら儂の雪像を造るつて、何を考えておるのやら。

不死人「どうよ?!」

混沌の刃 カタカタツ!

・・・こいつ、完璧に儂の1分の1スケールの雪像を造りおった!

え、マジで完成度高いんじやが!

何やらニコニコしながら儂を高く掲げて見せてくれておる。

あー、在りし日の儂じやのう・・・

・・・やっぱり、儂の主は、その、なんと言うか、可愛い奴じやのう!

そんなに儂を思っておるのかの?

ふふ。

不死人「……さて、クラীগ姉さんも造れたし、行こうか」

主は暫くの間儂の雪像を眺めていたが白サインは諦めたのか篝火から離れ進み始めおつた。

え、儂の雪像つてそのままにしとくの？篝火の横に蜘蛛女の胸丸出しの儂の雪像を。

いや、壊すのは勿体ないけど、そのままと言うのも……

なんか、魔法で氷に固められたデーモンが篝火近くについてカオス状態になっておるのう。まさに混沌じゃな。

うんうん、まっ良いか。

で、少し進むと何やら古めかしい館のような建物が見えてきての。

案の定、亡者がワラワラと襲いかかってきたがの、ま、主の敵ではないわい。

何やら頭部が膨れ上がって炎をビュンビュン撃ってくる奴や鳥人間、円形防御陣形を組むスケルトン、車輪スケルトンなんかもおつたの。

まあ、ギヤアギヤア言いながらも主は順調に館を進んでおったよ。
そしてこの世界の支配者とも言うべき奴と対峙することとなったのじゃ。

ん？

え？

はしよりすぎ？

いや、あのな、この世界の敵ってグロいんじやよ。儂は主の武器じゃから敵を斬るのは、やぶさかではないのじゃが、あいつらを我が身で切り裂くのは正直凹むんじや。凹損じやよ。多分耐久値がギョングョン下がったと思う。

なので、ぶつちやけ語りたくもないわい。主も毒の血飛沫を浴びせられておなこの様な悲鳴を上げとったしの。

グチャグチャ気持ち悪い奴等を倒して進みましたとき、で勘弁してくれい。

ゴキブリを潰す様を事細かく描写しても誰得じやろ？読みたいと思う奴は『ゴキブリ潰す 動画 キヤツホー』でググってくれ。いや、本当に有るのかどうか知らんけど

もー!

で、この世界の支配者?じゃ。

プリシラ「つまり、キャツキャツウフフのキャラの中にガチ勢、ううん、勢じゃないのね、孤高の単独なの、ガチ単なのよ!アレ?ガチタンってかぼたんみたいで萌え要素と勘違いされちゃう?じゃあガチの人とでも言うのよ、孤高の人のオマージユも兼ねてなの!あの子がいるからあの作品は引き締まるのよ、それを分かっていない奴等が話題にも上げないで!他のクソ女の話題ばかりをするのよ!本来なら相手にもしないニワカ素人共の相手をする菩薩のような慈愛に気が付かないの?心の山脈なの、愛のアルプスなの、眼鏡とか巨乳とかどーでもいいネタばかり取り上げられちゃって、違うのよ!生きざまが違うのよ、スペックが違うのよ、もう、早くスピノフで主人公にしてなよ!」

不死人「つまりは?」

プリシラ「斎藤かえでちゃんラブーなのー」

不死人「ヤマ〇ススメじゃねえかつ!」

プリシラ「は？何、アナタあおい派なの？ひなた派なの？え、まさかここな派?! 死ぬ
ロリ野郎」

不死人「どの派でもねーよ」

プリシラ「ああ、……りん派なの」

不死人「ゆる○ヤンでもないよっ!」

プリシラ「じゃあ……」

不死人「待て! までまで、ちょっと自由すぎる! せめてダークソウルネタで来い
よ……」

プリシラ「え、でもこの世界ダウンロードコンテンツなのよ」

不死人「メタが過ぎるぞ……」

プリシラ「二次創作の番外編って訳分かんないの」

不死人「ええー……」

え? なに? 何話てんのこの半妖精みたいな。主も何か言い返してるけど、さっぱり
分かん。

なにやら人物像について語っておるようじゃが、僕は知らんよ?

不死人「しかし一概にガチ登山の話ばかりはどうなんだろう? なら原作と乖離してい
るが孤高の人や原作に忠実な神々のがもうあるわけだし、ヤマ○ススメしかり、ゆる

○やん、山○食欲なんかも登山プラスで面白いわけだし」

あ、話に乗っかるんだ。

プリシラ「ほう・・・アタイの前でかえで様をデイスるとは、度胸だけは誉めてやろうなの」

不死人「デイスってねーわ！これを見ろ！」バツ！

主は懐から何やら青色の衣類を取り出すと半妖精に突きつけた。

プリシラ「あ、あ・・・そ、それは・・・聖典第二十七合目で登場した日本が世界に誇るモン○ル製のレインウェア青色サンダー○ス！山行を重ねても命綱とも言えるレインウェアを買いもしないクソあおいを見かねて女神かえで様がお古を分け与えたアイテムなの！」

不死人「ふ、僕の中ではかえでさんが僕にお古をくれたのさ・・・という設定！」

プリシラ「そ、そんな歩み寄りがあつたなんて・・・」ガクリ

不死人「分かってもらえたかな？」

プリシラ「ええ」ガシン！

主と半妖精は固い握手を交わしおった。

え？なにこれ？

ダークソウル 続く

ダークソウル 真相編

ダークソウル 真相編

不死人「なーんか最近、人の話をちゃんと聞くように心掛けたら分かってきたかも」
蜘蛛姫「ふーん、進歩してんじゃん、で、何が分かってきたの？」

不死人「ふふ、どうもね、僕って世界を救うためにここに来たのかもしれないだ……」
蜘蛛姫「……うんうん、そうだね、みんな通る道だよね」

不死人「そんな中2病みたいに言わないで！」

蜘蛛姫「いやー、痛いわー、世界を救うとか、選ばれた戦士だとか、ここは仮想世界だとか、転生したらとか、いたたたたたたー、だよ？」

不死人「マジ?!」

蜘蛛姫「うん、まあ、男の子だもんね、仕方ないよ、普通普通、恥ずかしがる事じゃないわよ? 成長の証だから、身体の自然な反応だから」

不死人「性的なニュアンスで慰めないで! そんな相談してないから!」

蜘蛛姫「お薬出しておきますね、ちゃんと服用して下さいね」

不死人「病んでないから！」

蜘蛛姫「・・・あのさー、いちおう付き合いのある私だから構ってあげてるけど、あまり付き合いの無い人にそんな話したらドン引きだよ？」

不死人「そうかなー」

蜘蛛姫「うん、ドン引き、もしくは通報・・・まあいいわ、じゃあさ、聞くけど何でそんな風に考えたの？」

不死人「うん？・・・えーつと、なんかこの世界には鐘が2個あってさ」

蜘蛛姫「ふんふん」

不死人「それを鳴らすと違う世界？とかに行つて、えつと色々な事が起こつて・・・世界を救う？」

蜘蛛姫「？」

不死人「・・・いや、待つて待つて、ちゃんと話すから」

蜘蛛姫「うん」

不死人「えつとね、まず、うーんと、この世界はドラゴン？が支配していてね」

蜘蛛姫「？」

不死人「たぶん、む、昔の話のことで・・・」

蜘蛛姫「うん」

不死人「それで、ドラゴンは、えっと、なんか悪い奴らで」

蜘蛛姫「ほう」

不死人「それでドラゴンは倒されて・・・」

蜘蛛姫「良かったじゃん」

不死人「うん」

蜘蛛姫「・・・」

不死人「・・・」

蜘蛛姫「・・・」

不死人「・・・」

蜘蛛姫「・・・え？終わり？」

不死人「あれ？違う違う。えっと、その・・・ドラゴンは倒したんだけど、人が世界を支配するようになって」

蜘蛛姫「人が？」

不死人「ん？」

蜘蛛姫「ごめん、いいわ続けて」

不死人「うん、それでダークリングが人間に出てくるようになって」

蜘蛛姫「あなたにもある不死人の証みたいなの？そのうち亡者になるってやつ？」

不死人「え？うんそう」

蜘蛛姫「そのダークリングが治る方法があるっての？」

不死人「へ？そうなの？」

蜘蛛姫「いやいや、あなたが言い始めたんだからね？世界を救うってさ」

不死人「そうだけど、ダークリングを治す事なの？」

蜘蛛姫「私だって此処から動き回れる訳じゃないから考えるだけだけどさ、今、世界ではダークリングが現れる人間が増えてきて困ってるんですよ？即ち人間の亡者化の加速、増大」

不死人「うーん、増えてきてたのかなあ？昔からあることをだっただよな気がするけど・・・」

蜘蛛姫「けど他に差し迫った人間界の危機とか無いでしょ？」

不死人「いやあ結構あるよ？盗賊とか魔物が領地に攻め込んできたりしてさ」

蜘蛛姫「それはあなたがいた地域での話でしょ、そういう局地的且つ恒久的な危機とかじゃなくて、もつと人間の存続が危ぶまれるような危機としてはダークリング発現の増加が考えられるわけでしょ？だって人間がどんどん亡者になっちゃうんだから」

不死人「うん」

蜘蛛姫「……理解してないのに、うんって言ったら後から困るのはあんたなのよ？」
不死人「えっと、ダークリングが一番の困り事、その他は頑張ればなんとかなる……」

蜘蛛姫「そう、理解できてたのね……で、それでだ、ダークリングを治す事又はダークリングを発現させなくする事は人間、即ち世界を救うことにイコールとして、あんたに問う、あんたは何で世界を救うことが出来るって思った？それ即ちダークリングを無くす方法でもある可能性が大だからね?!考えろ！」

不死人「……え？」

蜘蛛姫「あんたがスカスカのスポンジ脳みそで考えた理屈を思い出せ！それが真で無くて、何らかの解決策の一手の始まりになるかも知れないのよ！誰から何を聞いた？何を聞いてそう思った？何を見て聞いてその考えに至った？頭を回しなさい！あんたのダークリングが治るかもしれないのよ？亡者にならずに済むのよ？考えて！」

不死人「……」

蜘蛛姫「考えてよ！あんた最近何処に行っていた？会った人は誰？どんな会話した？……ううん、人だけじゃなくて、どんな悪魔と戦った？それを見てどう思った？風景で心に残った物とかは？なんかあるはずなのよ！絶対に……って、あんた何ボケツとしてんのよ?!あんたが亡者にならなくて済むかも知れないのよ？思い付かないなら

取得したアイテムでも並べてそこから何かの起点を見つけろ！」

不死人「・・・そんなに・・・ひっく」

蜘蛛姫「は？何？聞こえない！大きな声で言いなさい！」

不死人「そんなにポンポン言わんでも・・・ぐすん」

蜘蛛姫「あん？」

不死人「そんなにポンポン言わんでもエエじゃないか・・・」

蜘蛛姫「へ？」

不死人「そんなにポンポン言わんでもエエじゃないかーっ!!」ウエーン

不死人は号泣しながらおもむろに武器と盾を地面に投げ捨てると、両手を上げて腰をクネクネと揺らしながら軽快ともとれるステップで蜘蛛姫の前でグルグルと円を描きながら踊り始めた。

不死人「そんなにポンポン言わんでもエエじゃないか！エエじゃないか！」アヨイヨイヨイヨイ

不死人「そんなにポンポン言わんでもエエじゃないか！エエじゃないかーっっ！」アヨイヨイヨイヨイ

不死人「障子を張り替え、エエじゃないか、エエじゃないか」アソレソレソレソレ
不死人「張つたらほじくれ、あ、エエじゃないかエエじゃないか」ヨイヨイヨイヨイ
不死人「皆の衆、天から御札が降りましたぞえ、エエじゃないかエエじゃないか」ヨ
イヨイヨイヨイ

不死人「そんなにポンポン言わんでもエエじゃないかエエじゃないか」アソレソレソ
レソレ

蜘蛛姫は不死人が亡者にならずに済む方法の欠片でも掴めるかとヒートアップした。
だから不死人を追い込むほど問い質し、詰問した。全てを聞き出して推理推察のパート
にしたかった。不死人が掴んだ何かを絶対に逃さないと思っていた。

だつて、こいつが亡者にならなくて済むかも知れないもんね。絶対に明らかにする！
それでこいつが元の世界に帰っても構わない！そんなのは関係ない！

しかし結果、不死人は号泣しながらエエじゃないか音頭を踊り狂うこととなった。
蜘蛛姫は不死人がポロポロと泣きながら踊る姿を見て、ため息をひとつ。

蜘蛛姫「あ、それぞれそれぞれ」

パンパンと手拍子を打ちながら合いの手を入れるのでした。

ダークソウル 契約編

ダークソウル 契約編

そもそも私に抵抗なんて出来なかったではないか。

鼻腔にじんわりと広がる血の鉄臭さを感じながら彼女は投げ込まれた穴の底でぼんやりと考えた。

彼女が街を歩いていたところ、いきなり背後から何か大きな固い物で後頭部を殴られた。

・・・多分。

駄目だ、記憶が曖昧だ。大きなショックを与えられるとその時の記憶が飛ぶというのは本当だったのか・・・

いや、風景の記憶はある。石畳を歩きながら足元を見ていた視界が急に暗く狭まり、石畳が視界に迫ってきた。

うん、覚えている。

わー、顔からいっちゃうなー

彼女は黒く染まり薄れていく意識の中で考え、両手を出すことも叶わず石畳に頭部から倒れ込む。その衝撃に視界が真っ黒になり意識を手離れた。

周りで人の怒声が聞こえたような気がするが何を言っていたのかは分からない。

それからどれ程時間が過ぎたのか・・・

うつすらと彼女の意識が戻り始めたときは既に細い腕を後手に回され手首を固いロープの様な物で纏めて縛られ、足首も同様にグルグル巻きにされていた。

???

徐々に覚醒していく意識が現実には追い付かず、混乱していた彼女ではあるが、妙な浮遊感を感じる事が出来た。

あー、抱え上げられて左右にブラブラ振られているから・・・

彼女の華奢な身体は足と肩をそれぞれ誰かに持たれて左右に揺らされている。

彼女はまだはつきりとしめない意識の中、姉と二人で馬車の荷台に小麦粉袋を乗せ上げるとき、こうやって小麦粉袋の端を掴んで左右にブラブラ振ってから勢いをつけて小麦粉袋を荷台に投げ上げたなあ・・・と思い出す。

小麦粉袋？

今は私が振られてる？
なんで？

彼女の疑問は次の瞬間に解消される。彼女の身体を左右にブラブラ揺らしていた手が一斉に離されると、彼女の身体は揺らされていた遠心力で軽く山なりに飛び、当然それから落下し始める。

急速な落下感と同調して彼女の意識は急速に覚醒していくが身体は動かない。

投げ捨てられた?!

彼女の頭の中に、落下死、飛び降り、グチャグチャ、痛い等の単語が止めどなく溢れ点滅し息が出来なくなる。

と、すぐに彼女の肩口から地面に落ちる衝撃があり身体はドサリとうつ伏せに地に横たわる。

引つ掛かった・・・？違う・・・ここが底だ・・・穴に投げ込まれたんだ・・・そんなに深くなかった？

彼女は首が上手く動かなかったので血に霞む視線をゆっくり回して自分の状況を把握した。

手足を縛られて穴に投げ込まれた自分の未来はなるべく考えないようにしておこうと考える。そして意外に冷静な自分にビックリしていた。

多分、背後から殴られて、意識を失わされて、手足を縛られて、穴に投げ落とされて：：彼女は切れ切れの記憶を繋ぎ合わせて、今自分に降りかかっている危機を把握している。

それと同時に少しだけ身体の力が戻り始めた彼女は後ろに回された両腕に力を入れてみる。

右腕に全く力が入らない、感覚としては右腕がもげたかの様だ。残る左腕だけで力を込めると手首を縛る固い縄のきつさだけは良く分かった。

両足はそもそも力を込めることが出来なかったが足首が固く縛り付けられているのは感触で分かった。

駄目だ、身体が使い物にならなくなっている・・・

横向きになった首はピクリとも動かず、地面に接する左目は厚い肉を張り付けられたように多分酷く腫れ上がっていると想像できた。

薄く開けられた右目で上方を見てみると彼女を穴に投げ込んだ者の足が辛うじて見えた。

だいたい、深さ3メートルってところか・・・

両手両足は大分傷んでいる、折れている箇所もいくつかあるだろう、そもそも両手足首が縛られて動かせない、身体に力が入らない、痛みを感じていないのは救いだけど、こ

の穴の深さから今の状態で這い出すのは困難、つてか無理。

着ていた聖女のローブは破れてはいない様だが見える範囲では泥で汚れていた。勿論ナイフなんて隠し持っていない。

彼女はどんどんと情報を増やして上書きしていくが全く光明が見えてこない。

あー・・・これは詰んだなあー

恐怖や怒りにまで精神が追い付かない彼女にドサリと土が降り掛かり始める。彼女を地中に埋めようとする土が降り注ぐ。断続的にだが次々と彼女に落とされていく土塊のスピードから複数人が作業をしているようだった。

埋められるのかあ・・・息が出来なくて苦しいのかなあ、苦しいだろうな・・・

顔に掛けられた土が右目に入り込み、唯一の視界を奪われた彼女は逃れようのない未来を思う事にする。

原因について、彼女は恐らくは母親の思想に敵対する組織の行動だと思いつているが母親を恨む気にはなれなかった。

母親は信念の人だったから、仕方がないと諦めの気持ちもある。

せめて、大好きだった母親と大好きだったクラーグお姉ちゃんの事を考えていようと彼女は鼻腔に入り込んでくる土を感じながら思った。

ここで意味なくもがいたり、抗う姿を相手に見せるのは相手を喜ばすだけの様な気が

したので、彼女は一切動かないようにした。

まあ、そもそもが動けないんだけどね。

土が身体を覆ってピクリとも動けなくなり、満足に空気を吸い込むことも出来なつても、案外すぐには死なないものだなと彼女は考える。じわじわと身体にのし掛かる土の重みが増していき、彼女は全く身動きが取れなくなる。

口内は唇を閉じていたので土が入りきらず、その隙間からゆっくり空気を吸い込み求めていた。ほんの少しだが空気は吸えていた。

それでも確実に死は彼女を包み込もうとしつつあった。

やっぱり悔しいなあ・・・

閉じていた瞳に涙が浮かんできてしまう。抗い様のない死に、自分をこんな目に遇わせた奴達に怒りがフツフツと沸いてきてしまう。

『悔しかろう』

薄れいく彼女の意識に噎れた男か女かも分からない声が割り込み響く。

彼女は幻聴を疑い、土の中ではあったが、もうすぐ命を終わらせられるところであったが、心を落ち着かせて澄ませてみる。

『悔しかろう、助けが必要か?』

彼女は自分の死ぬ間際の幻聴だという思いを捨てきれぬままで答える。思考を言葉として伝える。

助けてくれるの?

『助けよう、お前が望めば』

あなたは?

『お前達がデーモンと呼ぶ忌み嫌われたもの、の様なもの』

・・・見返りは?

『いらぬ。お前がデーモンの様なものに屈して命を長らえたという事実が快絶』

お母さんの事と関係あるのかな、私はあまり関係ないよ?

『知っている』

ふーん

彼女は内心で助けを求め泣き叫んで絶叫する自分を押し殺して殺して平静に心の言葉を紡ぐ。不思議と平静を装えば心は平静になっていくようだった。矜持すら感じ始める。

助けるって、ここから掘り出してくれるの？

『願え、デーモンの様なものに、ここから出たいと、身体の傷を癒したいと』

ガクンと彼女の意識が一気に薄れ始める。あまり時間が無いようである。死はもうそこまで来ているようだった。

それじゃあ……さ……

断続的になっていく意識の中で彼女は思考を続けていく。

蜘蛛姫は不死人がいない時、自らの蜘蛛の脚に寄り掛かって眠るときがあった。

自分の身体を抱き締めるようにして蜘蛛はスウスウと静かな寝息を立てる。俯いている為、蜘蛛姫の白く輝く白髪が幸せそうな顔にかかる。

「むにやむにや……もう、食べれないわよ……」

一応、デフォオな寝言を呟く蜘蛛姫。そんな蜘蛛姫の、彼女の深く閉ざされた深層意識には遠い昔、まだ人間だった頃の意識の欠片が鈍く輝き、時折蠢いていた。

そんな蜘蛛姫を訪れた不死人が眺める。

不死人「うわ……こいつ白眼剥いて寝てる、うわー、女の子の白眼寝顔、引くわー」

蜘蛛姫「……ふがつ……」

不死人「……よだれが垂れてる……ないわー……」

蜘蛛姫「……えへへ……」

不死人「……まあ、幸せそうな寝顔ではあるか……って、おーい起きてよー、遊

ぼうぜー」

蜘蛛姫「むにやむにや、あと5分……」

不死人「デフォ過ぎる寝言?!」

土の中で彼女は願った。

・・・・アンタ、私の・・・ツレになりなさい・・・それで・・・助けて・・・それで、
一人に・・・しないで・・・下さい・・・この願いは・・・忘れさせて・・・何も知ら
ないままで、アンタと・・・友達・・・に・・・

彼女はデーモンの様なものの笑い声を聞いたような気がした。

ダークソウル 女の過去編

ダークソウル 女の過去編

不死人「そう言えばさ」

蜘蛛姫「総入れ歯サー？」

不死人「すごいとこ持ってきたな!? どんな聞き間違いだよ! そしてどんなサークルなんだよ?! それとも敬称のサーか？」

蜘蛛姫「ん？」

不死人「そう、い、え、ばっ！」

蜘蛛姫「あー・・・そう言えばね、知ってる知ってる。もうそんな季節なのねえ、最近良く見かけるようになってきたもんねー」

不死人「どんな季節だよ?! ただの言葉のつかかりだよ! 言い回しだよ! 相手の言葉を受けて連想する話に繋ぐときに使うだろ? 唐突に話題を始める時にも使うし、今回は唐突に話題を始める「そう言えば」だっ！」

蜘蛛姫「そう言えば、あんたお姉ちゃんの混沌の刃、ちゃんと研いでる？」

不死人「マスターするのが早いな！つてか、今まで普通にそう言えばって使ってたよね？」

蜘蛛姫「素股マスター？は？何言ってるのあんた、どんなご主人様よ」

不死人「言ってるよ！逆にどんなマスターか聞きたいよ！？習得するマスターだつ！言ってもない言葉にケンカを売るな、あと女の子は下ネタはやめろ」

蜘蛛姫「はい」

不死人「人の話を折る話の広げかたもどうかと思うぞ・・・」

蜘蛛姫「うーん、でもさー」

不死人「なんだよ」

蜘蛛姫「私としては、あんたが話を始めようとする、なーんか警戒心が跳ね上がるのよね」

不死人「なんだよそれ・・・」

蜘蛛姫「ん？否応なしにおっぱいを揉まれ続ければそういう気持ちになるんじゃないのかな？」

不死人「・・・」

蜘蛛姫「あと、真面目な話をしようとしたらエエじゃないか音頭を踊り狂われたりとか」

不死人「……」

蜘蛛姫「人が心配してたら、エッチいことしようと企んでみたり」

不死人「……」

蜘蛛姫「そんなことばつかだと警戒されちゃうと思わない？」

不死人「……」

蜘蛛姫「おい、あんたに言ってるのよ？」

不死人「……」

蜘蛛姫「……」

不死人「……」

蜘蛛姫「返事がない。ただの屍のようだ」

不死人「いや、死んではないないぜ……僕の罪深さを悔やんでいたところさ」

蜘蛛姫「格好良く言ってみても、やったことは変わらないわよ？」

不死人「そうだった。」

蜘蛛姫「それで、何がそう言えばなのよ？」

不死人「え？あ、聞いてくれるんだ」

蜘蛛姫「まあね」

不死人「……いや、あのね、フト思ったんだけどさ。前にも少し話したけど、僕は

ここに来る前は騎士団で騎士をやってたじゃん」

蜘蛛姫「あの妄想話？」

不死人「妄想じゃない・・・」

蜘蛛姫「ふーん、まあいいや、それで？」

不死人「うん、それで蜘蛛姫は昔はどんなのだったのかなあって、フト思ってたさ」

蜘蛛姫「・・・ほほう、私の過去を知りたいと」フフン

不死人「え、なんでドヤ顔？鼻の穴膨らんでるよ？」

蜘蛛姫「照れるな照れるな、気になる女の子の昔を知りたくなっちゃったのね、男の子だもんね」

不死人「へ？あー・・・まあ、うん」

単に不死人は台詞の通りフト思った事を聞いただけなのだが、どうやら蜘蛛姫は先走った思考に捕らわれた様である。けど、不死人も蜘蛛姫の過去に興味が無いわけではないから強ち間違いと言わなくてもない。

ただ、何か色々嫌なこととかあったなら聞くのは申し訳ないよなあ、と遠慮していたのだが。

このドヤ顔の態度なら問題なさそうだ。

蜘蛛姫「ふふん、そっか、そっかー、仕方ないなあ・・・じゃあ教えてあげよっかなあ・・・

実は私にはクラীগというお姉ちゃんがいたのです！」

不死人「知ってる、クラীগお姉ちゃんのソウルは今、僕が使ってる混沌の刃になってるよ」

蜘蛛姫「くぷぷ、慌てない慌てない、そしてなんとお母さんもいたのです」

不死人「・・・まあ、いただろうね・・・どんな人だったの」

蜘蛛姫「へ？お母さん？・・・えっと、あれ？・・・あの・・・女の人で・・・」

不死人「うん」

蜘蛛姫「女性で・・・お父さんと結婚してて・・・私を生んで、えっと・・・うーん、お姉ちゃんも生んで・・・」

不死人「・・・なんかあまり情報が増えてないぞ？」

蜘蛛姫「あれれ？ちよつと待ってちよつと待って、ド忘れしてるだけだから、えーつと」

不死人「まあ、蜘蛛姫、半分デーモン化してるようなもんだから・・・記憶も曖昧になるのか・・・？」

蜘蛛姫「そうだ！私のお母さん一族は元々天空の城に住んで人類の支配者層だったんだけど、人は大地と生きるべきだって天空の城から下りて」

不死人「蜘蛛姫子、それダークソウルとちやう、ラ○ユタや・・・」

蜘蛛姫「あれー?・・・違う違う、ちよつと間違えただけ」

不死人「うん」

蜘蛛姫「・・・あつ!乙事主様っ!!」

不死人「お母さん、猪だったの?!」

蜘蛛姫「あれれー?違う、間違い、お母さんは人間で・・・」

不死人「うん」

蜘蛛姫「えーつとお・・・なんかエライ人で・・・何かをしようとしていて・・・」

不死人「ほう」

蜘蛛姫「確か・・・異世界への転生を・・・」

不死人「今、そんな話ばっかだよ!流行りに乗っかるな!」

蜘蛛姫「むむむ?違ったかなー?確かニココ動画で見た覚えがあったのに・・・」

不死人「蜘蛛姫の過去って動画サイトにアップされてんだ」

蜘蛛姫「うーん・・・あ、駄目だわ、なーんか断片すら思い浮かばない・・・」

不死人「そうなの?」

蜘蛛姫「あのね、元は人間だったのよ?人間の姿でクラーグお姉ちゃんと遊んだりお

手伝いしてたの覚えてるのよ」

不死人「ほう」

蜘蛛姫「お母さんも・・・顔はぼんやりだけど浮かぶわ、何か世界に関わることをやろうとして・・・た？」

不死人「うーん、記憶が曖昧なのは今の蜘蛛姫の状態になったことが原因か、他の理由があるのか、どうなんだろう」

蜘蛛姫「この姿になったのもうろ覚えなのよね・・・あと、他にもお姉ちゃんがいたような・・・」

不死人「え？マジ？」

蜘蛛姫「うん、確か何人かいたような気がするけど・・・駄目だ思い出せない」

不死人「・・・その、お姉ちゃんズはお前寄りなの？クラーグお姉ちゃん寄りなの？ちゃんと思い出せ！」

蜘蛛姫「それ重要なところ？」

不死人「当たり前だ！残念無双か大当りか、今後のモチベーションが全然違ってくるだろ?!」

蜘蛛姫「ほーん、私とお姉ちゃん、どっちが当たりでどっちが外れか聞いておこうか、あと、その判断基準も」

不死人「・・・」

ダークソウル 一騎当千編

ダークソウル 一騎当千編

不死人「亡者の軍隊を作れば、攻略余裕じゃね？」

蜘蛛姫「……バッドエンドしか見えないかなー」

不死人「……そうか？」

蜘蛛姫「どうしたの唐突に、何かあったの？」

不死人「いやね、けっこう亡者って組織的に動いてるっぽいから、あれ？こいつら敵味方の区別とか出来るんじゃない？じゃあ、味方にも出来んじゃない？って考えたの」

蜘蛛姫「へ？亡者って組織的に動いてるの？あいつらって生きてる者を憎悪して取りあえず襲って来るじゃないの？」

不死人「んー、基本そうなんだけど、弓兵と剣士とかバランス良く配置されてるし、元々の所属？とかで固まってるしさ」

蜘蛛姫「そうなんだ」

不死人「うん、あ、バランス良くっていうのはこちらを確実に殺りに来るのにバラン

ス良くって意味ね」

蜘蛛姫「ふーん、人だった頃の経験とか記憶が関係するのかな」

不死人「かもな、そう考えると亡者連中を味方にする案も全くの不可能って訳じゃ無くない？」

蜘蛛姫「・・・無くなくないかも」

不死人「無くなくないだろ」

蜘蛛姫「ところでさ、多分なんだけど」

不死人「うん」

蜘蛛姫「あんた多分、いえ、高確率で『幾千の亡者兵士を従えて颯爽と先頭を駆ける自分』を想像してない？」

不死人「そうそう、あの高名な指輪的なシーン」

蜘蛛姫「あの指輪的なね・・・」

不死人「格好いいよね！」

蜘蛛姫「でも、この世界の亡者連中を味方にしたところで、単にブーツとつつ立つてる集団が出来上がるだけじゃない？まあ、敵が近づけばワラワラと群がって攻撃するだろうけど」

不死人「え？何か思ってたのと違う・・・」

蜘蛛姫「あんた、今までに近づいていない亡者が攻撃してきたことあった？」

不死人「えーと・・・無いな、こっちが近づいてアイツらのテリトリーに入ると攻撃してくるって感じかな」

蜘蛛姫「でしょ？じゃあ、やっぱり指輪的な先頭を駆けるシーンの実現は無理よね」

不死人「そうかな・・・」

蜘蛛姫「そもそも、あんたが手こずる相手って上級デーモンぐらいでしょ」

不死人「うん・・・あれ？亡者連中がデーモンに蹴散らされてるイメージしか湧かない」

蜘蛛姫「亡者達が弾かれ飛ばされながらもチクチク攻撃して隙を作らせて、あんたが

とどめを刺すと」

不死人「あれー？何か凄く格好悪いイメージになってるぞ？」

蜘蛛姫「でしょ？」

不死人「やめやめ！亡者仲間作戦、しゅーりょー」

蜘蛛姫「・・・ふ、仕方ないなー、もう仕方ないなー、本当に世話が焼けるわねー」フン

不死人「え、なんでドヤ顔？」

蜘蛛姫「亡者なんかより、この私があんたのバディとして、あんたの先陣を駆け抜け

てあげるわ！」

不死人「いや、お前デコピンで絶命するくらいのステータスだからやめて」

蜘蛛姫「そんなこと無いもん！ミルドレッド師匠に修行してもらってるもん」

不死人「バストアップの修行だよな？」

蜘蛛姫「・・・なにさ、ポッチが辛い、寂しいって言うから構ってあげようとしたのに！」

不死人「上から目線?!待て待て、話がおかしい、そんなこと一言も言っていないよね？」

蜘蛛姫「ポッチで寂しい↓亡者と友達になりたい↓いっぱい友達作るんだ↓いやいや私がいるじゃん↓今に至る」

不死人「広義の拡大解釈過ぎる！それ法曹界じゃ駄目なヤツだから！」

蜘蛛姫「そう言ってたもん！」

不死人「ええー・・・」

蜘蛛姫「言ってた！ニュアンス的に！」

不死人「ええー・・・はあ、分かった分かった、言ってたよ、ニュアンス的に・・・」

取りあえず今日は混沌の刃を研ぐのを手伝ってくれよ」

蜘蛛姫「うん！」

ダークソウル 剣豪編

ダークソウル 剣豪編

城塞の中、不死人は巨人兵にトドメを刺すと同時に素早く城塞の壁の隙間に身体を押し付ける。

瞬間、鎧の背中を巨大な鉄の矢が擦り掠り、ギンツと鉄と鉄が高速で擦れる音が響く。不死人の背中から鉄が摩擦熱で焦げつく臭いが漂う。

不死人「弓鳴りの音が丸聞こえだつてーの、当たるかよ」

不死人は己の言葉で己を鼓舞し、張り付いていた壁から身を離して大弓矢の飛んできた方向へと駆け出す。

先程不死人がトドメを刺した巨人兵が地響きを立てて地面に倒れた後、白い光の玉の群れとなつて消滅していく。

その光の中を不死人は駆け抜ける。

既に不死人は、巨人兵の攻撃をローリングでかわし混沌の刃を巨人兵の鎧の隙間に突

き入れながら、視界の隅に黒騎士が上方から弓矢で不死人に狙いを定めているのに気が付いていた。

なので、飛んでくると分かっている弓矢など避けて当然であった。しかしすつただけどな。

不死人の頭の中には師匠の言葉が刻み込まれている。実際に人切り包丁で身体を刻まれながら、刻み込まれている。

ミルドレット「マエダケミル、ダメ、ミギノオツパイミルトキハ、ヒダリノオツパイモ、ミテル」

ミルドレット師匠の斬撃を何とか刃で受け止めたと思った瞬間、横合いから師匠の分身に脇腹を蹴り上げられて不死人は吹っ飛ばされる。

ししよー、頼むから1秒間に必殺の斬撃を3発も撃ち込みながら分身するのは止めて下さい!!ボス級でもいませんよ?!こんな確実に殺しにくる不条理攻撃!

不死人は鎧越しの衝撃でもアバラを何本か折られ、血ヘドを吐かされながらミルドレット師匠を見上げる。

ミルドレット「テヘペロ」

不死人「師匠お・・・タイミングも用法も間違ってますー・・・」

遠山の目付け

遠くにある山を見るときに如く、意識して視野を広げて剣先だけに視野を狭めない。不死人がこれを体得して実戦に生かせるようになるまでミルドレットにどれだけテヘペロされたらどうか。

不死人は迷彩に巨人兵の魂の塊の中を抜けると黒騎士めがけて階段を駆け上がる。対する黒騎士、ギギギギギと大弓の弦を引き絞り、不死人が階段の踊り場で方向転換するタイミングを狙い射つ。

不死人は矢の鏃の風切り音を兜の直ぐ脇で聞きながらも歩を緩めない。また、不死人の眼は黒騎士の姿を捉えてから見開かれっぱなしで1度も瞬きもしていない。

だつて、瞬きなんかしちゃうとミルドレット師匠に刃を跳ね上げられてしまうからね！
不死人は大弓の黒騎士の他に敵がいない事を確認しつつ、混沌の刃を鞘から抜き出すスピードを乗せた居合の一閃を黒騎士に撃つ。

黒騎士は弓矢でもう一撃射つか、剣を引き抜いて迎え撃つか、刹那迷う。それは不死人に対して致命的な隙以外何物でも無かった。

黒騎士は剣を握ったまま、連日の鍛練で鍛え上げた左腕が肘の辺りから跳ね飛ばされ、ていくのを見る。見させられる。

体勢を立て直すことも、息つく暇も与えられず黒騎士は銀色の一閃が自分の喉元に伸びるのを感じたのを最期に意識を絶たれた。

不死人は混沌の刃を黒騎士から引き抜き、黒騎士が膝から崩れ落ち、地に伏して魂の塊を撒き散らしながら消滅していくのを見て混沌の刃を鞘へと納める。

息一つ乱していない不死人を見て黒騎士は何を思っただろうか。

カタリと混沌の刃が『役不足じゃのう』と鼻で笑うかのように震えた。

不死人「ふふ、強すぎるのも困りものだよ……なにせ魂を削る様な戦いが出来ないからね……」

蜘蛛姫「え、大丈夫？主に頭のことなんだけど」

不死人「ははは、面白いことを言うお嬢さんだ、くくくく、全く君ぐらいだよ僕にそ

んな口をきくのは」

蜘蛛姫「チョップ」ブン

不死人「ふ、止めたまえ、そんなぐぼっがはあっ!!」

蜘蛛姫は蜘蛛の足を振り上げてから撃ち下ろす打撃を繰り出す。

不死人は余裕で刃の鞘で弾こうとし、一撃を脳天に食らい地べたに叩き付けられる。

不死人「がはっ・・・?!」

蜘蛛姫「わ、大丈夫?! までもに入っちゃった、ごめんね」

不死人「え・・・? い、今、お前の脚が鞘をすり抜けたぞ・・・?」

蜘蛛姫「あー、最初残像1回入れたからそっちに目を取られちゃったかな?」

不死人「はあ?! 攻撃で残像って・・・ええーっ?! なにそれ、どこで覚えてきたんだよっ
?」

蜘蛛姫「へ? ミルドレッド師匠の修行だけど」

不死人「お前の修行ってバストアップの修行だよねっ?!」

蜘蛛姫「うん」テヘヘ

不死人「なんでバストアップの修行で残像剣を撃てるようになったんですかっ!」

蜘蛛姫「へ? これはバストアップの胸筋を鍛えるトレーニングの一環でステップ3ぐら

いだよ?」

不死人「全部で何ステップあるの?!」

蜘蛛姫「えーと、10ステップ」

不死人「10ステップをマスターすればどんな一撃が撃てるんだよっ?」

蜘蛛姫「10ステップ目でバストが引き上がるんだ」

不死人「おかしいよねっ!バストの引き上げに至るまでの道程がどう考えてもおかしいよねっ!」

蜘蛛姫「そんな事ないよ?ちゃんとバストも引き上がっている感じだし・・・少しだけ」モジモジ

不死人「そんな可愛く照れながら言われても・・・」

蜘蛛姫「次のステップで残像にソニックブームを乗せるよ!それでまた、バストアップするんだ」

不死人「あの恥女は何を修行させてんだっ!後、お前もどれだけ必死に修行しちやっただよっ!」

蜘蛛姫「うーん、これが出来なきや殺されるぐらいの気持ち?」

不死人「必死すぎる?!どんなバストアップ修行だよ!!」

!!ヌルンヌルン蠢いて息ずいてもつともつとテカリを光沢の陰影を露にして下さ
いっつ!!あと出来たら先つちよを強調できる衣装でお願ひしますっ!!足とか顔とか
後回しで良いのでまずはおっぱいを何とかがして下さいっ!!分かります分かりますっ
!おっぱいだけに拘るのはバランスがおかしくなってしまうのは、ただだけ拘ってんだ
よと影で笑われることもっ、しかし、しかし、あえて言わせて下さいっおっぱいもま
もに造り込めなくてバランスが取れるのかとっ!!」

蜘蛛姫「・・・待つて待つて、540度話が回って訳分からなくなってるから」

不死人「一周回った後反対側まで行ってるね」

蜘蛛姫「いやいや、あのさ、えつと、多人数に粘着されてボコボコにされるのを何と
かしろつて話だったよね」

不死人「・・・?・・・え?」

蜘蛛姫「不思議そうな顔された!こいつ何言ってるのって、いま私が一番言いたいこ
とを表情で返された!」

不死人「理解されて・・・いない・・・だ、と・・・?」

蜘蛛姫「へ?いやいや、ちよつと待つてちよつと待つて、あれ、つながってるの?あ
れ?自然な流れなの?私の読解力?ちよつと待つてよ・・・」

不死人「・・・」

蜘蛛姫「……えーと、まず……あんたが……それで、んーと……、……で……」
 不死人「……」

蜘蛛姫「んー……」

不死人「……」

蜘蛛姫「んー……」

不死人「……」

蜘蛛姫「……」

不死人「……」

蜘蛛姫「……うん、よし、死んで」

不死人「あれ?!」

蜘蛛姫「どんなに頑張つて話のつながりを見つけようとしてもミミリも見つかんないわよっ！反語、倒置法、拡大解釈、誇大解釈、いろんな可能性を考慮して、かなーり好意的に解釈しようとしてもなんのつながりも関係性も見つけられないのよ！あんたが皆からボコボコにされていじめられる問題定義とその気持ち悪い欲望まみれの改善策に！」

不死人「行間読んだ？」

蜘蛛姫「会話に行間を求めるなーっ!!」

不死人「これが正解」

? 皆にボコボコにされる

←

? 逃げてても逃げててもボコボコにされる

←

? 何もかもが嫌になる

←

? 何もやる気が起きなくなる

←

? 次第に世界から隔離された生活を送るようになる

←

? ニート、無産市民まっしぐら

←

? 蜘蛛姫「このままじゃ不死人が駄目になっちゃう!」ガーン 頭の上に岩が落ちる

イメージ

←

? 蜘蛛姫「私が何とかしなくちゃ・・・よしつ、恥ずかしいけどおっぱいに的を書い

て不死人に攻撃の練習をさせるわよ」フンス

←

？ 蜘蛛姫「あ、でも、このちっばいじや不死人が興味を持たないかも・・・」

←

？ おっばいクオリテイ、略してオツテイの強化

不死人「分かった？」

蜘蛛姫「あたしはルナせんせいかーっっ!!!」

ダークソウル 男の矜持編

ダークソウル 男の矜持編

混沌の刃「クラーグ姉じゃ、今回は残酷な描写があるので苦手な者は飛ばすがよい」
混沌の刃「読み飛ばしたところで、なーんの不都合もないからの、このエスエスは……注意喚起はしたからの」

不死人はいつもの道、蜘蛛姫のいる洞窟に通じる沼地を足を取られつつも進んでいく。

相変わらず引き込まれそうな沈み具合に不死人は抗って足を前へ前へと進める。

途中、大きな岩石を投げつけてくる巨人は沼地に身を伏せてやり過ごす。

あー、昔騎士時代にこんな風に泥まみれの斥候とかしてたよなあと不死人の頭の片隅に過去の記憶がうつすらと甦る。

まあそれだけの記憶だ。

それ以上の過去の記憶の連想は今の不死人としての毎日の記憶に押し潰されていって浮かばない。

不死人「そんな暇は無いってね、よっ」

泥の沼地に伏せる不死人に這い寄る大型ヒルは不死人が伏せたまま突き出した混沌の刃に貫かれて苦し気にひくつく。

不死人が何度か混沌の刃を突き刺すとヒルは体液を撒き散らした後、ぐったりとその大きな体を沼地へと沈ませて動かなくなる。

幸い岩石を容赦なく投げつけてくる巨人は気付かず遠方へと歩み姿を消してくれた。

不死人「ふ・・・またつまらぬものを切ってしまった・・・」

泥とヒルの体液にまみれた不死人がニヒルに笑い、手にする混沌の刃が『いや、格好つける前に身体を洗えよ』とでも言うようにカタカタと震えた。

不死人「おつす」

蜘蛛姫「んあ？あー……うーん、んん」

不死人「……お前、完璧に寝てたな」

蜘蛛姫「んー……まあ私んちだし、なにに人間性？貢物？プレステ5？」

不死人「貢物の人間性だよ。プレステ5はまだ市場に出回ってねーよ、転売屋からは死んでも買わん」

蜘蛛姫それとなく涎が垂れていないか手で確認しながら話す、不死人一応それには気づかぬ振り。てか、ばつちり涎を垂らしてたけどな。不死人に涎属性はない。

不死人「はい、人間性」

蜘蛛姫「うん、ありがとね……って……あん？くんくん、あれ……んー？」

蜘蛛姫は嬉しそうに不死人から山盛りの人間性を受けとるがフト漂う異臭に臭いを嗅いでみる。

そして泥と訳の分からん体液でドロドロの不死人に気付く。

蜘蛛姫「ひとんちに汚物まみれで上がり込むなーっ！」

不死人「ええっ!?せつかく人間性持ってきてやったのに怒られた！てか、ここ洞窟み

たいなもんだろ、外だ外、家じゃねえよっ」

蜘蛛姫「ここはデザイナーナードさんがデザインしたデザイナーハウスです」

不死人「いや、まあ、ある意味正しいけど・・・家としてはデザインされていないだろ」

蜘蛛姫「入り口があつて階段があるもん、お姉ちゃんと私の部屋もあるもん、裏口もあるもん、家だもん」

不死人「一人で？」

蜘蛛姫「できるもん！」

不死人「世代を選ぶネタだよなあ・・・あー分かった分かった、ここはお前んちだよ。汚れたままで悪かったよ」

蜘蛛姫「うんうん、分かればよろしい。ほら、こつちおいで綺麗にして拭いてあげるから」

不死人「へ・・・？わ、わわっ、ちよつと待て」

蜘蛛姫は蜘蛛の脚を器用に伸ばして不死人を摘まみ上げるとピルピルピルと小刻みに揺らして汚れを落とし始める。

家を汚されて怒ったものの、わざわざ人間性を持ってきてくれる不死人を憎からず思うのは変わらない。

蜘蛛姫「水を掛けてから振った方がいいのかなあ」ピルピルピル

不死人「なananんんんかかかぎぎぎつつつつ」ピルピルピル

蜘蛛姫が不死人を持ち上げて小刻みに振ると不死人から泥とヒルの体液がビチヨビチヨと地面に落ちていく。

蜘蛛姫「くつ、この鎧の隙間のがしぶとい」ピルピルピルピルピルピル

不死人「おおおおおおおおお」ピルピルピルピルピルピル

身体を持ち上げられて小刻みな振動を与えられ続ける不死人。

なーんか振動マツサージみたいだなあとぼんやり考えていたところ不意に身体に変調が発生する。

原因【泥とヒルの体液が微量ではあるが口内に入る、継続的な微振動】

結果【お腹痛い、気持ち悪い】

不死人は考える。

あ、これ、屁しようとして大惨事になるやつ、酒飲み過ぎて背中をさすられた時のやつ、と。

不死人「ままままててててててててててて」ピルピルピルピルピルピル

蜘蛛姫「もー、暴れないの、落ちちやうよ」ピルピルピルピルピルピルピル

不死人「・・・・・・・・・・」ピルピルピルピルピルピルピルピルピル

蜘蛛姫「よーし、水いっちやうかー・・・・・・・・ん？」ピルピルピル・・・・

ここに来て蜘蛛姫、既に不死人の身体がぐったりと蜘蛛の脚に吊り下げられたままになっ
ていることに気付く。

不死人「・・・・・・・・」

蜘蛛姫「おりよ？」

不死人「えろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろ
ろ」

不死人の兜の隙間から勢い良く不死人のリバースした胃の内容物がブシャーッと噴
出する。

当然、兜の中の惨状は推して知るべし。

ビクビクと兜から汚物を撒き散らし身体を震わす不死人、蜘蛛姫茫然。

そして更なる惨劇が・・・・

不死人「・・・・・・・・・・んあ」ボブリボブボブボブ・・・・ブリリリリリ・・・・

蜘蛛姫「・・・・・・・・・・んああ」

似たような声を漏らす2人。

不死人のお尻の辺りから成人男性がさせてはいけない噴出音が響く。

ズボンと鎧のお陰でそれそのものが蜘蛛姫の目に写らなかつたのは不幸中の幸いかも知れないが、それが2人にとって何の救いになると言うのか・・・

その日、異様なまでに蜘蛛姫が不死人に優しかった。